松浦市文化財調査報告書　第18集

下　谷　遺　跡

国営農地再編整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

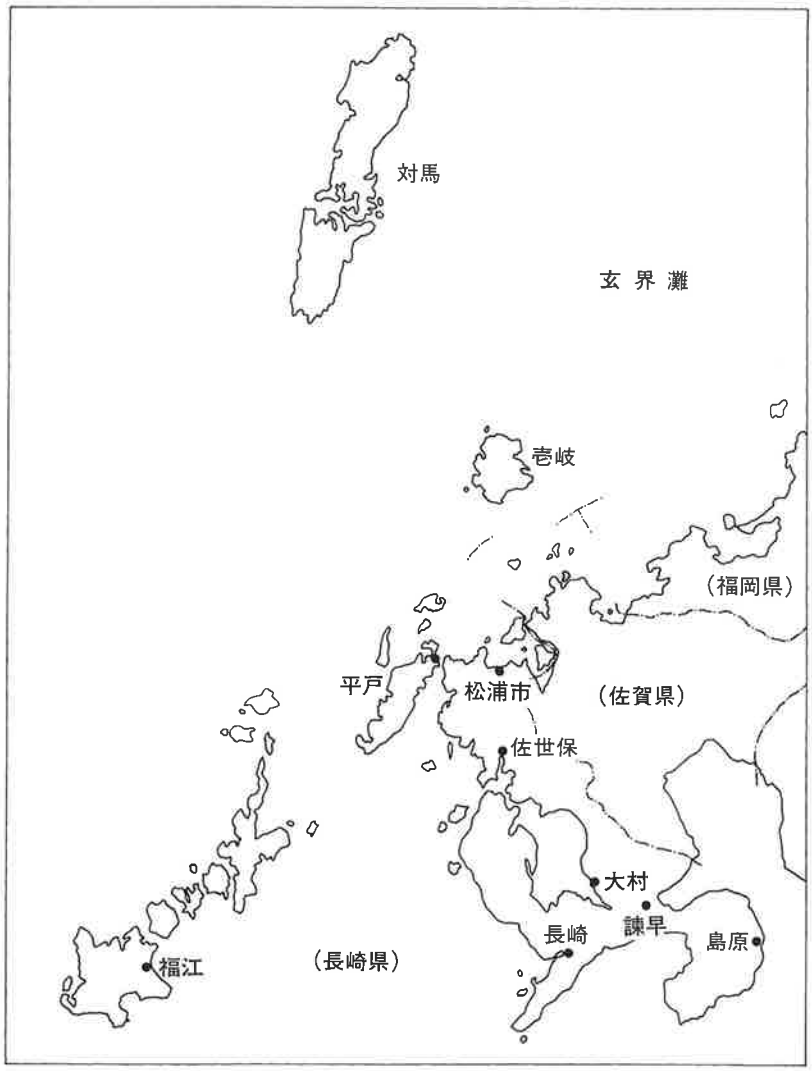
2002

長崎県松浦市教育委員会

松浦市文化財調査報告書　第18集

下　谷　遺　跡

国営農地再編整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



2002

長崎県松浦市教育委員会

下谷遺跡遠景

B13区北壁土層

7号貯蔵穴

発刊にあたって

このたび、国営農地再編整備事業西木場工区の工事に伴う『下谷遺跡』の発掘調査報告書を刊行することになりました。

この国営農地再編整備事業に伴う埋蔵文化財は、平成６年度の分布調査から始まり平成13年度の『下谷遺跡』の調査報告書の刊行まで８年間を費やすことになりました。その間には事業主体である九州農政局北松農地整備事業所の協力を得て、発掘調査を行った成果を『松浦・今福遺跡』、『小船遺跡』、『田口高野遺跡』調査報告書として刊行し、今回の『下谷遺跡』の刊行で一連の国営農地再編整備事業も終了をすることになりました。

この報告書が、学術研究に少しでも寄与でき、市民の皆様が埋蔵文化財に対する理解と認識、さらに地域の歴史を知る資料として、活用していただければ幸いに存じます。

松浦市における国営農地再編整備事業については、計画段階から埋蔵文化財の保護について九州農政局北松農地整備事業所に、特に配慮していただき、部分的な発掘調査にとどめて、それぞれの遺跡を盛土で保存することができたことを大変嬉しく思っております。

今回の調査に際しましても、関係者のご理解と、多くの方々のご参加を得て実施することができました。特にご協力をいただいた土地所有者の方々に対し心から感謝を申し上げますとともに、九州農政局北松農地整備事業所及び長崎県教育委員会をはじめ多くの人たちのご指導、ご協力を賜りました。ここに厚く感謝申し上げまして発刊のご挨拶といたします。

平成14年３月29日

長崎県松浦市教育委員会

教育長　黒　川　壽　信

例　　言

1．本書は、国営農地再編整備事業に伴い松浦市教育委員会が平成12年度に実施した長崎県松浦市御厨町西木場免に所在する下谷遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査及び本報告書作成にあたっては、九州農政局北松農地整備事業所と負担契約を結び松浦市教育委員会があたり、同事業所・長崎県学芸文化課・松浦市農林課・地元西木場地区の協力を賜った。

3．調査及び報告書作成は、松浦市教育委員会生涯学習課が行った。

4．本書の執筆は、分担して行い、各項の執筆者名は文末に記した。第Ⅳ章の自然科学分析は、（株）古環境研究所に委託し、分析結果を記載した。

5．遺構の実測は（株）埋蔵文化財サポートシステムと、明石拡子・中田敦之があたった。
遺物の実測は（株）埋蔵文化財サポートシステムと、明石・冨永百合子があたった。

6．遺構・遺物の製図は、宮崎朝美・吉野貴子があたった。

7．遺構・土層の写真撮影は、明石・中田があたり、遺物の写真撮影は、中田があたった。第Ⅳ章は（株）古環境研究所で行った。

8．出土遺物は、松浦市教育委員会がその保管の任にあたり、松浦市生涯学習センター（松浦市志佐町浦免1483番地１）郷土資料室にて一括保管している。報告書の刊行後は、市立調川小学校の郷土資料室に一部を展示予定である。

9．写真図版の縮尺は不統一である。

10．本書の編集は、中田の協力をえて明石があたった。

11．本書は、松浦市文化財調査報告書第18集にあたる。

目　　次

第Ⅰ章　はじめに
1．国営農地再編整備事業と埋蔵文化財 …… 1
2．国営農地再編整備事業に伴う発掘調査 …… 2
3．発掘調査に至る経緯 …… 3
4．発掘調査関係者 …… 4

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境
1．地理的環境 …… 5
2．歴史的環境 …… 9
3．確認調査 …… 13

第Ⅲ章　発掘調査
1．発掘調査の経過 …… 17
2．層　　位 …… 18
3．遺　　構 …… 20
4．遺　　物 …… 31

第Ⅳ章　自然科学分析
1．下谷遺跡の種実同定 …… 66
2．下谷遺跡の樹種同定 …… 70

第Ⅴ章　ま　と　め
1．ドングリ貯蔵穴について …… 73
2．出土遺物について …… 74

挿　図　目　次

第１図　松浦市地質図 …… 5
第２図　下谷遺跡周辺図（1/10000） …… 6
第３図　松浦市遺跡分布図（1/50000） …… 7～8
第４図　下谷遺跡位置図（1/10000） …… 13
第５図　確認調査区設定図（1/1500）・土層図（1/40） …… 14
第６図　確認調査出土遺物① …… 15
第７図　確認調査出土遺物② …… 16
第８図　下谷遺跡調査区設定図（1/1500） …… 17
第９図　調査区土層図（1/80） …… 19
第10図　遺構配置図①（1/100） …… 20
第11図　遺構配置図②（1/100） …… 20
第12図　１号貯蔵穴実測図（1/20） …… 21
第13図　２号遺構実測図（1/20） …… 21
第14図　３号貯蔵穴実測図（1/20） …… 22
第15図　４号貯蔵穴実測図（1/20） …… 22
第16図　５号貯蔵穴実測図（1/20） …… 23
第17図　６号貯蔵穴実測図（1/20） …… 23
第18図　７号貯蔵穴実測図（1/20） …… 24
第19図　８号遺構実測図（1/20） …… 24
第20図　９号貯蔵穴実測図（1/20） …… 25
第21図　10号貯蔵穴実測図（1/20） …… 25
第22図　11号貯蔵穴実測図（1/20） …… 26
第23図　12号貯蔵穴実測図（1/20） …… 26
第24図　13号貯蔵穴実測図（1/20） …… 26
第25図　14号貯蔵穴実測図(1/20) …… 27
第26図　15号・16号貯蔵穴実測図（1/20） …… 28
第27図　17号貯蔵穴実測図（1/20） …… 29
第28図　18号貯蔵穴実測図（1/20） …… 29
第29図　19号貯蔵穴実測図（1/20） …… 29
第30図　Ｂ13・14区遺物垂直分布図（1/80） …… 31
第31図　出土遺物①（1/3） …… 33
第32図　出土遺物②（1/3） …… 34

第33図　出土遺物③（1/3）……35
第34図　出土遺物④（2/3）……37
第35図　出土遺物⑤（2/3）……38
第36図　出土遺物⑥（2/3）……39
第37図　出土遺物⑦（2/3）……40
第38図　出土遺物⑧（2/3）……43
第39図　出土遺物⑨（2/3）……44
第40図　出土遺物⑩（2/3）……45
第41図　出土遺物⑪（2/3）……46
第42図　出土遺物⑫（2/3）……47
第43図　出土遺物⑬（2/3）……48
第44図　出土遺物⑭（2/3）……49
第45図　出土遺物⑮（2/3）……50
第46図　出土遺物⑯（2/3）……51
第47図　出土遺物⑰（1/2）……52
第48図　出土遺物⑱（1/2）……53
第49図　出土遺物⑲（1/3）……55
第50図　出土遺物⑳（1/3）……56
第51図　出土遺物㉑（1/3）……57
第52図　出土遺物㉒（1/3）……58
第53図　出土遺物㉓（1/3）……59
第54図　出土遺物㉔（1/3）……60
第55図　出土遺物㉕（1/3）……61
第56図　出土遺物㉖（1/3）……62
第57図　出土遺物㉗（1/3）……64

表　目　次

表１　国営農地再編整備事業に伴う埋蔵文化財関係一覧表……3
表２　松浦市遺跡一覧表……11～12
表３　貯蔵穴一覧表……30

図　版　目　次

図版１　Ａ４区北壁土層、Ｂ12区北壁土層 ……79
図版２　Ｂ13区東壁土層、Ｂ13区北壁土層 ……80
図版３　遺物出土状況、遺物出土状況 ……81
図版４　１号貯蔵穴、７号貯蔵穴 ……82
図版５　７号貯蔵穴、７号貯蔵穴 ……83
図版６　７号貯蔵穴、７号貯蔵穴 ……84
図版７　８号遺構、10号貯蔵穴 ……85
図版８　11号貯蔵穴、12号貯蔵穴 ……86
図版９　13号貯蔵穴、13号貯蔵穴 ……87
図版10　14号貯蔵穴、14号貯蔵穴 ……88
図版11　17号貯蔵穴、17号貯蔵穴 ……89
図版12　18号貯蔵穴、19号貯蔵穴 ……90
図版13　３号～６号・15号・16号貯蔵穴、３号～６号・15号・16号貯蔵穴 ……91
図版14　９号～14号貯蔵穴、調査風景 ……92
図版15　出土遺物① ……93
図版16　出土遺物② ……94
図版17　出土遺物③ ……95
図版18　出土遺物④ ……96
図版19　出土遺物⑤ ……97
図版20　出土遺物⑥ ……98
図版21　出土遺物⑦ ……99
図版22　出土遺物⑧ ……100
図版23　出土遺物⑨ ……101
図版24　出土遺物⑩ ……102
図版25　出土遺物⑪ ……103
図版26　出土遺物⑫ ……104
図版27　出土遺物⑬ ……105
図版28　出土遺物⑭ ……106

第Ⅰ章　はじめに

1．国営農地再編整備事業と埋蔵文化財

九州農政局北部九州土地改良調査管理事務所（以下「九州農政局」という。）では、土地利用の整序化を図り、農用地の効率的な土地利用と生産性の高い基盤を形成するため、既耕地を再編整備する区画整理 497ha、及び隣接する未墾地等の開畑７haを一体的に施行し、高収益性作物の導入を行い、経営規模の拡大と中核農家の経営合理化を図るとともに兼業化、高齢化に対応するために集落営農を定着させることにより農業の振興と地域活性化に資することを目的として、平成８年度から長崎県県北の松浦市、北松浦郡田平町・同江迎町・同鹿町町・同小佐々町・同佐々町・同吉井町の１市６町で面積 610haの国営農地再編整備事業に取組むことになった。このため松浦市教育委員会では長崎県教育委員会に協力を得て九州農政局と埋蔵文化財についての協議に入った。協議の結果、まず松浦市内における国営農地再編整備事業予定地区内の遺跡の分布調査を平成６年７月18日から７月20日に実施した。その分布調査の結果、確認調査が必要な遺跡として牟田Ａ・牟田Ｂ・水尻Ｂ・蕨川・下谷・田口高野・大石Ｂ遺跡が対象となった。また、周知の遺跡はないが今福・調川・川内の３ヵ所において試掘調査が必要である旨を九州農政局へ回答した。協議の結果、平成７年度から３ヵ年計画で今後の協議に必要な基礎資料を得ることを目的に確認調査及び試掘調査を実施することになった。なお、それに伴う調査費用については国庫補助・県費補助を受けて、松浦市教育委員会が主体となって実施することになった。なお、大石Ｂ遺跡については地元との協議の中で事業計画地より除外されている。

平成７年度は国営農地再編整備事業のモデル地区に指定されている今福工区の８haの工事予定地区内の遺跡の有無を確認する試掘調査を実施した。調査は工事予定地区内に39ヵ所の調査区を設けた。この今福工区は今福川によって形成された沖積平野の水田部にあたっているため、川の氾濫で堆積した砂の層がいたるところで確認された。しかし、工区内の中央部から北側にかけての約16,000㎡の範囲にわたって古墳時代から中世にかけての遺物包含層が確認された。この結果をもとに市教育委員会では文化財保護法に基づく遺跡発見届を行い、今後は今福遺跡として保護の対象となることとなり、あらためて九州農政局と協議に入った。平成８年４月には、九州農政局が本格的な事業の展開を進めるため北松浦郡吉井町に移転し、北松農地整備事業所（以下「事業所」という。）が開設され、以降の埋蔵文化財の協議は事業所と行うことになった。

平成８年度の国営農地再編整備事業に伴う調査は、川内工区の小船遺跡・西木場工区の田口高野遺跡・下谷遺跡、大崎下工区の蕨川遺跡・水尻Ｂ遺跡、調川工区の松園遺跡の試掘調査及び確認調査を実施した。川内工区の23.3haの工事予定地区内には周知の遺跡はなかったが、立地環境から山根免において遺跡の有無を確認する試掘調査を実施した。調査は工事予定地区内の玄武岩台地に立地した畑地に６ヵ所の調査区を設けた。その結果、弥生時代から中世にかけての遺物包含層が確認された地点と旧石器時代の遺物包含層が確認された地点の合計約 3,300㎡の範囲に遺跡の存在が確認されたた

め、市教育委員会では文化財保護法に基づく遺跡発見届を行った。今後は周知された小船遺跡として保護の対象となることとなった。あらためて事業所と協議に入り、お互いの立場を尊重して事業を推進していくことに重点がおかれ、事業所も遺跡の保護には極力留意しながら、その保存について詳細に検討して今後の設計を進めていくことになった。

西木場工区の15.0haの工事予定地区内に所在する田口高野遺跡の確認調査では、玄武岩台地の丘陵上に営まれた畑地に旧石器時代の台形石器を主体とする遺物包含層が確認され、約 600㎡の範囲に遺跡が分布していることが予想された。また、この田口高野遺跡から北東へ約 800mの地点にある下谷遺跡は、加椎川河口の水田部に位置しており、この確認調査では、遺構の検出はできなかったが縄文後期を中心とする遺物が多数出土している。このため田口高野遺跡と下谷遺跡については、遺跡の保護を第一に考えながら事業所との協議に入った。その他の蕨川遺跡、水尻Ｂ遺跡、松園遺跡については遺物包含層と遺構の確認も無かったため工事着手の了解を事業所に行っている。

平成９年度の国営農地再編整備事業に伴う調査は、牟田工区の牟田Ａ遺跡・牟田Ｂ遺跡の確認調査を行った。牟田地区は牟田産黒曜石の原産地として全国的にも知られており、石器製作跡等に関連する遺構の存在に期待していたが、残念ながらほとんどの調査区とも畑地として後世の撹乱を受けており、撹乱層からも石器製作工程に関する剥片・砕片などの遺物の発見には至らなかった。しかし、３基の近世の墓地を確認したためその保存について協議を進めるとともに、工事の着手には支障が無い旨の回答を行っている。

２．国営農地再編整備事業に伴う発掘調査

市教育委員会では、平成７年度から９年度にかけて実施した確認調査及び試掘調査の結果を基に事業所と幾度となく埋蔵文化財についての協議を重ねた。その結果、工事の実施にあたりどうしてもやむをえない埋蔵文化財の保存ができない道路・水路・圃場部分については事前に発掘調査を実施し、できるだけ正確な記録保存に努めることで同意に達した。なお、発掘調査に伴う経費負担の問題は、農林省構造改善局長と文化庁長官との「文化財保護法の一部改正に関する覚書」の第５項に拠り農家負担分については松浦市で予算化し、残りの分については事業所に負担をお願いした。

発掘調査は、まず平成８年度から国営農地再編整備事業のモデル地区に指定されている今福遺跡の発掘調査から開始した。今福遺跡は試掘調査の結果、約16,300㎡にわたって遺跡が分布していることが確認されていたが、遺跡内のうち工事で設計変更ができない１号支線道路・２号支線排水路と削平される水田部の合計 2,580㎡の調査であり、調査は短期間での実施ということで調査員の確保を行って実施した。今福遺跡は試掘調査の結果から遺跡の主体を古墳時代と予想していたが、縄文晩期の中頃から弥生前期にかけての遺物を多数検出することができた。特に組織痕土器の網目状の発見は松浦市においては初めての出土であった。さらに前期に属するの６点の石庖丁の出土は当地における稲作の起源が弥生時代までさかのぼることも確認された。今後の長崎県内への稲作の伝播を研究する上で注目される所である。

平成10年度は、御厨町川内工区で新たに発見した小船遺跡の発掘調査を実施した。遺跡は約3,300㎡の範囲のうち設計変更できない1号支線道路部分の 193㎡の発掘調査を実施し、記録保存を行った。その成果については『小船遺跡』として発刊している。

平成11年度及び12年度は、田口高野遺跡の約 600㎡の遺跡範囲のうち工事で計画変更ができない11号排水路と遺跡内でも一番高い所の旧畑地で削平される部分の 412㎡の発掘調査を実施した。調査は工事の図面完成が大幅に遅れたため発掘調査も12年度の3月までの期間と、年度をまたがった平成12年5月2日まで調査に従事した。

3．発掘調査に至る経緯

下谷遺跡は、平成8年度の確認調査の結果、遺跡の範囲が海岸部の水田地帯約 4,000㎡に分布していることが確認されたため、その保存について事業所と協議を重ねていたが、7号耕作道路部分の約300㎡を記録保存の目的で発掘調査を行うことになった。

発掘調査は、12年度の継続事業である田口高野遺跡の発掘調査の終了をまって、まず、プレハブ・簡易トイレを下谷遺跡の調査地点に移動するとともに、引き続き調査体制を整えて平成12年5月19日から7月22日までの期間実施した。

下谷遺跡の発掘調査に伴う経費については、平成12年度に事業所長と松浦市長との間で田口高野遺跡・下谷遺跡埋蔵文化財発掘調査負担契約を締結し、発掘調査及び田口高野遺跡の報告書作成事業に取り組んだ。

（中田敦之）

表1　国営農地再編整備事業に伴う埋蔵文化財関係一覧表

調査関係

調査年度	遺跡名	分布面積(㎡)	調査面積(㎡)	調査期間	備考
平成7年度	今福遺跡		156	H7.11.17～H7.12.27	試掘調査
平成8年度	小船遺跡		24	H8.5.13～H8.5.23	試掘調査
平成8年度	田口高野遺跡		16	H8.5.24～H8.6.4	確認調査
平成8年度	蕨川遺跡		16	H8.6.5～H8.6.7	確認調査
平成8年度	水尻B遺跡		120	H8.6.7～H8.7.26	確認調査
平成8年度	今福遺跡	16,300	2,580	H8.11.5～H9.2.18	本調査
平成8年度	松園遺跡		20	H9.2.24～H9.3.3	試掘調査
平成8年度	下谷遺跡		32	H9.2.24～H9.3.6	確認調査
平成9年度	牟田A遺跡		32	H9.6.24～H9.7.4	確認調査
平成9年度	牟田B遺跡		76	H9.7.15～H9.8.18	確認調査
平成10年度	小船遺跡	3,000	193	H11.1.26～H11.3.17	本調査
平成11年度	田口高野遺跡	600	312	H12.3.1～H12.3.29	本調査
平成12年度	田口高野遺跡	600	100	H12.4.7～H12.5.2	本調査
平成12年度	下谷遺跡	4,000	245	H12.5.19～H12.7.22	本調査

報告書刊行関係

年度	報告書名
平成9年度	今福遺跡
平成11年度	小船遺跡
平成12年度	田口高野遺跡
平成13年度	下谷遺跡

4．発掘調査関係者　（敬称略）

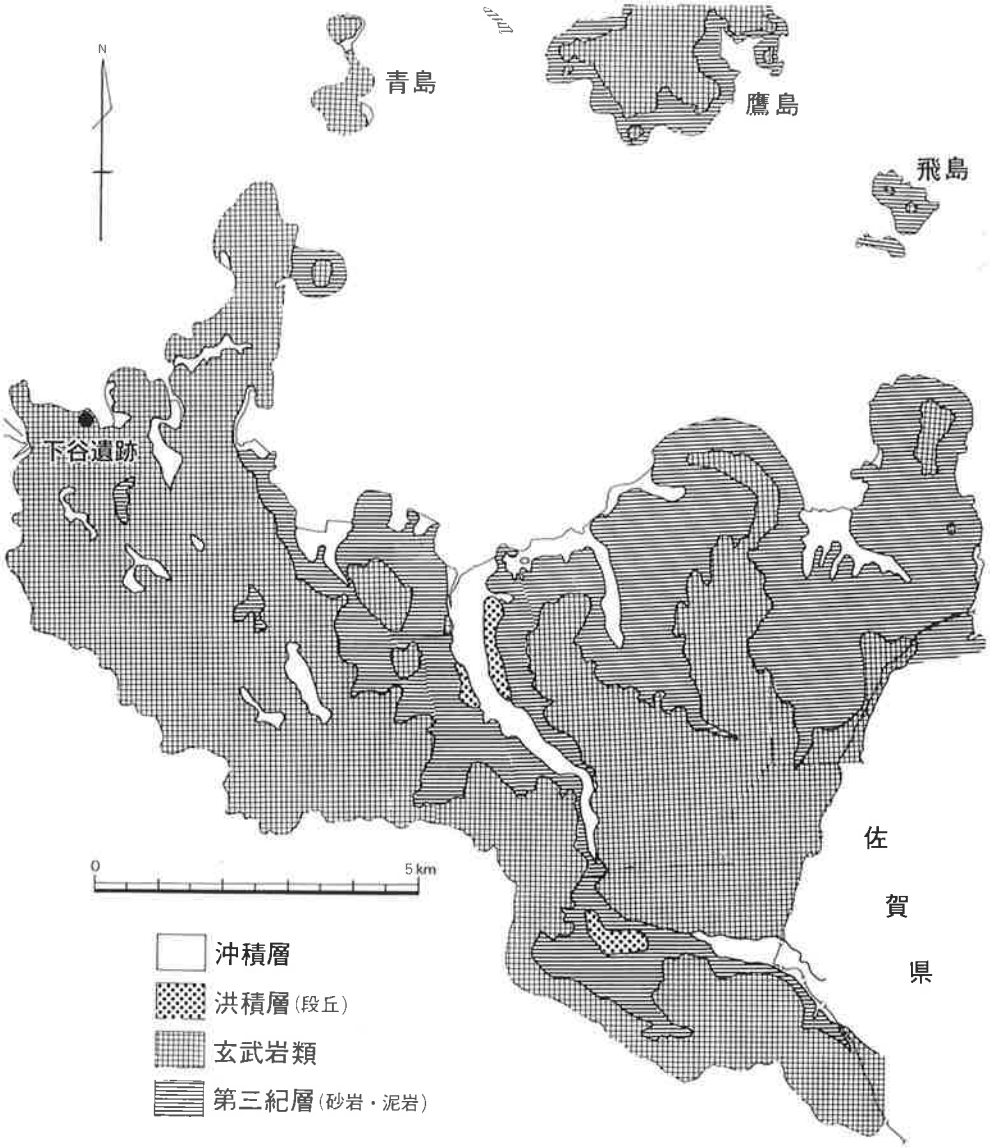
調査主体　松浦市教育委員会
調査総括　黒　川　壽　信（教育長）
　　久　家　幸　雄（教育次長）
　　末　竹　信　彦（生涯学習課課長）
庶務担当　和　田　光　正（生涯学習課次長兼生涯学習係長　平成13年３月まで）
　　和　田　光　正（生涯学習課次長兼管理業務係長　平成13年４月から）
　　明　石　拡　子（生涯学習課生涯学習推進係主事）
調査担当　中　田　敦　之（生涯学習課生涯学習係主査兼社会教育主事）
　　明　石　拡　子（生涯学習課生涯学習係主事　平成13年３月まで）
整理担当　中　田　敦　之（生涯学習課生涯学習係主査兼社会教育主事　平成13年３月まで）
　　中　田　敦　之（生涯学習課生涯学習推進係長兼社会教育主事　平成13年４月から）
　　明　石　拡　子（生涯学習課生涯学習係主事　平成13年３月まで）
　　明　石　拡　子（生涯学習課生涯学習推進係主事　平成13年４月から）
　　冨　永　百合子（生涯学習課生涯学習推進係臨時職員　平成13年７月から）
調査作業員　天久保正子・松永セツエ・松田マサヨ・冨野トシエ・里森知恵子・黒田ヒサエ・吉田未千子・今田英子・森淑子・渡口米子・中島カズ子・白石チヨノ・徳田タマ子・関本朝子・山口民子・森テル子・濱野富子・眞浦サチエ・芥川ムツエ・井上ハヤ子・吉永アヤカ・岩崎文子・末永民子・福本籾子・内野久美子・前田チヨノ・田中節子・岡村実・勝村亀一・内野モモヱ・作本富男・作本マサエ・大川カスミ・山口カシ子・村田政子・辻元エン・松本綾子・﨑田政子・辻川のり子
整理補助員　宮﨑朝美・吉野貴子
調査協力者　長嶺昭二・近藤満江

第II章　遺跡の立地と環境

1．地理的環境（第１図）

長崎県本土部の北端に位置する松浦市は、北松浦半島の北端部とその沖に浮かぶ青島・飛島などのいくつかの島々から構成されている。松浦市の北には元寇の島で有名な北松浦郡鷹島町があり、西の北松浦郡田平町には西の登呂遺跡といわれ多くの木製品の出土及び内行花文鏡・方角規矩文鏡を出土した里田原遺跡がある。南の北松浦郡吉井町には縄文草創期の隆起線文土器が出土した福井洞窟がある。さらに、東には有田焼の積出港で有名な佐賀県伊万里市が位置している。このように松浦市の近郊は日本の歴史上においても重要な地域であるとともに朝鮮半島・中国大陸とも近いという地理条件からも旧石器時代から中世期にかけての遺跡の宝庫でもある。

松浦市の地質は、新第三紀層の堆積岩を基盤として、その上に玄武岩が広く堆積している地質構造

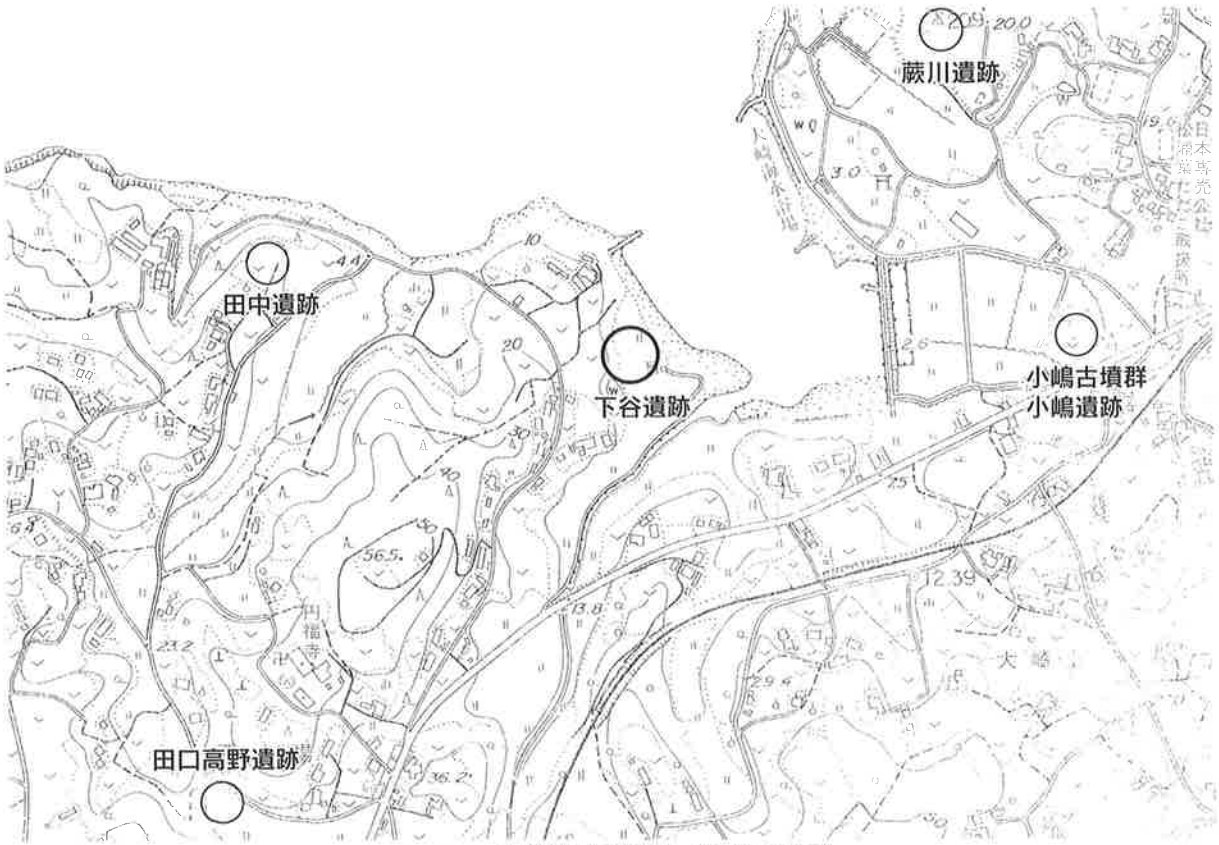


第１図　松浦市地質図

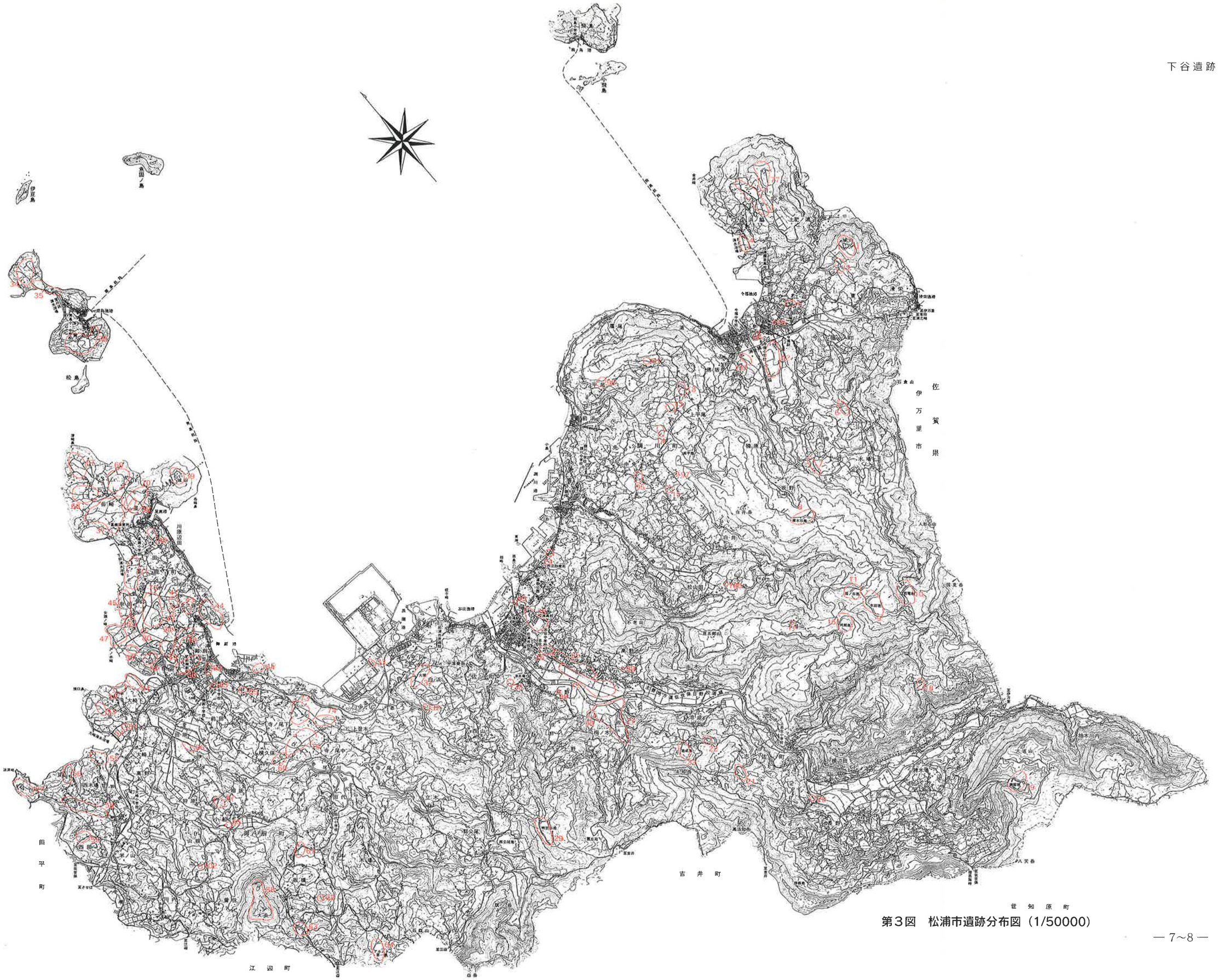
を呈している。この玄武岩は、北松浦半島を中心に西北九州に広く分布する松浦玄武岩と称されるもので、典型的な溶岩台地を形成している。かつては伊万里市南方を中心として噴出した火山であったと思われている。したがって、佐賀県境を占拠する標高 777mの国見山を主峰とし、北および西に高度を減じている。この台地が形成されたのは八百万年以前の新第三紀の火山活動で、粘性が弱い溶岩が盾状に広がった結果によるものである。

松浦市の地勢は、南高北低をなし、海岸部まで山が迫っている。河川のほとんどが北流している。市の南側には400～500m級の高位台地があり、悪太郎川以西では 100m以下の低位台地が広がっている。市西部の星鹿半島の先端の津崎鼻や西田地区の波津崎には、長い年月の風化作用より海岸線を急峻に切り立たせた玄武岩の柱状節理の海食崖が発達している。この玄武岩が基盤になっているが、長い年月の侵食による地形の変化が著しく、現在の山頂部や山裾に溶岩流の一端を見ることができる。この玄武岩は節理の間に滞水しやすく、地辷り災害の原因にもなっているが、一面では湧水が豊富で溜池に利用されているところも多い。湧水のあるところは、古くより人と動物の暮らしに大きく係ってきている。

今回調査を行った下谷遺跡がある市の北西部一帯は、玄武岩が不整合に覆っていたる所に玄武岩台地を形成している。この台地は・竜尾川・加椎川・坂瀬川の浅い谷に刻まれた低位台地となっている。中央部を流れる竜尾川は、吉井・江迎町境の白岳山麓に源を発し、木場川・田代川などの支流を集めて、低位台地を刻んで北へ流れている。河口には三角洲がほとんどつくられずラッパ状に開いた三角江となっている。



第２図　下谷遺跡周辺図（1/10000）



第３図　松浦市遺跡分布図（1/50000）

２．歴史的環境（第２図・第３図）

松浦市内の遺跡としては、圧倒的に旧石器時代・縄文時代の遺跡が多い。特に下谷遺跡の周辺は市内でも特に遺跡の多い地域として注目されている。現在までのところ、後期旧石器時代の所産であるナイフ形石器や台形石器の資料が牟田Ａ・Ｂ・Ｃ、田川、田口高野遺跡などで確認されている。平成11・12年度に実施した田口高野遺跡の発掘調査では台形石器が出土する地層に姶良カルデラから噴出した姶良Ｔｎ火山灰が堆積していることが確認されている。また、星鹿半島一帯は道具生産の主たる石材である黒曜石の原産地で、一般には牟田産黒曜石として知られている。原石の特徴は遺物の剥離面が光沢のある漆黒色を呈し、円礫であばた状の自然面を有していれば牟田産原石であるという判断基準がある。

次の縄文時代では、姫神社遺跡・小嶋遺跡など良好な遺跡も知られている。姫神社遺跡は、昭和41年にアメリカのウィスコンシン大学アルバート・モアと日本人学者（内藤芳篤、吉崎昌一ら）による合同調査が行われており、その一部が英文で報告され、福岡県教育委員会の水ノ江和同氏によって翻訳されている。同論文では縄文前期の轟式土器、曽畑式土器を中心に、中期の阿高式土器、石器では石鏃・石錐・石槍・石斧・石匙などの遺物が報告されている。また、遺跡からは萩原博文・久原巻二氏によって縄文後期の土器片と共に石鋸・サイドブレイドを採集したことが報告されている。小嶋遺跡は、下谷遺跡より東へ約 600ｍの地点にあり、昭和61年に簡易水道敷設工事に伴う緊急調査で発見した遺跡である。縄文前期の曽畑式土器、中期の阿高式土器を中心に一部他地区からの搬入土器もある。石器では石鏃・剥片鏃・石銛・滑石製装飾品・石斧などが出土している。平成６・７年度には竜尾川地区県営圃場整備事業に伴い実施した田川遺跡の発掘調査では、縄文中期終末から後期初頭頃の坂の下式土器とともに多数の剥片鏃・つまみ形石器・石錐・石鋸・サイドブレイド等が出土している。

弥生時代では、大正14年に発見され、現在は長崎県の重要遺跡として周知されている池田遺跡がある。この遺跡は、昭和63年から平成元年にかけて４次にわたる確認調査が行われている。その結果、縄文晩期から弥生前期にかけての良好な包含層が検出されており、柱穴・箱式石棺墓・甕棺墓・土壙等の遺構と、西平式土器・刻目突帯文土器・板付Ⅱ式土器・骨製ヤス・貝輪等の遺物が出土している。

古墳時代については、昭和62年に確認調査を実施した小嶋古墳群がある。先の小嶋遺跡に隣接しており、３基を確認し、そのうちの１号噴を調査した。石室はすべて天井部を失って露出しており方形の玄室プランに羨道を付した横穴式石室を有し、玄室内より銀環・碧玉製勾玉・ガラス製丸玉などが多数出土しており、７世紀代に比定できる資料である。

古墳時代以降では、「宇野御厨」の痕跡であろう。宇野御厨荘、単に御厨荘ともいわれている。律令制下では天皇や神に貢納する魚貝・果物を贄と称しており、のちに宇野御厨が置かれた松浦・五島の地域でも、大宰府を通じて贄が貢上されていたことが『延喜式』や贄木簡などによって知られる。宇野御厨が初めて文書に現われるのは『東南院文書』で、寛治３年（1089）８月17日の筑前国観世音寺三綱解案に「宇野御厨別当下文」とあるものである。つぎに宇野御厨の名が見えるのは、『石志文書』の、康和４年（1101）８月29日の肥前国宇野御厨検校源久譲状案である。この文書は偽文書

の疑いが指摘されている史料でもある。この史料には「宇野御厨野検校散位」（源久）という松浦党の祖といわれている人物の名が見える。この源久は延久元年（1069）現在の松浦市今福町に下向し、土着したといわれている人物で、以後の松浦党の諸氏は源久を祖として仰いでいる。松浦党は宇野御厨および御厨荘一帯に土着した源性一字名の集団を中心に、当初はその姻族が加わった武士団であったと思われ、西北九州で絶大なる影響力を持つようになる。松浦党は、玄界灘を熟知した航海術で盛んに公益活動を行い、大陸まででかけて交易するようになっている。

御厨に関しては、『河上神社文書』の正応５年（1292）の「肥前国河上宮造営用途支配懇田数注文」には「宇野御厨庄三百丁」と御厨の公田数が記されている。当時の御厨の範囲を確定することは難しいが、これらの史料から考えると、現在の五島列島・平戸島などの島々を含む県北地域の一帯・南松浦郡の地域からと伊万里湾西側地域を含む一帯であろうと思われる。御厨の地名は鎌倉期から御厨荘などとして現われているが、これは宇野御厨を指し、現在の御厨には直接につながらない。しかし、鎌倉期には、「御厨熊徳」なる人物が見え、引安４年（1281）に宇野御厨の預所から無主の荒野一町を給田として与えられており、すでに今日へつながる御厨の地名があったことが推測できる。御厨氏は、「御厨氏系図」によれば、値嘉十郎連の子御厨小二郎並が始祖とされている。代々御厨を姓として、御厨城を居城としていた。

南北朝から室町期には、松浦党はしばしば一揆を結んで、地域支配の体制を強化している。『山代文書』の永徳４年（1384）の下松浦一族一揆契諾状には「〈ミくりや〉三河守守」、「〈ミくりやのさかもと〉源宥」の当地を本拠とする領主名が見える。さらに嘉慶２年（1388）の『青方文書』の一揆契諾状には「御厨三河守守」「御厨田代近」の名が見える。この「御厨田代近」は、田川遺跡の位置する田代地区を本拠地とする領主と思われる。朝鮮貿易では、『李朝実録』には「太宗恭定大王実録」戊子太宗８年（1408）６月庚辰条に「日本志佐殿・御厨殿、皆遣使献礼物」とあり、以後の『李朝実録』に「下松浦三栗野太守源満」「下松浦三河守融」などの名が見える。また、『海東諸国紀』にも「下松浦三栗野太守源満」の名が見える。

戦国期に入ると、田平里城主峰昌と弟の平戸松浦弘定との対立抗争があり、昌は島原の有馬貴純と結び、一方、弘定は大内義弘の援けを得て、延徳３年（1491）に平戸勝尾嶽城や箕坪城をめぐって激しい攻防を展開したが、結局大内氏の斡旋で和睦している。この結果、弘定の室の父である御厨資忠と子の善は御厨を追われ、川棚に走る。その後の御厨は平戸領に吸収されてしまうのである。

（中田敦之）

表２　松浦市遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	出土遺物など	備考
1	松浦党梶谷城跡	今福町東免城山	輸入陶磁器、古唐津、銅銭、石鏃等	平成３～６年度確認調査
2	城山山麓遺跡	〃　東免農園	石鏃、剥片	
3	満場遺跡	〃　北免上満場・平ほか	ナイフ形石器、台形石器、掻器、剥片	昭和５６年度確認調査
4	ぎぎが浜遺跡	〃　北免前田・黒崎ほか	須恵器	
5	山川遺跡	〃　東免山川	剥片	
6	長尾池遺跡	〃　木場免長尾・寺上免道山	石鏃、剥片	
7	深田代池遺跡	〃　寺上免方立・抜ケ	剥片	
8	椎ノ木谷遺跡	〃　坂野免椎木谷	台形石器、剥片	
9	牟田池遺跡	〃　木場免牟田	ナイフ形石器、石鏃、剥片	
10	葛籠池遺跡	〃　木場免札ノ辻・葛籠	石鏃、剥片	
11	湯ノ谷池遺跡	調川町松山田免湯谷	ナイフ形石器、石鏃、石核、剥片、押型文土器、並木式土器	
12	柳池遺跡	〃　平尾免柳・堀ノ元	ナイフ形石器、スクレイパー、剥片	
13	南久保遺跡	〃　平尾免雨久保	剥片	
14	櫨川遺跡	〃　平尾免古番所	剥片	
15	松園屋敷跡	〃　上免里		
16	川頭池遺跡	志佐町赤木免河頭・文明ほか	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、磨製石斧、スクレイパー、剥片	
17	石盛山古墳	〃　赤木免石盛		
18	絶頂池遺跡	〃　田ノ平免小谷・谷	石鏃、剥片	
19	柳原池遺跡	〃　稗木場免仙須計	掻器、剥片	
20	黒岩岩陰遺跡	〃　横辺田免池ノ元	土器片	
21	モウデ池遺跡	〃　池成免庵ノ本	石鏃、剥片	
22	矢樋池遺跡	〃　池成免池成	石鏃、剥片	
23	池成池遺跡	〃　池成免橋本・曽井	剥片	
24	寺田遺跡	〃　浦免寺田	スクレイパー、剥片	
25	久保園遺跡	〃　里免久保園、高野免松山ほか	石鏃、剥片、弥生土器、輸入陶磁器	平成７年度確認調査
26	陣ノ内遺跡	〃　里免陣ノ内	石鏃、剥片、弥生土器、輸入陶磁器、石鍋、土師器	平成10年度確認調査
27	栢ノ木遺跡	〃　栢木免小久保ほか	青銅鏡片、管玉、ビーズ玉、石庖丁、弥生土器、輸入陶磁器、土師器、石鍋	第14次まで確認・本調査
28	堂山古墳	〃　栢木免高尾本		
29	明賀谷遺跡	〃　栢木免明賀谷	ナイフ形石器、台形石器、石斧、石匙	
30	大嶋遺跡	〃　庄野免小楠	経筒（滑石製、円筒形）	
31	大堤遺跡	〃　白浜免猿喰・山頭	剥片	
32	皿山窯跡	〃　白浜免京地	磁器、トチン、ハマ、ナンキン	昭和55年度本調査
33	楼楷田遺跡	〃　白浜免楼楷田・日前ほか	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、掻器、石斧、須恵器、土師器、石鍋、輸入陶磁器	昭和５７～５９年度本調査
34	段ノ上遺跡	星鹿町青島免段ノ上	台形石器、須恵器、剥片、黒曜石原石	
35	一町田遺跡	〃　青島免崎田・中ノ島	弥生土器、須恵器、剥片	
36	青島遺跡	〃　青島免長久保・牛久保ほか	台形石器、ナイフ形石器、石鏃、剥片	
37	大石Ａ遺跡	〃　岳崎免道出・堤田ほか	黒曜石原石	
38	千人塚	〃　岳崎免大堂・丸久保ほか		
39	刈萱城跡	〃　岳崎免岳崎	ナイフ形石器、台形石器、剥片	平成元年・３・６・１１年度確認調査
40	下田遺跡	〃　下田免山口	ナイフ形石器、台形石器、凹石、彫器、土師器、黒曜石原石	昭和61年度確認調査
41	北久保Ａ遺跡	〃　北久保免勢ノ巣・藤園	石鏃、弥生土器、剥片、黒曜石原石	
42	北久保Ｂ遺跡	〃　北久保免浦頭	剥片、黒曜石原石	
43	北久保Ｃ遺跡	〃　北久保免浦頭	石鏃、剥片、黒曜石原石	
44	姫神社遺跡	〃　北久保免宮崎・玄道寺	ナイフ形石器、曽畑式土器、石斧、石鏃、石鋸、弥生土器、須恵器、土師器、輸入陶磁器	昭和40年・平成4・7・8・10年度確認調査
45	牟田Ａ遺跡	〃　牟田免中尾	ナイフ形石器、石鏃、剥片、黒曜石原石	平成９年度確認調査
46	牟田池上遺跡	〃　牟田免池上	石核、石鏃、剥片、黒曜石原石	昭和158年度確認調査
47	佐世保崎遺跡	〃　牟田免佐世保崎	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、、黒曜石原石	昭和157年度本調査
48	池田遺跡	御厨町池田免田崎・里免下長峯	夜臼式土器、弥生土器、石斧、石鏃、石匙、輸入陶磁器、獣骨、骨角器	昭和６３・平成元年・１１度確認調査
49	長蔵坊遺跡	〃　池田免長蔵坊・西ノ原ほか	ナイフ形石器、ラウンドスクレイパー、黒曜石原石	
50	中ノ崎遺跡	〃　池田免中ノ崎	ナイフ形石器、黒曜石原石	
51	水尻Ａ遺跡	〃　大崎免水尻・雀崎	黒曜石原石	
52	水尻Ｂ遺跡	〃　大崎免水尻ほか	ナイフ形石器、石斧、スクレイパー、剥片、黒曜石原石	平成８年度確認調査
53	蕨川遺跡	〃　大崎免俠場・フウチンほか	剥片、黒曜石原石	平成８年度確認調査
54	小嶋古墳群	〃　大崎免小嶋	銀環、勾玉、丸玉、鉄鏃、阿高式土器、石鋸、石鉞。	昭和162年度確認調査
55	下谷遺跡	〃　西木場免下谷・平原	石鏃、剥片鏃、スクレイパー、阿高式土器、弥生土器、須恵器、土師器、輸入陶磁器	平成8年度確認調査・平成12年度本調査、本 書
56	田中遺跡	〃　西田免小田・田尻ほか	スクレイパー、剥片	
57	波津崎遺跡	〃　西田免波津崎	ナイフ形石器、剥片	
58	田口高野遺跡	〃　西田免田口高野ほか	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、剥片	平成8年度確認調査・平成11・12年度本調査
59	西木場遺跡	〃　西田免潮入ほか	剥片	
60	横久保遺跡	〃　横久保免大久保	剥片、弥生土器	
61	田川遺跡	〃　田代免田川・前田	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、剥片鏃、つまみ形石器、石斧、阿高式土器、輸入陶磁器	平成６～７年度本調査
62	板橋経塚	〃　板橋免教塚		
63	板橋境目遺跡	〃　板橋免堺目・ケンケイ田	ナイフ形石器、石鏃、剥片	
64	アカニタ池遺跡	〃　板橋免アカニタ	ナイフ形石器、縄文土器、剥片	
65	薬山六地蔵	〃　小船免薬山		
66	坂本遺跡	〃　里免丸田・長峯	石鏃、黒曜石原石	平成11年度確認調査
67	津崎鼻遺跡	星鹿町岳崎免津崎ほか	ナイフ形石器、台形石器、彫器、掻器、石鏃、石刃、石刃核、黒曜石原石	
68	津崎遺跡	〃　岳崎免吸田・天堤ほか	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、剥片	
69	大石Ｂ遺跡	〃　岳崎免園田・久保田ほか	細石核、石鏃	

70	大石C遺跡	〃　岳崎免堤田ほか	ナイフ形石器、石鏃、石核	
71	牟田B遺跡	〃　牟田免細・久保ほか	ナイフ形石器、石鏃、剥片、黒曜石原石	平成9年度確認調査
72	牟田C遺跡	〃　北久保免藤園・不動ほか	ナイフ形石器、台形石器、細石核、細石刃、掻器、石鏃、黒曜石原石	
73	寺ノ尾A遺跡	御厨町上登木免大野谷	ナイフ形石器、台形石器、細石核、石核、石鏃、掻器、黒曜石原石	
74	寺ノ尾B遺跡	〃　上登木免野中田	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、掻器、石刃、石核	
75	寺ノ尾C遺跡	〃　横久保免天久保ほか	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、石槍、掻器、細石核、弥生土器	平成元・4・6・10年度確認調査
76	辻ノ尾遺跡	志佐町浦免辻ノ尾ほか	細石核、細石刃、石鏃、剥片	昭和63年度確認調査
77	北平遺跡	今福町北免北平	石鏃、剥片	
78	文脇の役松浦家伝説塔	〃　東免390番地	自然石板碑の供養塔、五輪塔、長明塔	
79	宮ノ下リ遺跡	志佐町高野免宮ノ下リほか	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、石槍、弥生土器、土師器、須恵器、石鍋、輸入陶磁器等	昭和60~63年度調査　平成11年度確認調査
80	北久保経塚	星鹿町北久保免竿	弥生土器、剥片	
81	小嶋遺跡	御厨町大崎免小嶋	阿高式土器、石斧、石鏃、石銛	昭和61年度確認調査
82	御厨城跡	〃　里免大久馬川		
83	御厨館跡	〃　里免館		
84	向山館跡	〃　里免坊ノ上		
85	中野遺跡	〃　中野免中野	ナイフ形石器、台形石器、彫刻刀形石器	
86	田原遺跡	〃　田原免田原ほか	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、石匙、弥生土器、須恵器、土師器、近世人骨	平成元年度確認調査・平成2年度本調査
87	城ノ越城跡	〃　小船免栗山		
88	大岳古墨	〃　板橋免大岳		
89	淀姫神社古墳	志佐町浦免宮前		
90	平尾遺跡	調川町平尾免芦原		
91	大塔遺跡	〃　平尾免大塔		
92	中ノ瀬遺跡	今福町浦免中ノ瀬・田川原ほか	石鏃、剥片、弥生土器、土師器、瓦器、輸入陶磁器	平成7年度確認調査
93	戸ノ本崎遺跡	星鹿町牟田免池上	ナイフ形石器、石斧、石鏃	
94	貴船神社古墳	〃　北久保免浦頭	須恵器、土師器	
95	古園遺跡	調川町下免古園		平成11年度確認調査
96	今福小学校遺跡	今福町浦免宮崎	剥片、弥生土器	
97	宮司の六地蔵塔	調川町上免宮司		
98	庄野の六地蔵塔	志佐町庄野免島田		
99	高野の六地蔵塔	〃　高野免堤田		
100	松山田の六地蔵塔	調川町松山田免平原		
101	今福遺跡	今福町仏坂免五百田ほか	石鏃、弥生土器、土師器等	平成7年度試掘・平成8年度本調査
102	小船遺跡	御厨町山根免広久保	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、剥片、輸入陶磁器	平成8年度試掘・平成10年度本調査

３．確認調査（第４図～第７図）

第４図　下谷遺跡位置図（1/10000）

九州農政局北松農地整備事業所（「以下事業所という。」）が事業主体となり、松浦市では国営農地再編整備事業が計画されている西木場工区は、市の北西部に位置し、周辺には旧石器・縄文時代などの遺跡が多数分布している地区である。その工区内には周知の遺跡として田口高野遺跡・田中遺跡・下谷遺跡の３遺跡が分布しているため、平成６年度に長崎県教育委員会と松浦市教育委員会の共同によるの分布調査を実施した。その結果、田口高野遺跡と下谷遺跡については確認調査が必要である旨の回答を事業所に行った。確認調査は平成８年度に国庫補助及び県費補助を受けて実施した。

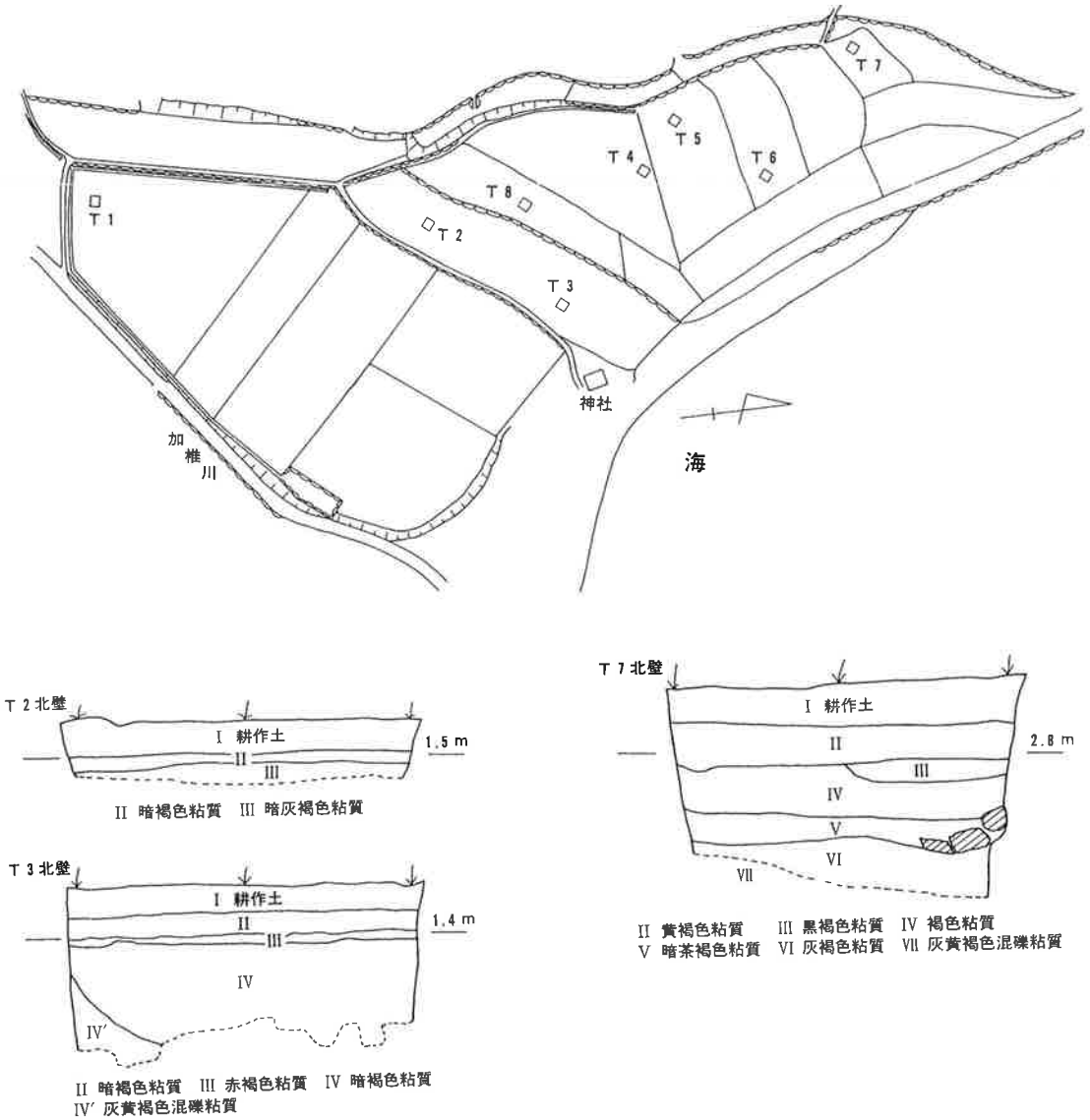
下谷遺跡の確認調査は、土地所有者の協力を受けて、平成９年２月24日から３月６日までの11日間実施した。調査では、加椎川河口に広がる左岸の標高1.1ｍ～3.2ｍの沖積平野の水田地帯に２ｍ×２ｍのトレンチを工事予定地の南側から北側にかけて８ヵ所を設定した。調査した面積は32㎡で、調査によって出土した遺物は 2,883点であった。遺物の傾向としては黒曜石製の石器や剥片、安山岩などの剥片を利用した石器が多い。遺物が出土したのは、Ｔ３～Ｔ８で耕作土を剥ぐとすぐ出土するといった所であった。Ｔ３はⅣ層まで撹乱を受けており縄文・中世期の遺物が混在していた。ある時期に水田の造成が行われたことと思われる。Ｔ４～７はＴ２・３より一段高いところに設定したが、下層に行くにしたがって玄武岩の礫が多くなる傾向を示した。

出土石器（第６図）

石鏃は１・２が平基無茎鏃、３～７が円形に作り出された凹基無茎鏃である。４の側縁には、鋸歯状加工がみられる。８～12は剥片鏃で、不定形なものがほとんどで、特に８・12は片脚不作出である。13～16はつまみ形石器である。13・17が背面から、14～16・18が主要剥離面から各々抉入加工の最も細い所で切断されている。19・20は彫器である。共に左側面に上部から樋状剥離がみられ、使用痕が残っている。21は柱状片刃石斧で、刃部は不完全である。刃部は粗雑な剥離加工で、背面は擦切加工を行っている。弥生時代の所産である。21以外は縄文期に属する資料である。１・16・18はＴ６排土、２・９・11・13・21はＴ６Ⅴ層、３はＴ１耕作作土、４・20はＴ７Ⅲ層、５はＴ７Ⅵ層、６・７・14・15・17・19はＴ６Ⅳ層、８・12はＴ３Ⅳ層撹乱、10はＴ５Ⅱ層出土である。

出土土器（第７図）

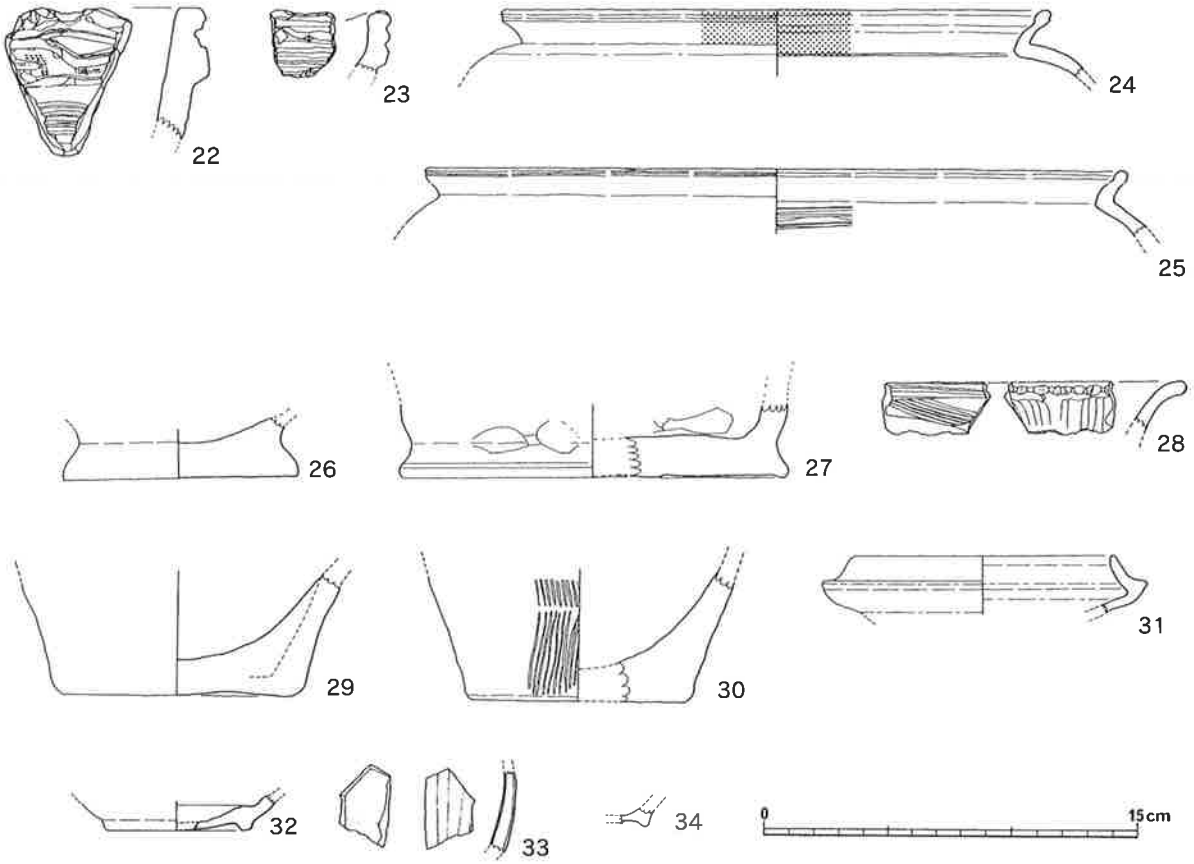
22は鐘ヶ崎式土器の深鉢の口縁部の資料である。口縁部には磨消縄文後に篦書き沈線を施し、口唇には擬縄文が一部に残っている。口縁部下には、横方向に貝殻条痕を施す。23は粗製の御領式浅鉢と思われる口縁部の資料である。口唇にやや隆起した部分があるため、小さな波状の口縁を形成してい



第５図　確認調査区設定図（1/1500）・土層図（1/40）

ると思われる。24・25は黒川式の研磨された精製浅鉢である。口唇は外面に一条の沈線と内面の篦による削り取りによって丸く肥大し、口縁から胴部にかけての器壁は肥厚するが鋭く屈曲している。しかし、24が口縁部のみ丹塗りで研磨されているのに対して、25は胴部の内面が黒色研磨されている。26・27は縄文後期から晩期にかけての深鉢の底部である。28は弥生前期に位置づけられる資料である。29・30は甕あるいは壺の底部である。31は須恵器の坏身で、かえりが内傾し短いため、６世紀後半～７世紀初頭のものと考えられる。32は須恵器杯で、断面台形の短い高台がつき、体部は丸みを帯びて立ち上がっている。33は線書き連弁の青磁碗である。34は李朝陶器の坏である。22・24・27はＴ６Ⅳ層、23はＴ７Ⅴ層、24はＴ５Ⅳ層、26はＴ４Ⅵ層、28はＴ５Ⅲ’層、29はＴ４Ⅴ層、30はＴ４排土、31はＴ３Ⅳ撹乱、32はＴ８排土、33はＴ４耕作土、34はＴ２Ⅱ層出土。

第６図　確認調査出土遺物①



第７図　確認調査出土遺物②

この確認調査で、御厨町西木場免字下谷の工事地区内の約 4,000㎡に遺跡が分布していることがわかった。特に縄文時代後期の包含層が確認されたため、この調査結果を事業所に報告するとともに遺跡の保護について協議を開始した。協議では、お互いの立場を尊重して事業を推進していくことに重点がおかれ、事業所も埋蔵文化財の保護には極力留意しながら、その保存について詳細に検討して設計を進めて行くことになった。　（中田敦之）

参考文献

中田敦之　『松浦市内遺跡確認調査（2）』　松浦市文化財調査報告書第13集　松浦市教育委員会　1998

第Ⅲ章　発掘調査

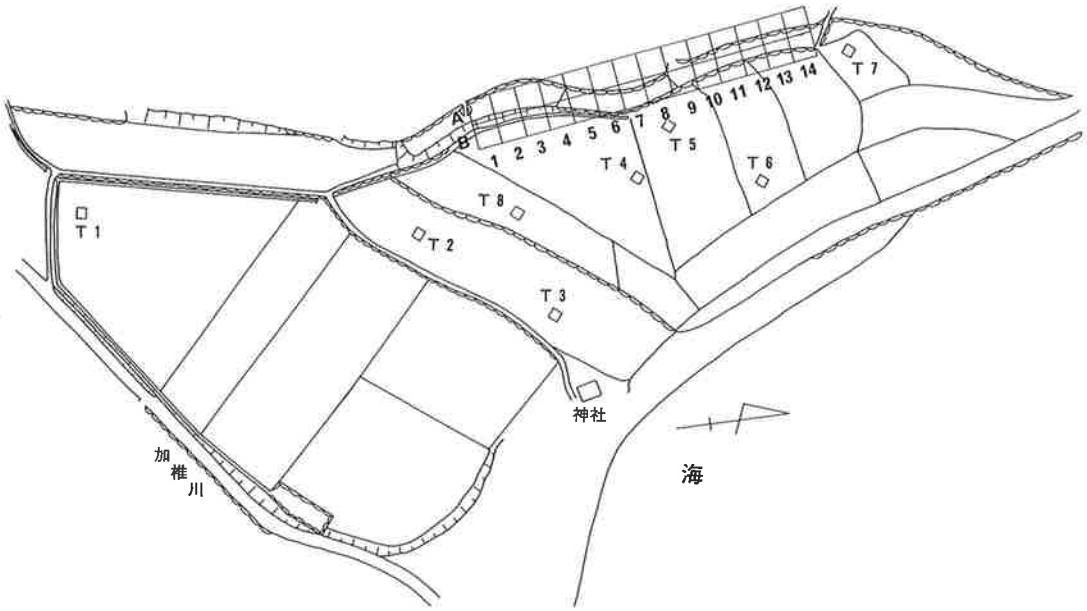
１．発掘調査の経過（第８図）

発掘調査は、田口高野遺跡の発掘調査終了後に簡易プレハブ・簡易トイレの設置を終えた平成12年５月19日から７月22日までの期間実施した。今回の調査は平成８年度に確認調査を実施した水田部分と低丘陵の先端部の交差する地点にあたっており、地区内には湧水地点も存在していた。

調査期間内における記録措置として、土層の堆積状況及び遺構の検出状況の写真撮影・実測図の作成を行った。写真撮影は、35ミリ判モノクロフィルム及びカラーリバーサルフィルムを使用した。実測図については、土層図及び遺物分布図ともに１／20で作成し、遺構図については１／10で作成した。

調査区の設定は、事業所に依頼して５号耕作道路に係る部分の基準杭を打っていただいていたため、これを利用して調査区を設定した。調査区は５ｍ×５ｍのグリットを組み25㎡を基準にした。調査区の番号は西から東へアルファベットのＡ・Ｂを使い、南から北へ１～14を付し、Ｂ13区と呼ぶようにした。なお、調査区全体の掘り下げは、調査区内の耕作土及び排土の土棄場確保のための表土剥ぎを一部工事請負業者に依頼したがその他は人力によった。調査終了後の埋め戻しは工事請負業者の重機で行われた。今回の発掘調査で最終的に調査した面積は 245㎡である。

今回の調査で出土した遺物については、原則として層位ごとに取り上げることとした。ただし、Ｂ13区及びＢ14区のⅡ～Ⅷ層にかけて出土した遺物については、平板測量で水平位置と標高を記録し取り上げた。遺構内出土の遺物については一括して取り上げた。土層については、堆積状況を把握するため各調査区の北壁及び東壁で確認することとした。



第８図　下谷遺跡調査区設定図（1/1500）

調査期間中日々の作業は排水ポンプによる湧水の撤去から開始となり、悪条件の中での調査でなかなか進展しなかった。

調査期間中にはＢ11区～Ｂ14区においてドングリ貯蔵穴を19基確認することができた。

調査日誌より抜粋

５月19日（金）

発掘調査開始。作業員26名参加。除草作業と並行して調査区の設定及びＢ13・14区の表土の剥ぎ取りを行う。

６月８日（木）

Ｂ13区より５基の貯蔵穴を検出する。

６月12日（月）

Ａ地点の調査を開始する。

７月５日（水）

Ａ地点の調査が終了する。

７月10日（月）

貯蔵穴の調査に入る。

７月21日（金）

貯蔵穴の調査が終了する。

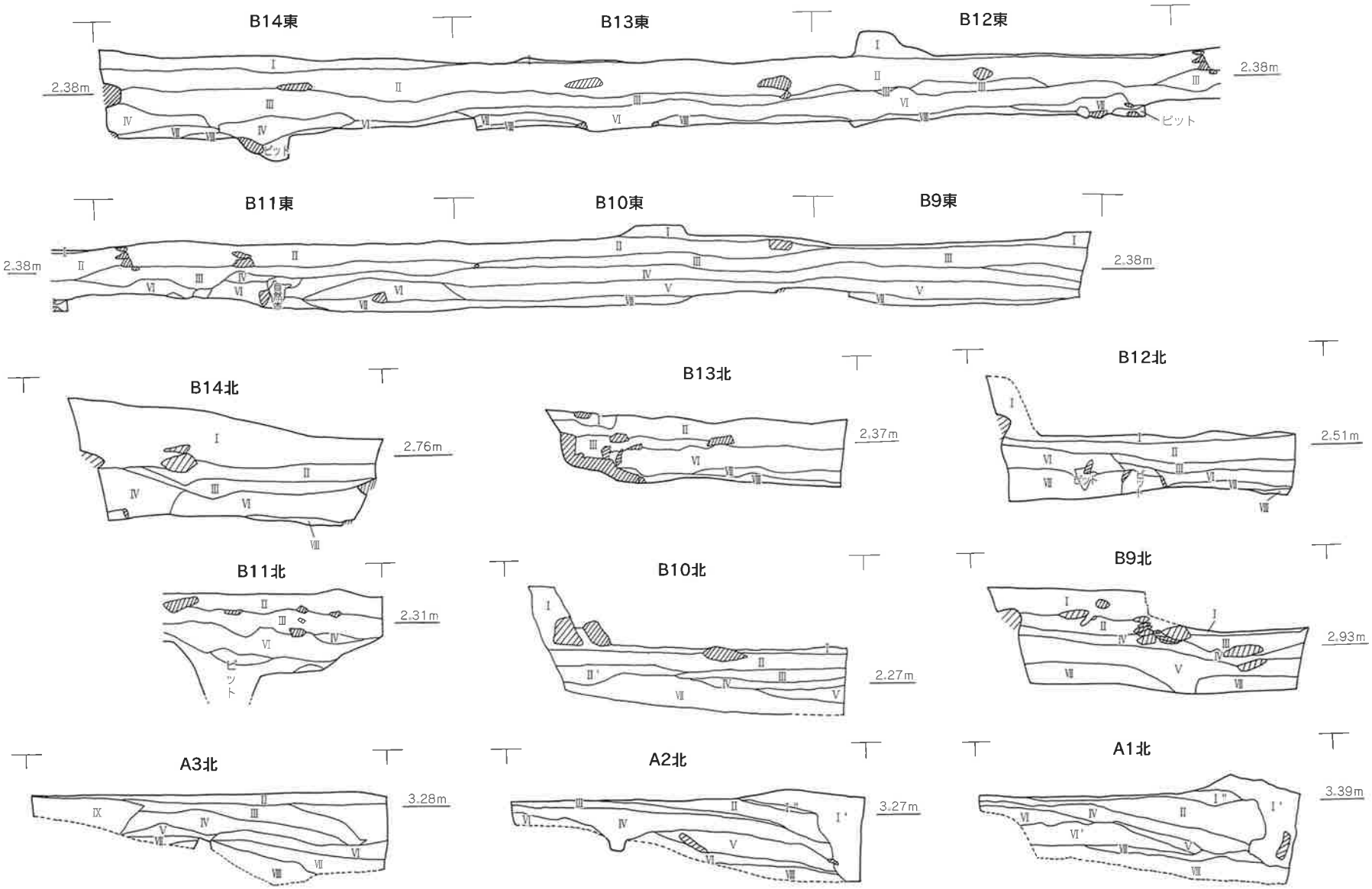
７月22日（土）

発掘調査終了。器材の撤収を行う。　（中田敦之）

２．層位（第９図）

Ａ１区は地表面から0.2～1.4mほど、Ａ２区は0.4～1.4m、Ａ３区は0.3～1.5mほど掘り下げた。Ａ１・Ａ２区については、ほぼ同じ土層の堆積状況が確認された。Ⅰ′層は褐色土層、Ⅰ″層は黒色土層、Ⅱ層は灰褐色粘質土、Ⅲ層は黄黒褐色粘質土、Ⅳ層は黒褐色粘質土、Ⅴ層は灰黒褐色粘質土、Ⅵ層は黄灰色粘質土、Ⅶ層は暗黄灰色粘質土層、Ⅷ層は黄灰色砂岩の盤となっている。Ａ３区は、Ⅱ層は褐色土層、Ⅲ層は黒褐色粘質土、Ⅳ層は暗褐色粘質土、Ⅴ層は褐色粘質土、Ⅵ層は暗褐色粘質土、Ⅶ層は灰褐色粘質土、Ⅷ層は黄灰色粘質土、Ⅸ層は暗赤褐色土の盤となっている。

Ｂ９区は0.8～1.4m、Ｂ10区は0.8～1.5m、Ｂ11区は0.6～1.4m、Ｂ12区は0.8～1.7m、Ｂ13区は0.9～1.0m、Ｂ14区は0.9～1.7mほど掘り下げた。Ｂ９区からＢ14区はほぼ同じ土層の堆積状況が確認された。Ⅰ層は暗褐色土層、Ⅱ層は黒褐色粘質土、Ⅲ層は灰色・灰褐色粘質土、Ⅲ′層は暗茶褐色粘質土層、Ⅳ層は黄褐色・褐色粘質土、Ⅴ層は茶褐色粘質土、Ⅵ層は灰黄褐色粘砂土、Ⅶ層は黄褐色砂質土（風化土層）、Ⅷ層は暗褐色粘質土層の盤となっている。　（明石拡子）



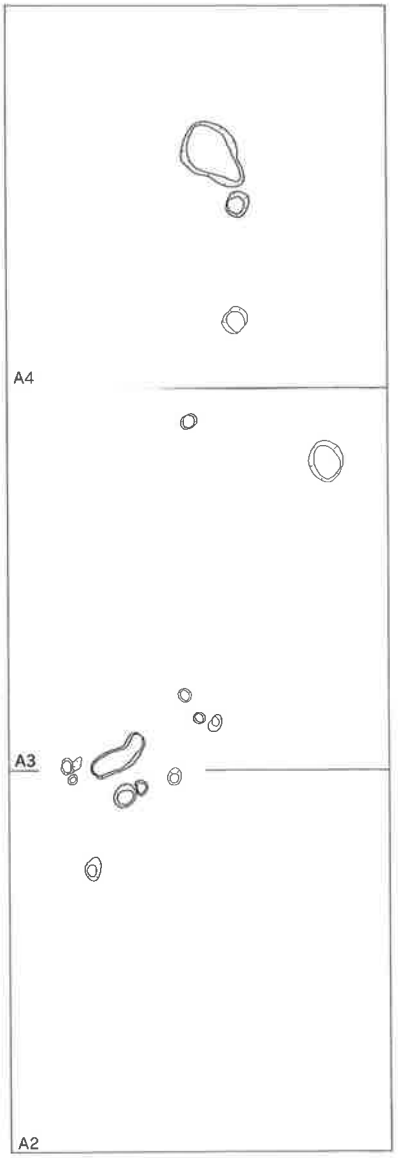
第９図　調査区土層図（1/80）

3．遺構（第10図～第29図）

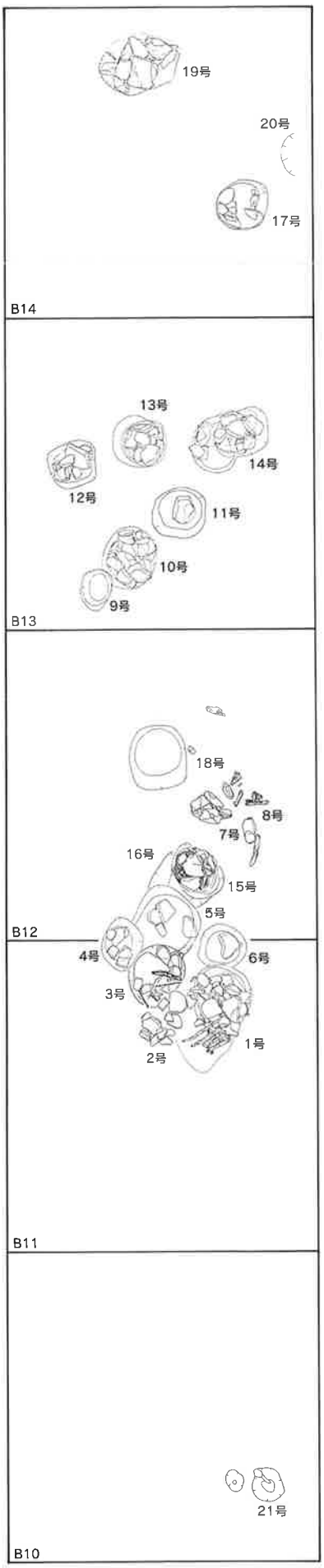
遺構は、Ａ区の柱穴群（？）とＢ区のドングリ貯蔵穴に大きく別けることができる。

Ａ区の柱穴は、大きさも様々で全体に貧弱であり、規則性もなかった。調査範囲が限定されていたので建物を建てるまでには至らなかった。覆土は黒褐色であった。Ａ３区の東壁付近で検出した柱穴は径55cmあり、縄文土器片14点、黒曜石製石核91点・剥片37点・砕片182点、安山岩製石核15点・剥片29点・砕片134点・灰青色黒曜石製砕片１点が出土している。Ａ４区の南壁付近で検出した柱穴は径38cmあり、縄文土器片３点、黒曜石製剥片１点・砕片14点、安山岩製剥片17点・砕片11点・灰青色黒曜石製剥片２点が出土している。

Ｂ区では11～14区においてドングリ貯蔵穴を多数検出することができた。以下それぞれの貯蔵穴について説明を行う。



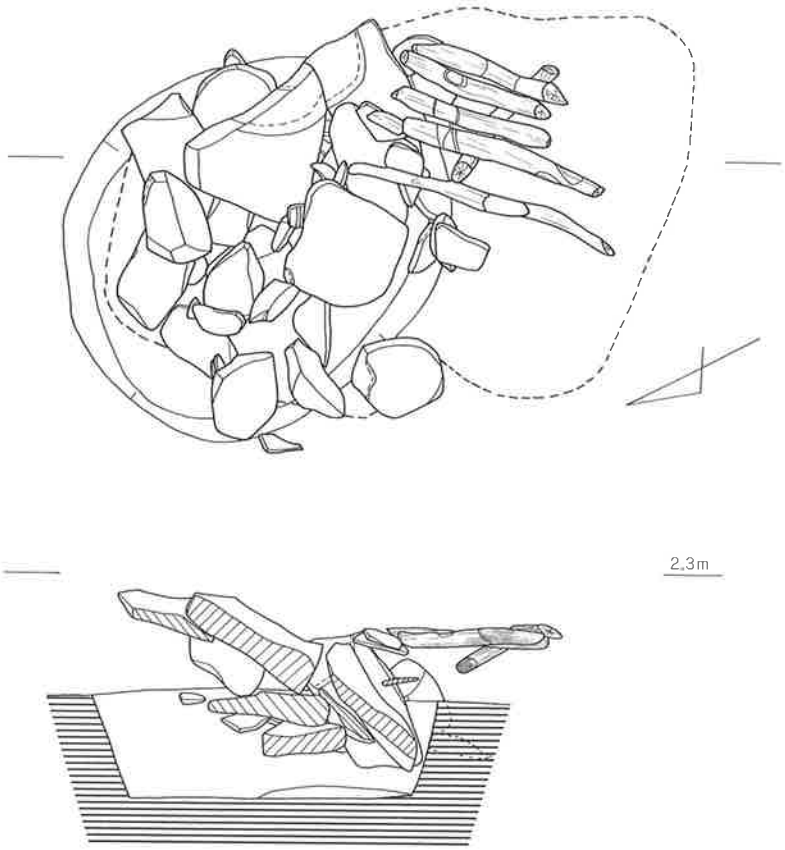
第10図　遺構配置図①（1/100）



第11図　遺構配置図②（1/100）

１号貯蔵穴（第12図）

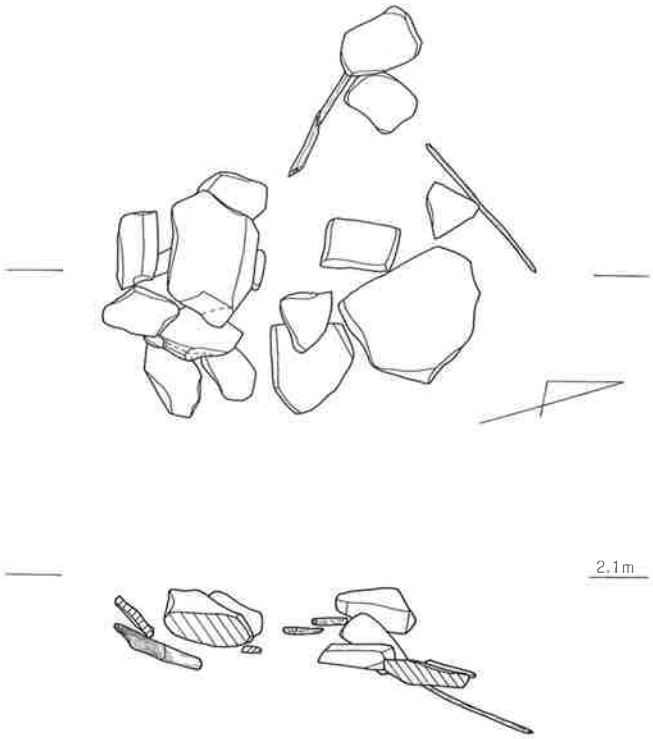
１号貯蔵穴はＢ11区の北東隅で検出した。表面に長さ40cm大の自然木４本、70cmから75cm大の自然木２本とその周囲に約10cmの堅果類層があり、精査して行くと北側に集中して貯蔵穴を持つことが確認された。貯蔵穴のプランは上面で109cm×93cmの楕円形状を呈しており、床面で190cm×154cmを測り平坦になっている。深さは30cmである。貯蔵穴の内部には礫が認められ、礫の下からも多量のイチイガシ・ツブラジイ等の堅果類が検出されていることから礫は本来は重しとして利用していたものと思われる。検出した自然木については科学分析を行っており、そちらを参照していただきたい。ちなみに材質はクスノキ科のシロダモであった。



第12図　１号貯蔵穴実測図（1/20）

２号遺構（第13図）

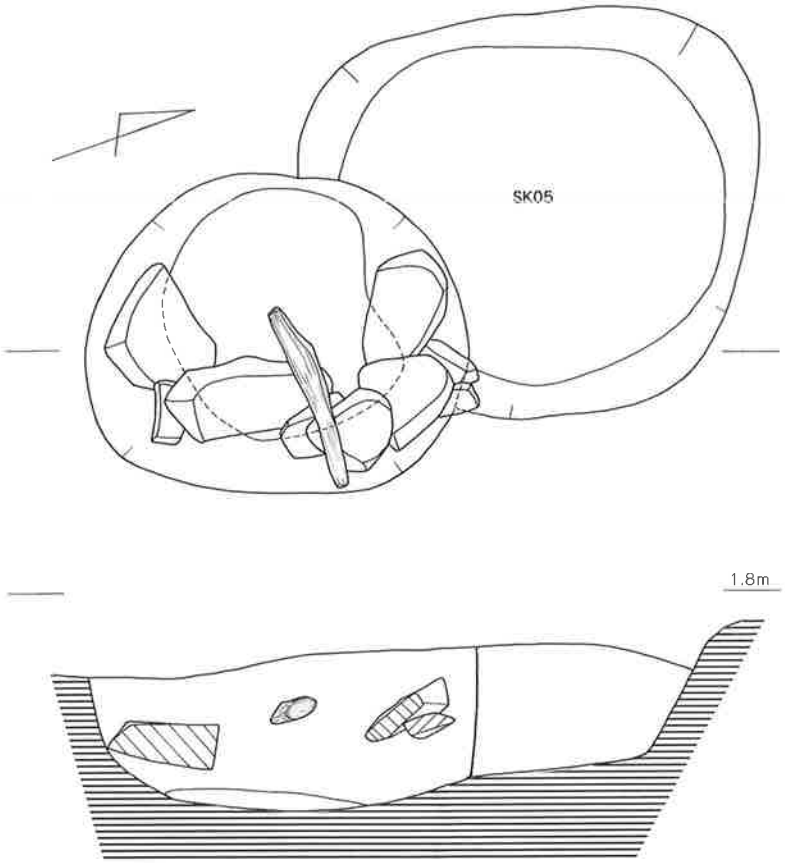
２号遺構は１号貯蔵穴のすぐ西側で検出した。貯蔵穴を検出することができなかった。約100cmの範囲に自然石が集中していたため遺構としてあつかった。１号あるいは３号貯蔵穴を構築する際に集められて最終的に使用されなかった自然石が残ったものと思われる。



第13図　２号遺構実測図（1/20）

３号貯蔵穴（第14図）

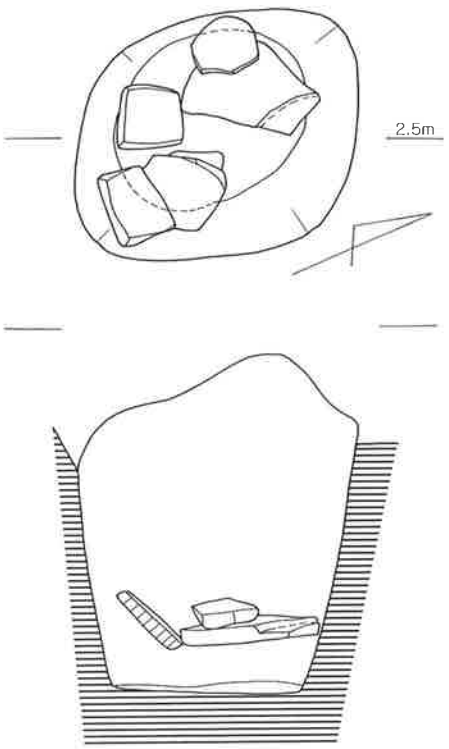
３号貯蔵穴は１号・２号に隣接しており、Ｂ11区北側で検出した。５号貯蔵穴の南側を切っており、貯蔵穴のプランは上面で102cm×84cmの楕円形状を呈している。床面は中央がややくぼんでおり65cm×65cm、深さは41cmを測る。貯蔵穴の中央には礫がなく壁際に沿って並べてある状況である。自然木が１本検出されている。堅果類が検出されている。出土遺物としては、黒曜石製彫器・使用痕ある剥片・石核・剥片・砕片、安山岩製石核・剥片、縄文土器細片がある。



第14図　３号貯蔵穴実測図（1/20）

４号貯蔵穴（第15図）

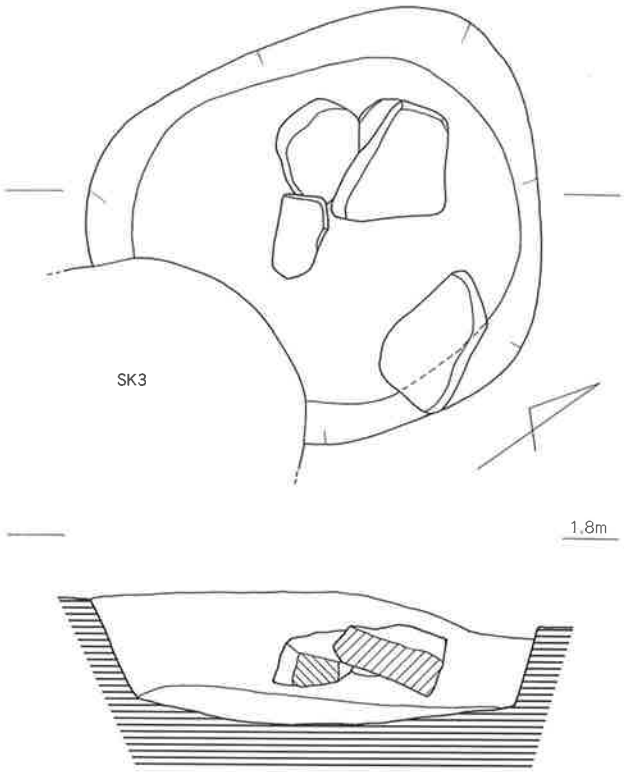
４号貯蔵穴はＢ11・12区にまたがって検出した。遺構の一部が３号・５号貯蔵穴の上部に営まれている。貯蔵穴のプランは上面で74cm×64cmのほぼ隅丸方形状を呈している。床面は55cm×44cmの楕円形状を呈している。深さは約90cmを測る。貯蔵穴内部には、扁平の礫が下部面に見られた。



第15図　４号貯蔵穴実測図（1/20）

５号貯蔵穴（第16図）

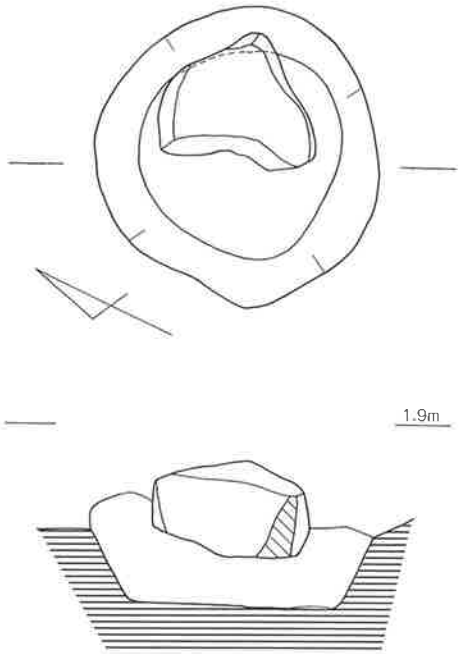
５号貯蔵穴は４号貯蔵穴同様にＢ11・12区にまたがって検出した。遺構の一部が16号貯蔵穴の上部に営まれている。貯蔵穴のプランは上面で120cm×107cmのほぼ楕円形状を呈している。床面は100cm×90cmの楕円形状を呈している。深さは約35cmを測る。貯蔵穴の下部面には、やや扁平の礫が５個残っていた。木の葉と堅果類が出土している。出土遺物としては、黒曜石製使用痕ある剥片・砕片、安山岩製剥片・砕片、縄文土器細片が出土している。



第16図　５号貯蔵穴実測図（1/20）

６号貯蔵穴（第17図）

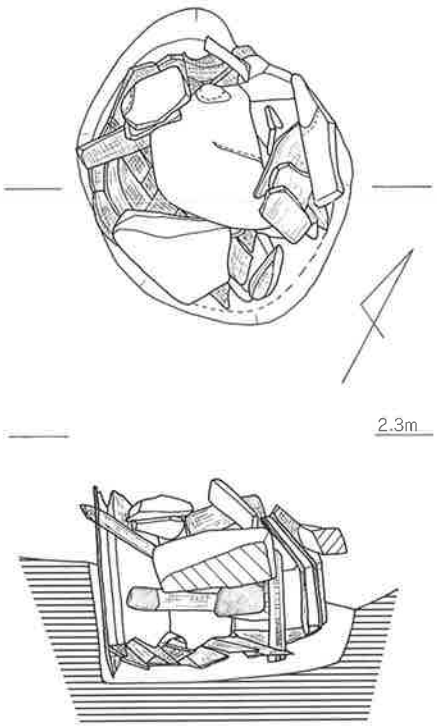
６号貯蔵穴は１号貯蔵穴の北側のＢ11・12区にまたがって検出した。貯蔵穴のプランは上面で80cm×75cmのほぼ円形を呈している。床面は60cm×54cmのほぼ円形で平坦である。深さは30cmを測る。人頭大の礫が１個残っていた。出土した遺物には縄文土器細片があった。



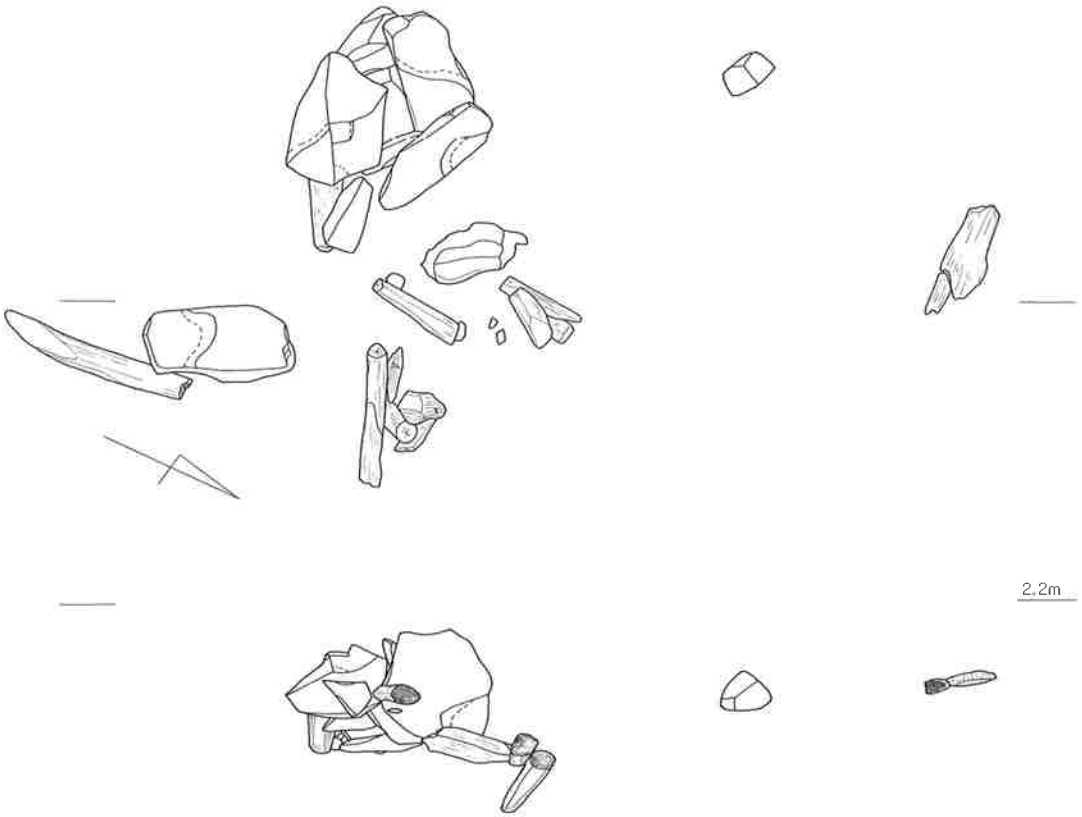
第17図　６号貯蔵穴実測図（1/20）

７号貯蔵穴（第18図）

７号貯蔵穴は下谷遺跡の貯蔵穴の中でも保存が良く貯蔵穴の構築方法が究明できる資料である。Ｂ12区南側で５号貯蔵穴の北側で検出した。貯蔵穴上部の西側にはほぼ垂直にセンダンの加工材を立て囲み、中間部に２本の木材をおきこの木材が水による流失おこさないように中央に大きな礫を重石として塞いだ状態を呈していた。薄い樹皮を床面より約５cm上の所に一面に敷いた状態で検出した。この樹皮もセンダンと思われる。貯蔵穴のプランは上面で86cm×69cmのほぼ円形を呈し、床面は67cm×64cmのほぼ円形で平坦である。深さは32cmを測る。内部からは多くのアカガシ・ツブラジイ等の堅果類が出土している。出土遺物には黒曜石製石鋸がある。



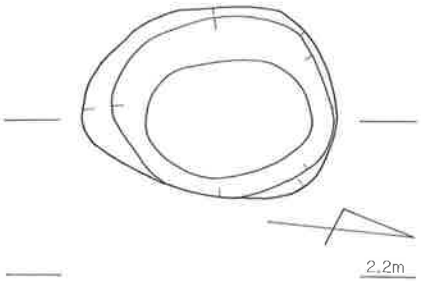
第18図　７号貯蔵穴実測図（1/20）



第19図　８号遺構実測図（1/20）

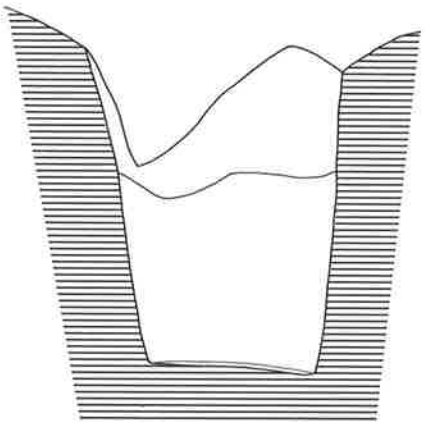
８号遺構（第19図）

７号貯蔵穴の北側で検出した。２号遺構と同様に下部構造の貯蔵穴を検出することができなかった。礫と自然木が集中していたため遺構としてあつかった。７号あるいは13号貯蔵穴を造る際に集められて、最終的に使用されなかった部分が残った可能性がある。



９号貯蔵穴（第20図）

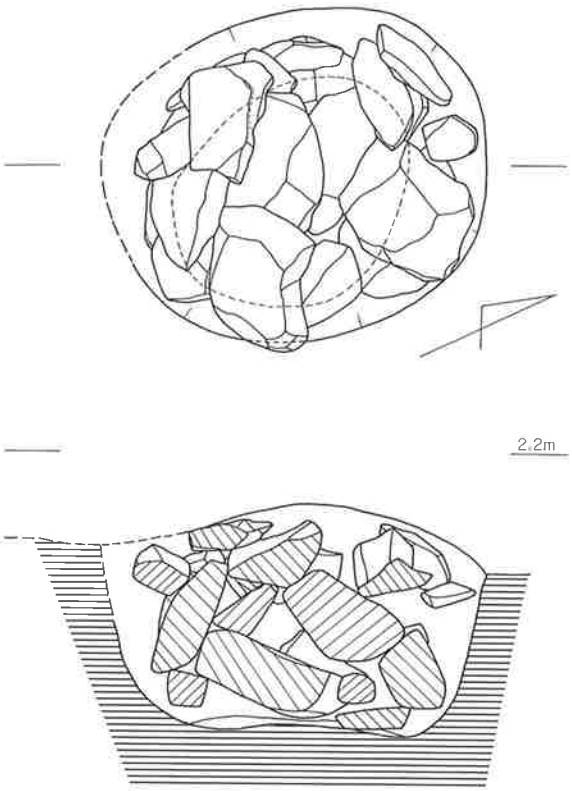
９号貯蔵穴はＢ13区南西隅で検出した。貯蔵穴のプランは上面で68cm×50cmの楕円形状を呈している。床面は44cm×30cmの楕円形状を呈している。深さは約87cmを測る。貯蔵穴内には、礫や自然石等は発見できなかった。



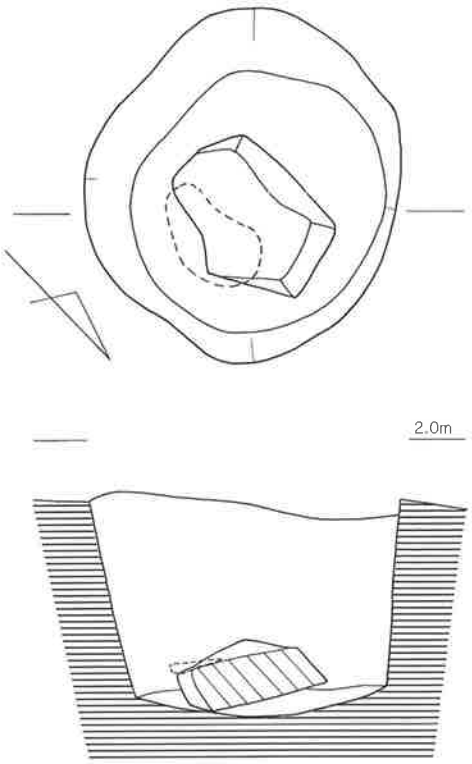
第20図　９号貯蔵穴実測図（1/20）

10号貯蔵穴（第21図）

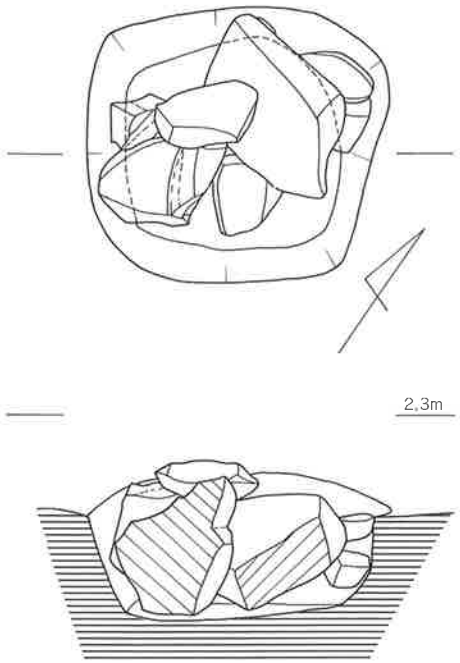
10号貯蔵穴はＢ13区南側、９号貯蔵穴の北東側に隣接して検出した。貯蔵穴のプランは上面で102cm×87cmの楕円形を呈し、床面も69cm×54cmの楕円形を呈している。深さは約60cmを測る。貯蔵穴の内部にはぎっしりと人頭大の礫がつまっていた。貯蔵穴内部からは多くの堅果類が出土している。出土した遺物には黒曜石製剥片がある。



第21図　10号貯蔵穴実測図（1/20）



第22図　11号貯蔵穴実測図（1/20）



第23図　12号貯蔵穴実測図（1/20）

11号貯蔵穴（第22図）

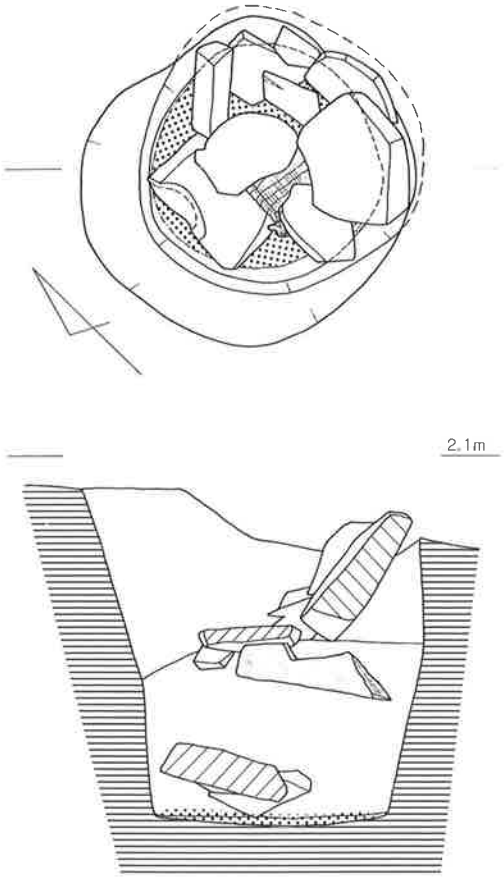
11号貯蔵穴はＢ13区の中央部、10号貯蔵穴の北東側に隣接して検出した。貯蔵穴のプランは上面で94cm×81cmの楕円形を呈し、床面は70cm×67cmのほぼ円形を呈している。深さは約59cmを測る。貯蔵穴の最下部には人頭大の礫が１個あった。その礫の上面から堅果類が出土している。

12号貯蔵穴（第23図）

12号貯蔵穴はＢ13区の中央部西側、13号貯蔵穴の西側に隣接して検出した。貯蔵穴のプランは上面で86cm×73cmのほぼ方形を呈し、床面は57cm×55cmのほぼ方形を呈している。深さは約40cmを測る。貯蔵穴の内部には拳大から人頭大の礫があった。

13号貯蔵穴（第24図）

13号貯蔵穴はＢ13区の中央部、12号貯蔵穴と14号

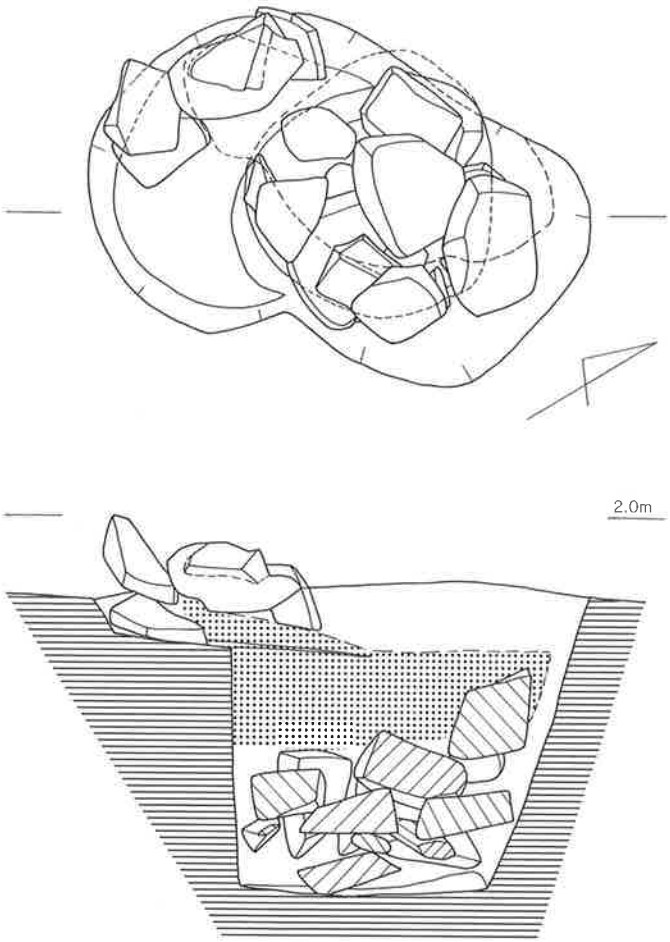


第24図　13号貯蔵穴実測図（1/20）

貯蔵穴のほぼ中間で検出した。貯蔵穴のプランは上面で89cm×87cmの円形を呈し、床面は67cm×62cmのほぼ円形を呈し平坦である。深さは約88cmを測る。貯蔵穴の上面と最下部に礫があり、その中間に木材が１本あった。床面には貼り付いた状況でアカガシ等の堅果類を検出した。

14号貯蔵穴（第25図）

14号貯蔵穴はＢ13区の中央部よりやや東側、13号貯蔵穴の東側で検出した。西側に浅いステップ状の段を有する貯蔵穴である。貯蔵穴のプランは上面で132cm×76cm、床面は64cm×62cmのほぼ円形を呈している。深さは約83cmを測る。西側のステップ上に20cm～30cm大の礫があり、貯蔵穴の中央部分から最下部にかけて礫がある。ステップの礫下面から中央部にかけてイチイガシ等の堅果類を検出した。



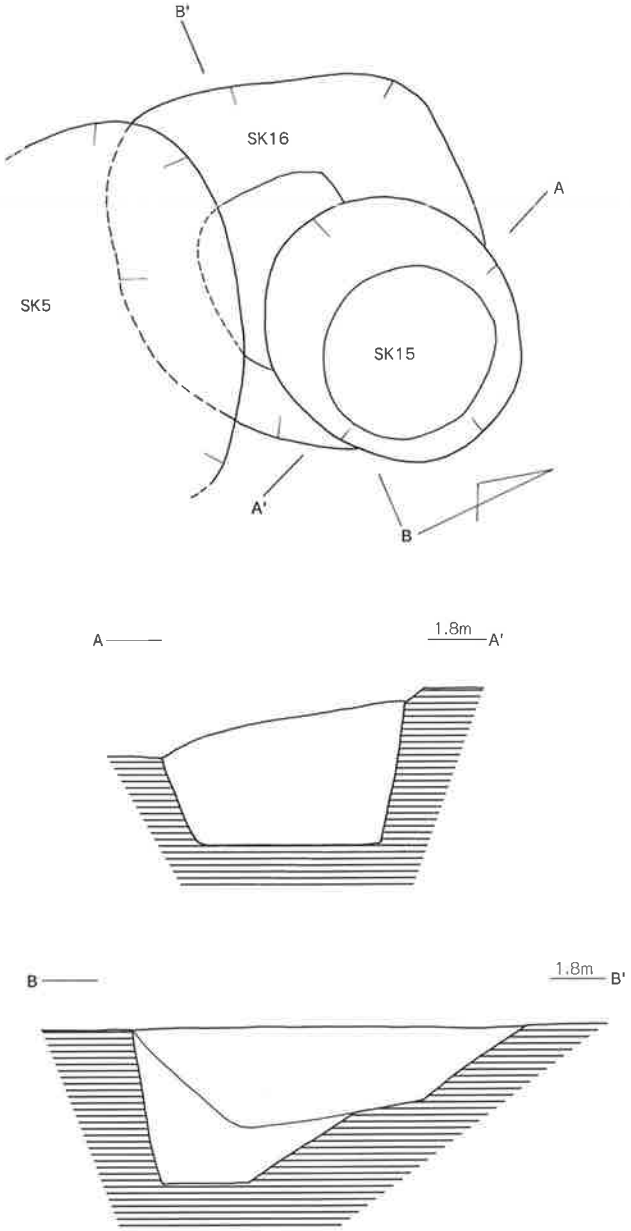
第25図　14号貯蔵穴実測図(1/20)

15号貯蔵穴（第26図）

15号貯蔵穴はＢ12区の南側、７号貯蔵穴の下部に検出し、16号貯蔵穴の東側を切って構築されていた。貯蔵穴のプランは上面で72cm×64cmの楕円形状を呈し、床面は46cm×44cmのほぼ円形を呈している。深さは約41cmを測る。礫は検出できなかった。

16号貯蔵穴（第26図）

16号貯蔵穴もＢ12区の南側、７号貯蔵穴の下部に検出し、15号貯蔵穴によって貯蔵穴の東側と５号貯蔵穴によって貯蔵穴の南側を切られている。貯蔵穴のプランは上面で約105cm×約95cmの楕円形状を呈し、床面は約47cm×約42cmの楕円形状を呈し、深さは25cmを測る。



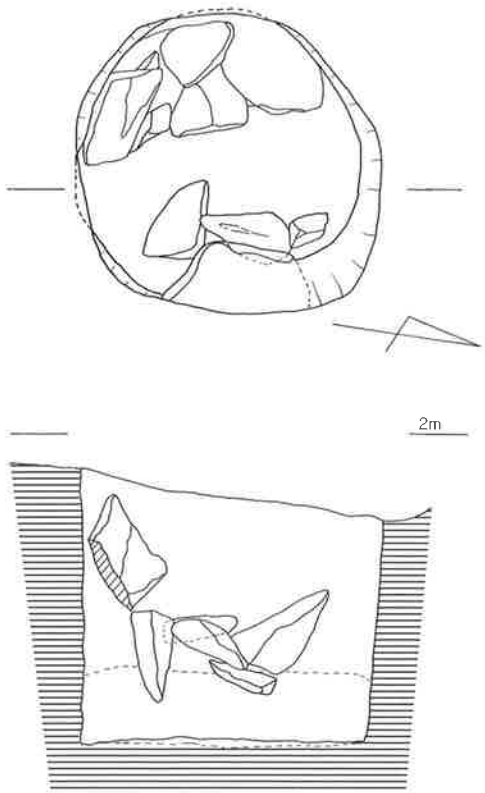
第26図　15号・16号貯蔵穴実測図（1/20）

17号貯蔵穴（第27図）

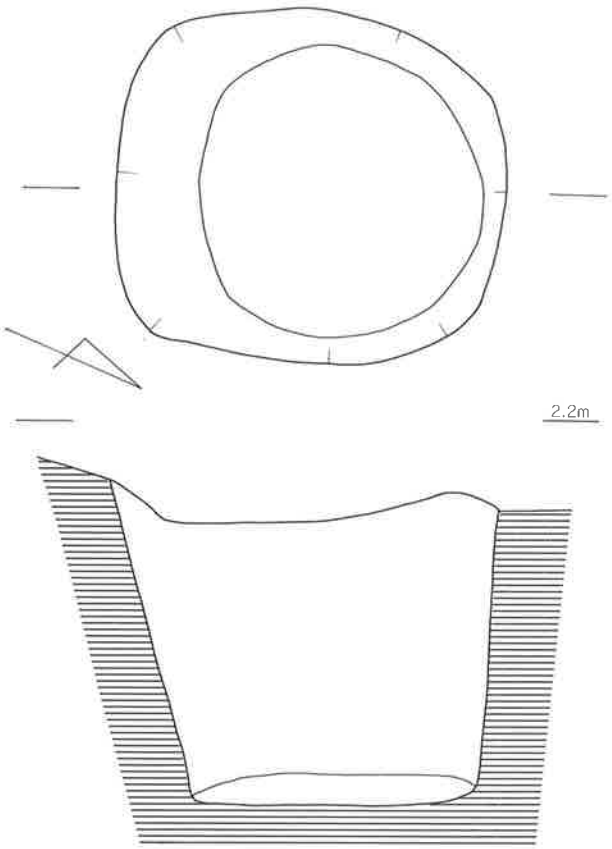
17号貯蔵穴はＢ14区の東側で検出した。貯蔵穴のプランは上面で89cm×78cmのほぼ円形を呈し、床面は81cm×75cmの楕円形状を呈し平坦である。深さは73cmを測る。壁面は垂直に立ち上がっており、貯蔵穴の東側と西側に礫があり、礫の下部から床面にかけて約20cmの厚さで堅果類を検出した。出土遺物には黒曜石製剥片、縄文土器細片がある。

18号貯蔵穴（第28図）

18号貯蔵穴はＢ12区の中央部で検出した。貯蔵穴のプランは上面で103cm×94cm楕円形状を呈し、床面は77cm×75cmの円形を呈し平坦である。深さは83cmを測る。北側の壁面はほぼ垂直に立ち上がっている貯蔵穴である。内部に礫は検出できなかった。



第27図　17号貯蔵穴実測図（1/20）



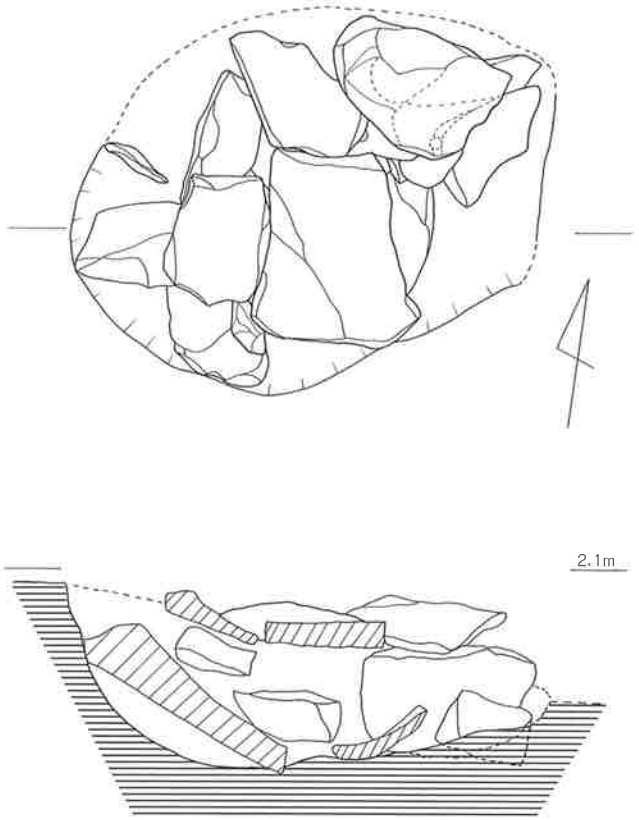
第28図　18号貯蔵穴実測図（1/20）

19号貯蔵穴（第28図）

19号貯蔵穴はＢ14区の北側で検出した。湧水地点にすぐそばにあることとＢ14区の北壁に隣接する位置にあるため充分な調査ができなかった。貯蔵穴のプランは北側が壁面内にあるため不明であるが上面で137cm×約95cmの楕円形状を呈していると思われる。床面は約90cm×60cm前後の楕円形状を呈しているものと思われる。深さは48cmを測る。貯蔵穴内部には他の貯蔵穴より大きめの礫があった。堅果類も出土している。出土遺物には縄文土器細片がある。

20号貯蔵穴（第11図）

20号貯蔵穴はＢ14区の17号貯蔵穴の北



第29図　19号貯蔵穴実測図（1/20）

東側で東壁の中で検出した。貯蔵穴の中心部分が調査区外であるため貯蔵穴のプラン等は不明である。貯蔵穴内部より堅果類が出土しているが将来の調査に譲りたいと思う。

21号貯蔵穴（第11図）

21号貯蔵穴は下谷遺跡の貯蔵穴の中でも最も規模の小さい貯蔵穴で、Ｂ10区の南東部分で検出した。貯蔵穴のプランは上面で52cm×50cmの円形を呈している。床面は22cm×18cmの楕円形状を呈している。深さは約25cmを測る。貯蔵穴内部には堅果類の出土があった。出土した遺物には黒曜石製砕片、安山岩製砕片がある。この21号貯蔵穴の西側にも上面で36cm×28cmの円形を呈した遺構がある。21号貯蔵穴に附随するものであろうか不明である。（中田敦之）

表３　貯蔵穴一覧表

挿図番号	遺構番号	長　径	短　径	深　さ	備　　考
第12図	1	109	93	30	
第13図	2				
第14図	3	102	84	41	５号を切る
第15図	4	74	64	90	５号を切る
第16図	5	120	107	35	
第17図	6	80	75	30	
第18図	7	86	69	32	15号の上に構築
第19図	8				
第20図	9	68	50	87	
第21図	10	102	87	60	
第22図	11	94	81	59	
第23図	12	86	73	40	
第24図	13	89	87	88	
第25図	14	132	76	83	
第26図	15	72	64	41	
第26図	16	105	95	25	16号を切る
第27図	17	89	78	73	
第28図	18	103	94	83	
第29図	19	137	95	48	
第11図	20				全容不明
第11図	21	52	50	25	

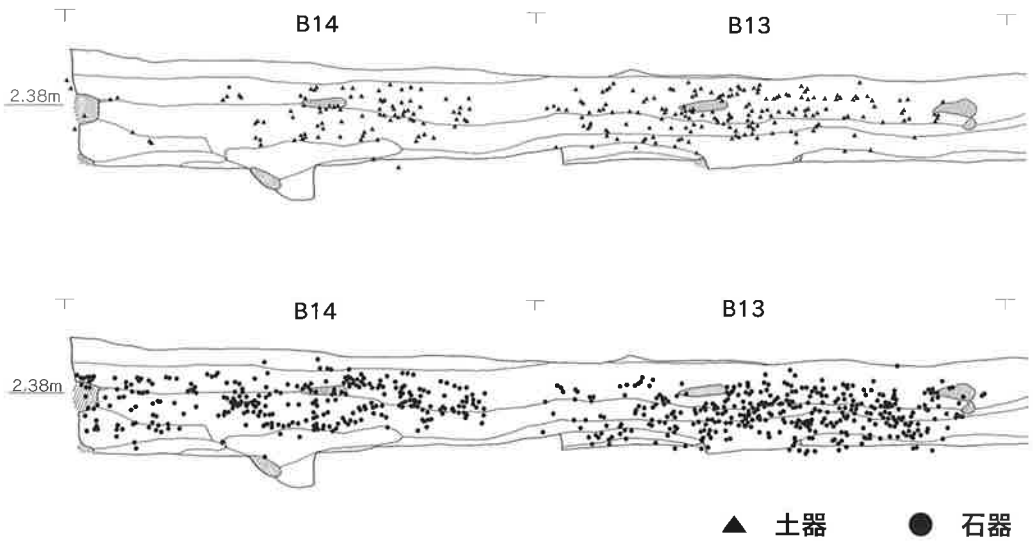
４．遺物（第３０図～第５７図）

遺物については、Ａ１区～Ａ４区ではⅡ層より下部において、黒曜石剥片や安山岩が多く出土している。また、弥生土器も出土している。Ｂ９区～Ｂ14区のⅡ～Ⅲ層からは縄文土器、黒曜石製品・剥片が多く出土している。Ⅳ層～Ⅴ層では黒曜石製品・黒曜石剥片が多く出土している。約25,000点が出土しているが、そのうち実測できた遺物417点を図示している。また、土器や石器が多く出土したＢ13区・Ｂ14区のⅡ～Ⅷ層から出土した遺物を対象として垂直分布図を作成している。

縄文時代の土器　（第３１図～第３３図）

出土した縄文土器の多くが細片で磨耗しており、接合に困難を伴うものが多く、器形が復元できるものは少なかった。その中から実測できたもの74点を図示している。

１～13は胎土に滑石の粉末を多く含む土器である。１は中期の並木式土器である。押引文が施されている。内面は暗灰褐色、外面は暗橙灰色を呈する。２～13は坂の下式土器である。２～７は外面に凹線文が施されている。２・３はヘラで綾杉状の凹線文を施し、内面は指ナデがなされている。８は深鉢の底部で、縦の凹線文が施されている。復元底径13.0cmである。内外面とも淡橙色を呈する。９・10・11は深鉢の底部で、外面には指頭圧痕がみられる。12は深鉢の底部で、復元底径8.5cmである。内面は灰色、外面は淡橙灰色を呈する。13は深鉢の底部で、復元底径12.9cmである。内面は灰褐色、外面に茶褐色を呈する。14は口縁部を屈曲肥厚させて文様帯を作出している辛川Ⅱ式併行の土器である。２本の沈線の間に５個の刺突文が施され、その下には刻目が施されている。内外面とも橙色を呈している。15は並木式土器の口縁部である。口縁部文様帯には押引文が施されている。内面は淡橙色、外面は淡灰褐色を呈し、胎土には角閃石、雲母、石英、長石を含む。16は浅鉢の口縁部、17は鉢の胴部で、いずれも２本の沈線を有する。型式は不明である。18・19・21は北久根山式土器の胴部である。胴部がやや膨らみを持つ深鉢である。いずれも外面に沈線を有する。22は北久根山式



第30図　Ｂ13・14区遺物垂直分布図（1/80）

土器の橋状把手である。内外面とも暗茶褐色を呈する。１はＢ13区Ｐ301、３はＢ13区Ｐ165、４はＢ13区Ｐ139、５はＢ13区Ｐ151、６はＢ13区Ｐ158、７はＢ14区Ｖ層、８はＢ14区Ｐ７、９はＡ３区Ⅲ層、10はＢ13区Ｐ34、11はＢ13区Ｐ150、12はＢ13区Ｐ37、13はＢ14区Ｐ82出土である。14はＢ13区Ｐ344、15はＢ14区Ｐ18、16はＢ13区Ｐ134、17はＢ12区Ⅳ層、18はＢ13区Ｐ73、19はＢ13区Ⅳ層、20はＢ12区Ｖ層、21はＢ12区Ⅳ層、22はＢ13区Ｐ454出土である。

23～42は後期の条痕文が施された粗製の土器である。胎土に雲母を含む。23はＡ４区Ｖ層、25・26・28はＢ９区Ⅱ層、29は表採、30はＢ11区Ｖ層、31はＢ14区Ⅲ層出土である。32・35は表採、33はＢ９区Ⅱ・Ⅶ層、34・36・38・40・42はＢ９区Ⅱ層、37はＢ９区７層、39はＢ11区Ｖ層、41はＢ13区Ⅳ層出土である。

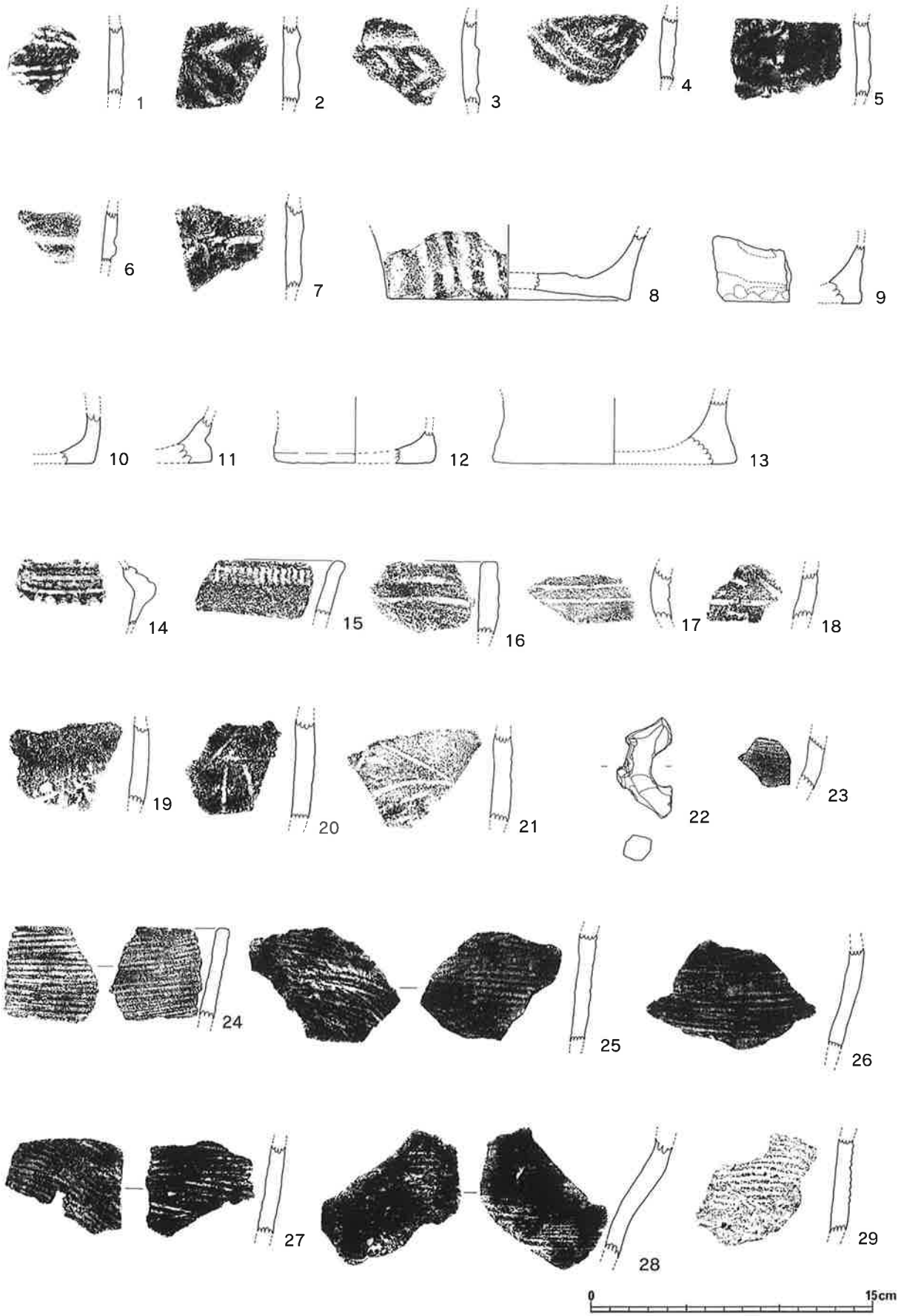
44・48～50は三万田式土器の浅鉢で、いずれも外面に沈線をもつ。44・48・50は口縁部が外反している。44は内外面とも淡黄茶色を呈し、胎土に長石・雲母を含む。48は内外面とも黄茶色を呈し、胎土に雲母・角閃石を含む。49は胴部で、口縁部にむかって外反している。50は口縁部を穿孔している。44はＡ１区Ⅳ層、48はＡ３区Ⅱ層、49はＢ12区Ｖ層、50はＢ13区Ⅳ層出土である。

45～47は御手洗Ｃ式土器の鉢である。口縁部には刻み目突帯文が施されている。45は内面は暗灰茶褐色、外面は茶褐色を呈し、胎土に雲母と滑石の粉末を少量含む。46は内面は暗茶褐色、外面は暗橙褐色を呈し、胎土に長石・雲母を含む。47は内面は暗橙褐色、外面は橙褐色を呈し、胎土に雲母・砂粒を含む。45はＢ12区・Ｂ13区間ベルトⅢ層、46はＢ９区Ｖ層出土である。

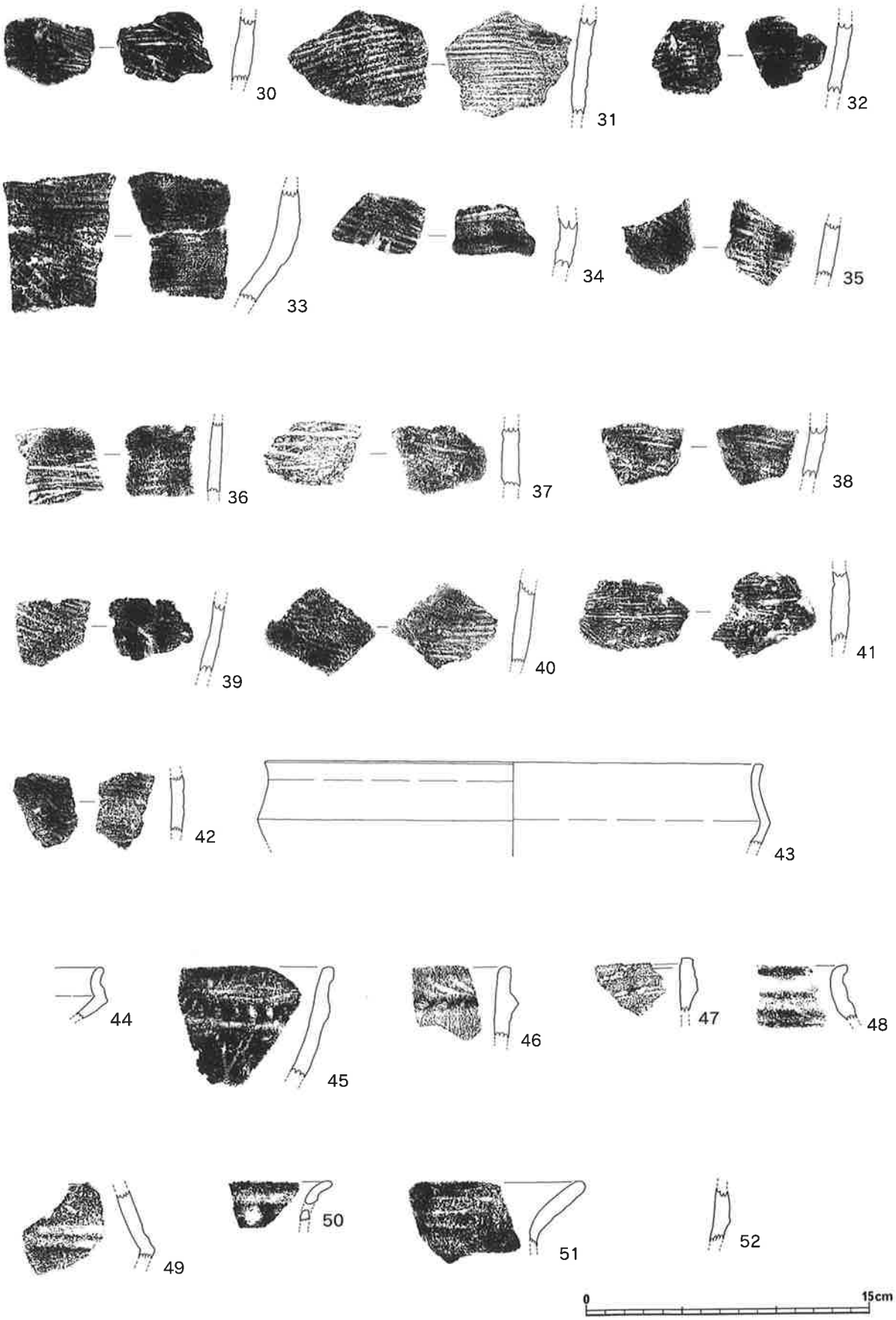
52は阿高式系の土器である。Ｂ10区Ⅲ層出土である。

53～74は鉢の底部である。53は底径8.7cmである。内面に淡黄白色、外面に橙色を呈し、胎土には角閃石・雲母を含む。54は底径8.2cmである。内面は黄灰色、外面に淡橙色を呈し、胎土に雲母・角閃石・長石を含む。55は復元底径6.8cmである。内面に灰褐色、外面に橙色を呈し、胎土に雲母・石英・角閃石を含む。56は内面に灰色、外面に淡茶灰色を呈し、胎土に石英・雲母・角閃石を含む。57は内面に淡黄白色、外面に橙色を呈し、胎土に雲母・長石・角閃石を含む。58は復元底径5.4cmである。60は復元底径5.8cmである。61は復元底径6.6cmである。62は復元底径11.0cmである。64は復元底径5.8cmである。66は復元底径11.5cmである。67は復元底径13.0cmである。72は復元底径3.8cmである。73は復元底径8.5cmである。74は復元底径8.3cmである。53・62・70は排土、54はＢ９区Ｖ層、55はＢ９区Ⅶ層、56はＢ14区Ｐ88、57はＡ３区Ⅲ層、58は表採、59はＢ９区Ⅱ層、61はＢ10区・Ｂ11区間ベルトⅢ層、63はＢ13区Ｐ15、64はＢ11区Ⅲ層、65はＢ13区Ｐ22、66はＡ１区Ⅳ層、67はＢ12区Ⅳ層、71はＢ14区Ｐ87、74はＢ10区Ⅳ層出土である。

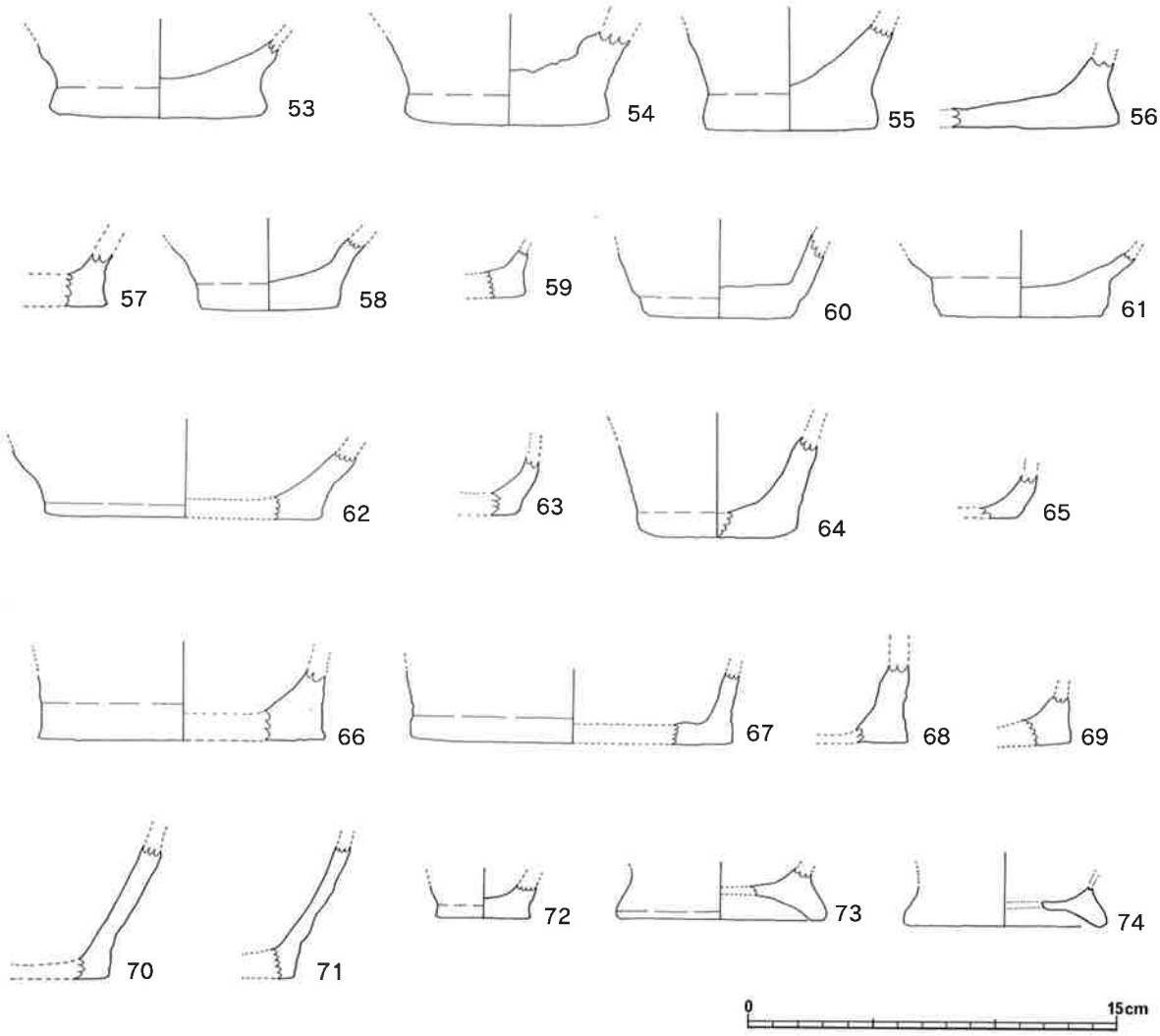
なお、43・51は当初縄文土器に入れていたが、検討の結果、器形・胎土等より古式土師器と思われる。いずれも深鉢の口縁部である。43は口縁部が外反し、胴部が膨らみをもつ。内面は暗橙灰色、外面は暗灰褐色を呈し、胎土に雲母・石英・長石を含む。復元口径は26.3cmである。51は内面に２個の刺突文がみられ、凹線文もわずかに確認できる。外面には沈線が確認できる。内外面とも淡茶褐色を呈し、胎土に長石・雲母・角閃石を含む。



第31図　出土遺物①（1/3）



第32図　出土遺物②（1/3）



第33図　出土遺物③（1/3）

旧石器時代の石器（第34図）

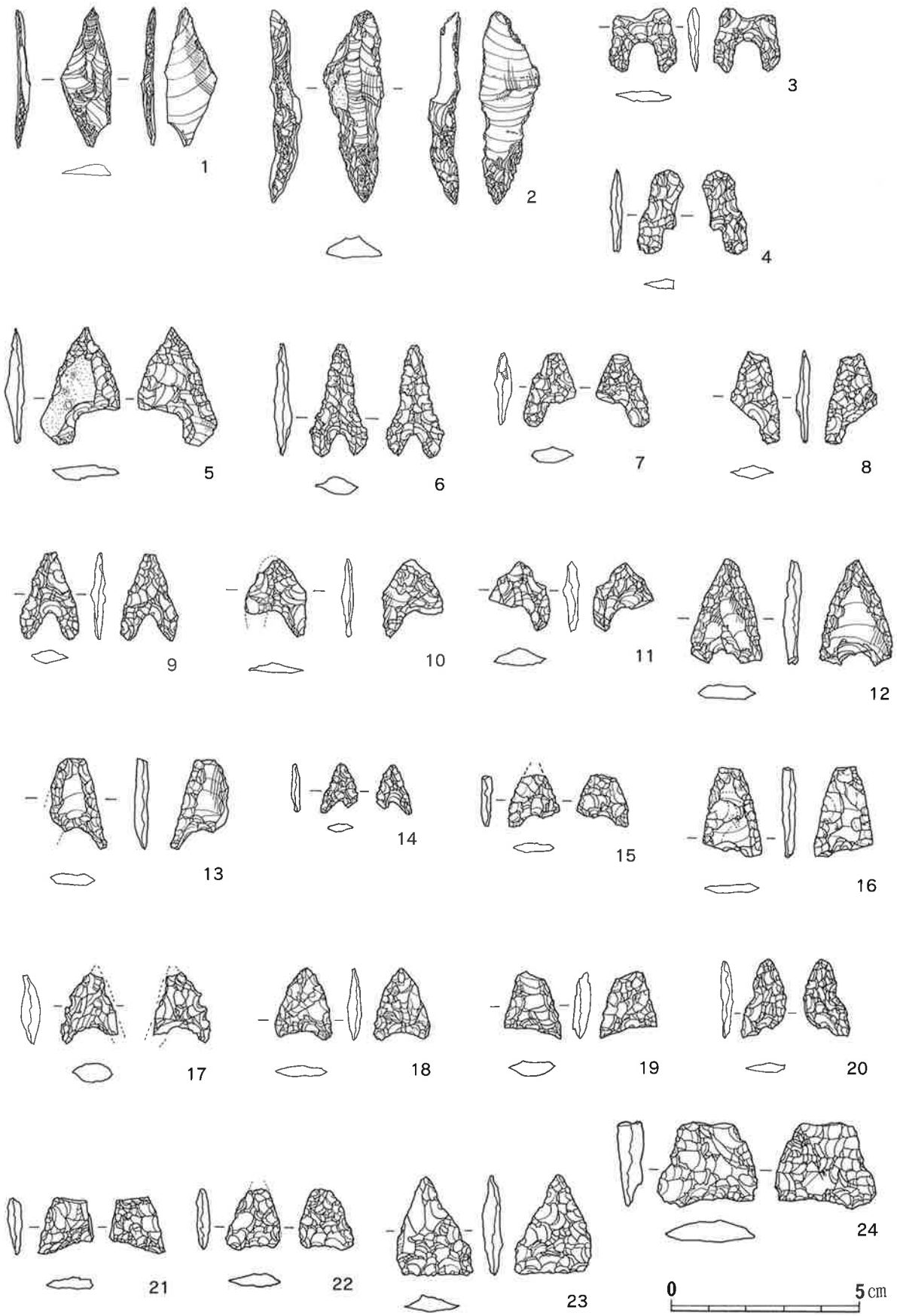
１・２は旧石器時代の石器で、ナイフ形石器である。いずれも黒曜石の縦長剥片を用いている。１は二側縁加工が施され、主要剥離面側からブランティング加工が施されている。基部が一部欠損している。２は二側縁加工が施され、主要剥離面側からブランティング加工が施されている。一部に自然面が残っている。１はB11区V層、２はB９区II層出土である。

縄文時代の石器（第34図～55図）

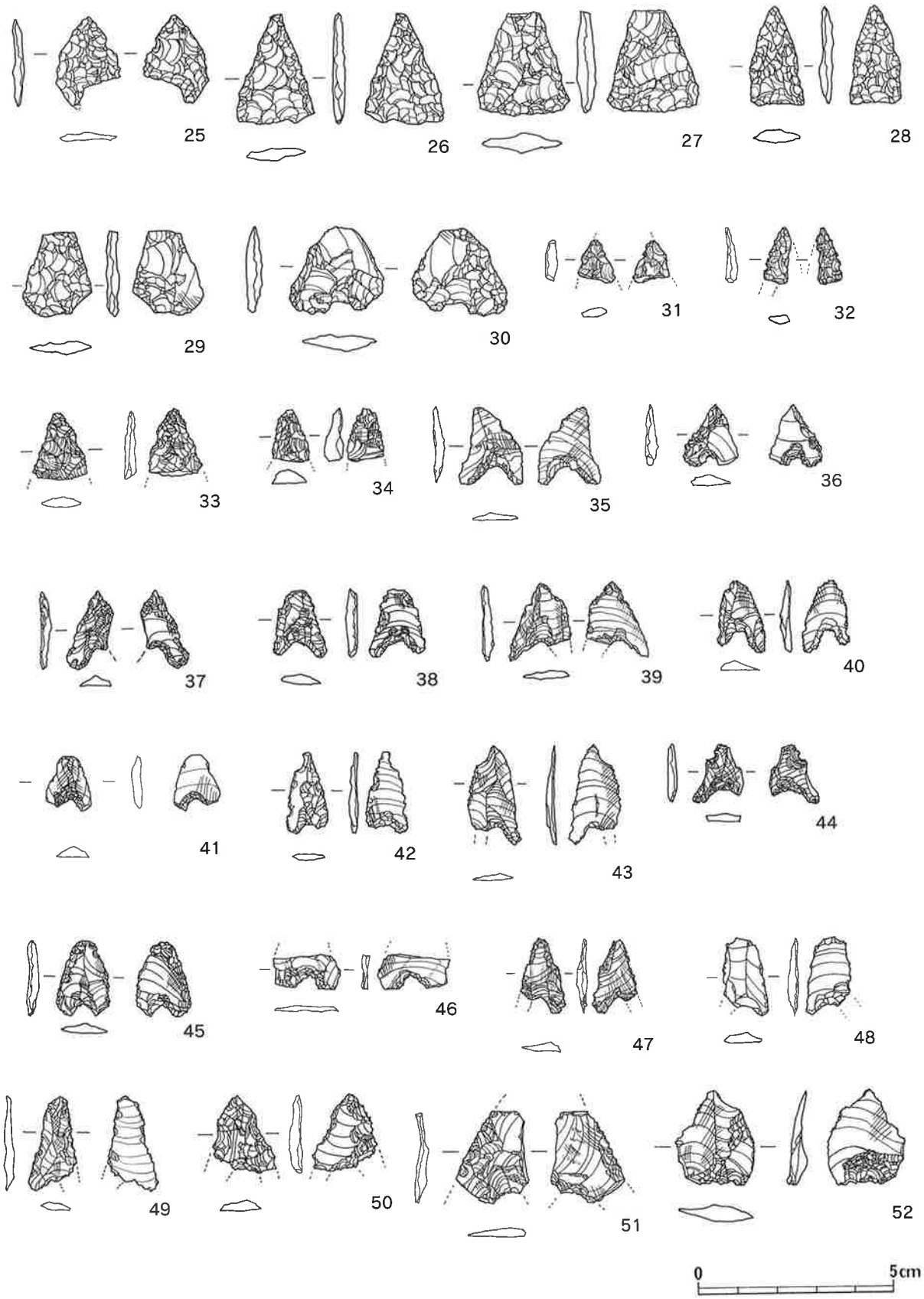
３～302は縄文時代の石器である。３～34は石鏃である。８は安山岩製で、それ以外はすべて黒曜石製である。分類については、おおまかな基部の形態で行った。凹基無茎鏃で基部中央の抉入加工が深く作り出されているもの10点、凹基無茎鏃だが凹みが浅くわずかに内湾するもの14点、平基無茎鏃３点、欠損などで不明のもの４点である。３～11・13は基部中央の抉入加工が深く作り出された

凹基無茎鏃である。３は先端部が欠損している。４は一方の脚部が欠損している。５は一部に自然面が残っているが、裏面に緻密な刃部調整が施されている。脚部が一部欠損している。６は先端部が長く尖っており、脚部は短い。刃部から脚部にかけて外湾しており、刃部は鋸歯状を施し、緻密な調整がなされている。先端部がわずかに欠損している。７は緻密に剥離調整され、一方の脚部と先端部から刃部にかけて欠損している。８は刃部に鋸歯状加工が施されているが、粗雑な剥離調整がなされている。９は刃部に鋸歯状加工を施しており、脚部は長く、やや内湾している。先端部が欠損している。10は平坦に剥離調整されているが粗雑である。器形は正三角形を呈し、脚部は長い。一方の脚部は欠損している。11は脚部と先端部から刃部にかけて欠損している。剥離調整は粗雑である。13は脚部が細く加工されており、両面に同一方向からの剥離面を残し、側縁には刃部調整が行われている。先端部と一方の脚部が欠損している。12・14～22・25・28・29・30は凹みの浅い凹基無茎鏃である。いずれも器形が二等辺三角形を呈している。12は両面に同一方向からの剥離面を残し、周縁部に二次加工が施されている。刃部は鋸歯状を呈する。先端部の一部が欠損している。14は小型の石鏃で、刃部は鋸歯状に加工されている。先端部と脚部の一部が欠損している。15は刃部に鋸歯状加工が施されており、先端部と脚部の一部が欠損している。16は安山岩製で、平坦に剥離調整されている。先端部と一方の脚部が欠損している。21は刃部に鋸歯状加工が施され、脚端部がやや外湾している。一方の脚部と先端部から基部にかけて欠損している。22は刃部に鋸歯状加工が施され、粗雑な剥離調整が行われている。先端部が欠損している。30は、表裏両面に剥離面を残し、基部と片側に二次加工を施している。先端部は作り出されていないため、未製品と思われる。23・26・27は平基無茎鏃である。２７は先端部が欠損している。３はＡ４区Ⅴ層、４・８はＢ10区Ⅳ層、５・６はＡ３区Ⅳ層、７はＡ３区Ⅴ層、９はＢ11区Ⅲ層、10・32・33は表採、11・18はＡ３区、12・20・21はＡ２区Ⅲ層、13はＡ４区Ⅱ層、14はＡ４区Ⅳ層、15はＡ３区Ⅶ層、16はＡ４区Ⅵ層、17はＢ13区Ｓ134、19はＡ４区Ⅰ層、22はＢ10区Ⅰ層、23はＢ10区Ⅱ層、24はＢ14区Ｓ216、25はＡ２区Ⅰ層、26はＡ３区Ⅵ層、27はＢ14区Ⅲ層、29はＢ13区Ⅳ層、30・31はＢ14区Ⅱ層、34はＡ３区Ⅰ層出土である。

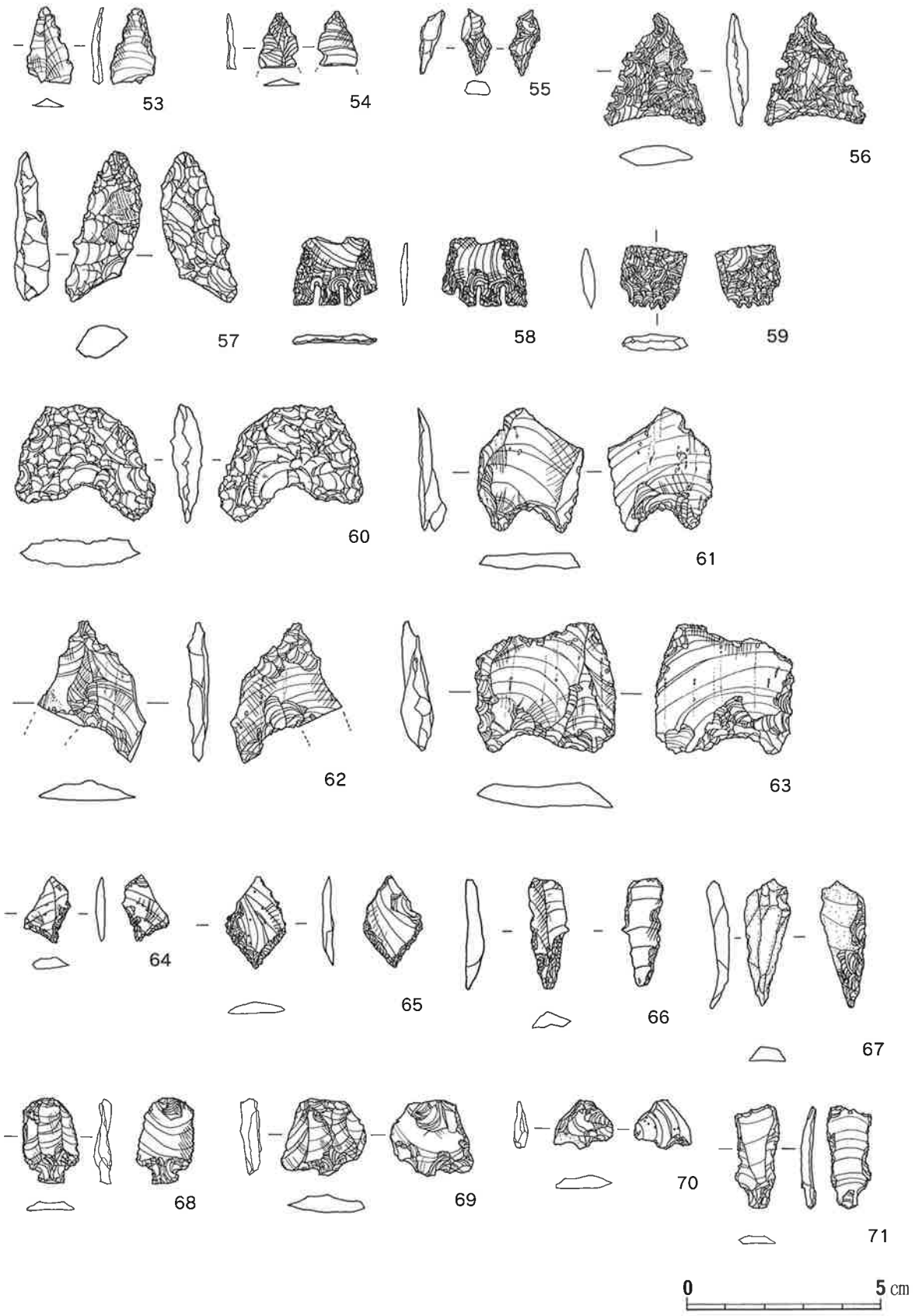
35～55は剥片鏃である。剥片鏃は、石核から剥がされた縦長剥片を素材とし、刃部形成などわずかな剥離調整を施しており、剥片の薄さを最大限に生かした大量生産が可能な石鏃である。21点を図示している。これらを器形から正三角形タイプと二等辺三角形タイプとに分類した。正三角形タイプは35～37・39・41・44・50である。いずれも凹基状を呈している。35は基部に調整が施されている。36は基部と刃部に調整が施され、鋸歯状を呈する。脚端部が欠損している。37は基部と刃部に調整が施され、鋸歯状を呈する。一方の刃部から脚部にかけて欠損している。39は基部に調整が施されている。41は基部に調整が施され、先端部と脚端部が欠損している。44は基部に調整が施されている。刃部には抉入加工が施されている。刃部から脚部にかけて欠損している。50は刃部・基部に丁寧な調整が施され、刃部には抉入加工も施されている。脚部が欠損している。二等辺三角形タイプは38・40・42・43・45～49・51～53である。38は凹基状を呈し、刃部と基部に調整が行われ、刃部に鋸歯状を呈する。40は凹基状を呈し、基部に調整が施されている。42は凹基状を呈し、基部と



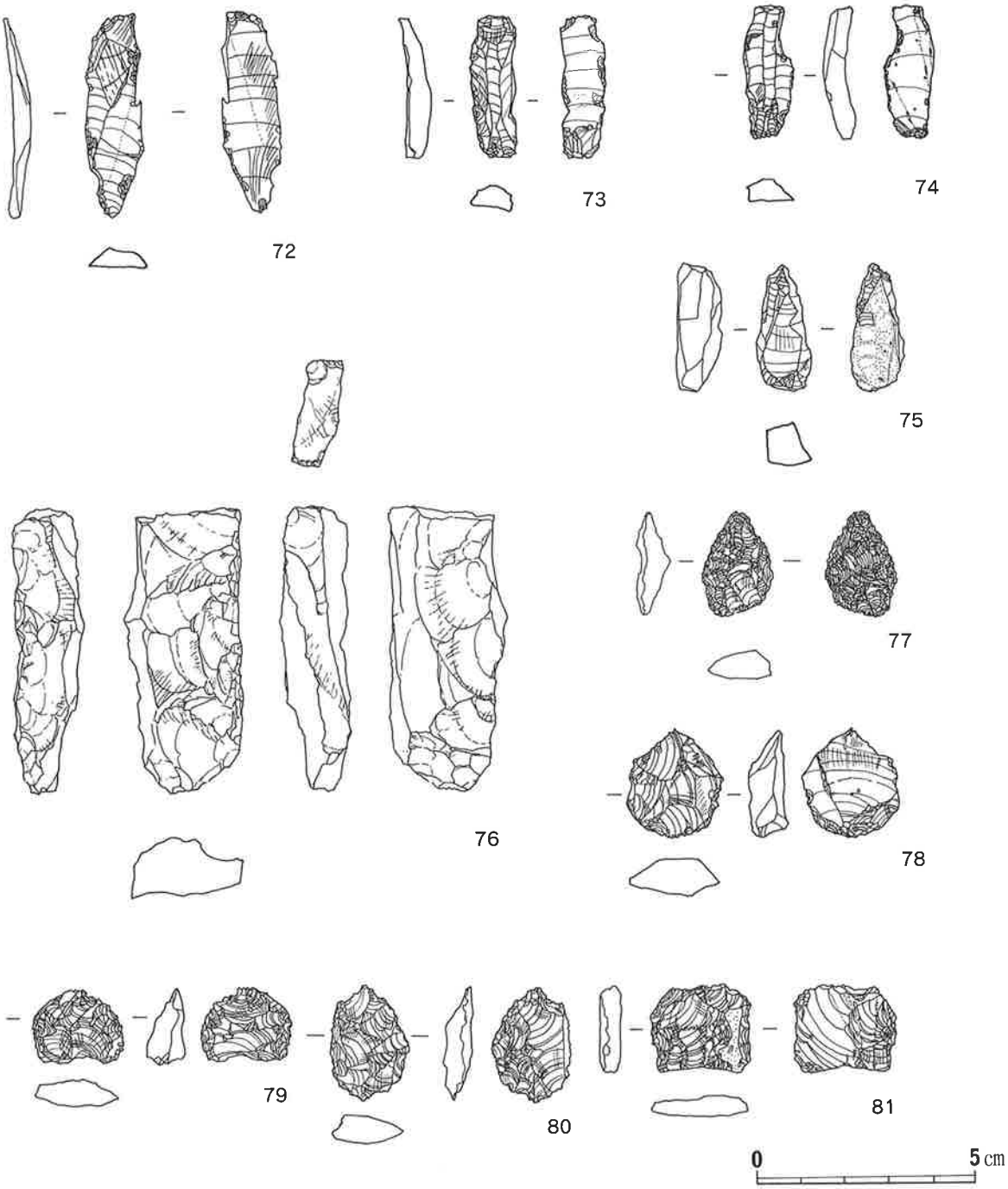
第34図　出土遺物④（2/3）



第35図　出土遺物⑤（2/3）



第36図　出土遺物⑥（2/3）



第37図　出土遺物⑦（2/3）

刃部に調整が施され、細かな鋸歯状を呈する。刃部には抉入加工が施されている。43は凹基状を呈し、刃部と基部に調整が施され、細かな鋸歯状を呈している。45は凹基状を呈し、刃部・基部には調整が施されている。46は凹基状を呈し、基部に調整が施されている。刃部は欠損している。47は凹基状で、刃部に調整が施され鋸歯状を呈している。先端部と一方の脚部が欠損している。48は凹基状を呈し、基部に調整が施されているが、先端部は作り出されていない。一方の脚部を欠損している。49は刃部と基部に調整が行われ、刃部には使用痕も見られる。凹基状を呈し、脚部は短い。一方の脚部を欠損している。51は凹基状を呈する。基部と刃部に調整が施され、鋸歯状を呈する。先端部と一方の刃部から脚部にかけて欠損している。52は基部と刃部に調整が施され、刃部はやや鋸歯状を呈している。未製品とも思われる。53は刃部に調整が行われている。基部から脚部にかけて欠損している。54・55は分類できなかったものである。54は基部から脚部にかけて欠損しており、55は先端部から基部・脚部にかけて欠損している。35はＢ13区Ⅲ層、36はＢ14区Ⅰ層、37・53はＢ14区Ⅲ層、38・40・42はＡ３区Ⅵ層、39はＢ12区Ⅲ層、41・44・47はＡ１区Ⅲ層、43はＢ10区Ⅳ層、45・50・55は表採、46はＡ３区Ⅳ層、48・51はＡ２区Ⅲ層、49はＢ14区Ｓ29、52はＢ14区Ⅳ層出土である。

56・57・60～63は石鋸である。56は大型の石鏃形で凹基状を呈し、基部・刃部には緻密な調整が施されている。刃部には抉入加工が施され、鋸歯状を呈する。57は刃部に調整が施されており、鋸歯状を呈する。基部・脚部は欠損している。60は凹基状を呈し、基部・刃部に調整が施されている。61は基部に調整が施されおり、使用痕が見られる。凹基状の基部で、ホームベース型を呈している。62は凹基状を呈し、基部と刃部に調整が施されているが粗雑である。脚部が欠損している。63は基部・刃部に調整が施されており、浅い凹基状を呈する。刃部は鋸歯状加工が施されている。先端部は尖らせず、方形に近い形状となっている。使用痕も認められる。56はＢ12区Ⅲ層、57はＡ１区Ⅲ層、60はＢ14区、61はＡ２区Ⅲ層、62はＡ４区Ⅴ層、63はＡ３区Ⅳ層出土である。

58・59は石鋸である。石鋸は鋸歯状の細かい刃部をもつ、半月形もしくは櫛形の小型の打製石器である。58は歯先の抉り込みが深い鋸歯状を呈し、入念に抉入加工が施されている。形態は台形となっている。Ｂ12区第７号貯蔵穴から出土している。59は緻密な調整が施され、刃部は細かな鋸歯状を呈している。形態は角張った方形となっている。

64～67は石錐である。石材はすべて黒曜石である。64・65は錐部が短く、つまみの周囲に剥離加工を施している。66・67は細身の長い棒状で、剥片の一端に錐部を作り出したものである。64・65はＢ14区Ⅲ層、66はＡ１区Ⅰ層、67はＡ２区Ⅲ層出土である。

68～71はつまみ形石器である。つまみ形石器は剥片鏃の製作過程で産出し、抉入加工を入念に施したものである。つまみ形石器はその形態から、抉入部より上部が縦長のもの、抉入部より上部が横長のものに分類した。68・71は抉入部より上部が縦長のものである。71には使用痕がみられる。69・70は抉入部より上部が横長のものである。70は一部に自然面を残している。68はＡ３区Ⅳ層、71はＡ３区Ⅲ層出土である。

72～74・76は彫器である。72～74は黒曜石製で、縦長剥片を使用し、彫刻刀面が作り出されて

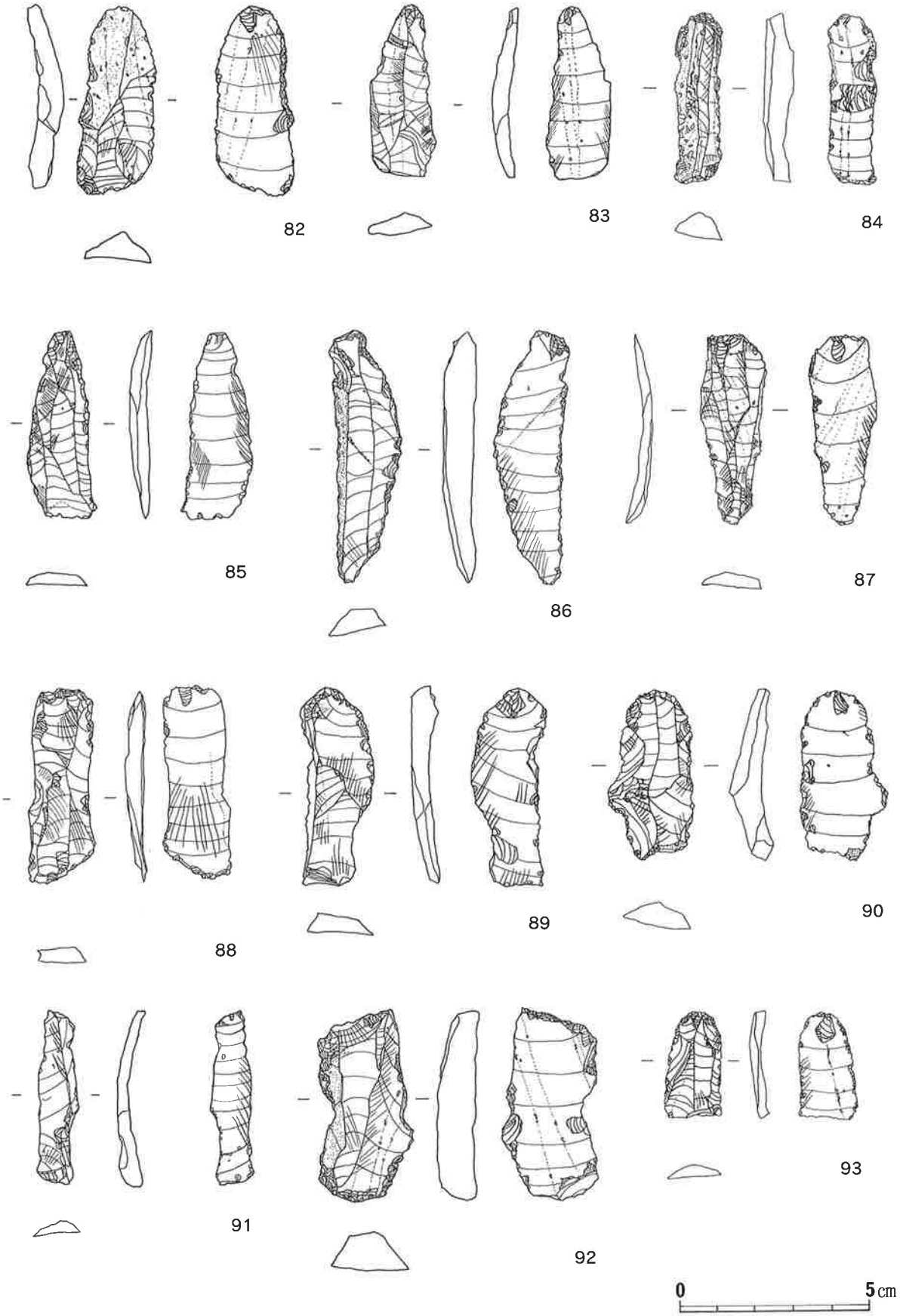
いる。76は玄武岩製である。正面に二次加工を施し、左側縁にも背面側からのブランティング状の二次加工を施して全体を整形した後、彫刻刀面を作り出している。打面部にはわずかな調整加工が認められる。72はＢ13区Ｓ388、73はＢ９・10区出土である。74・76は表採である。

75は楔形石器である。潰れ面をもち、リングが密になっている。裏面には自然面が残っており、尖鋭さはあまりない。Ａ４区Ⅴ層出土である。

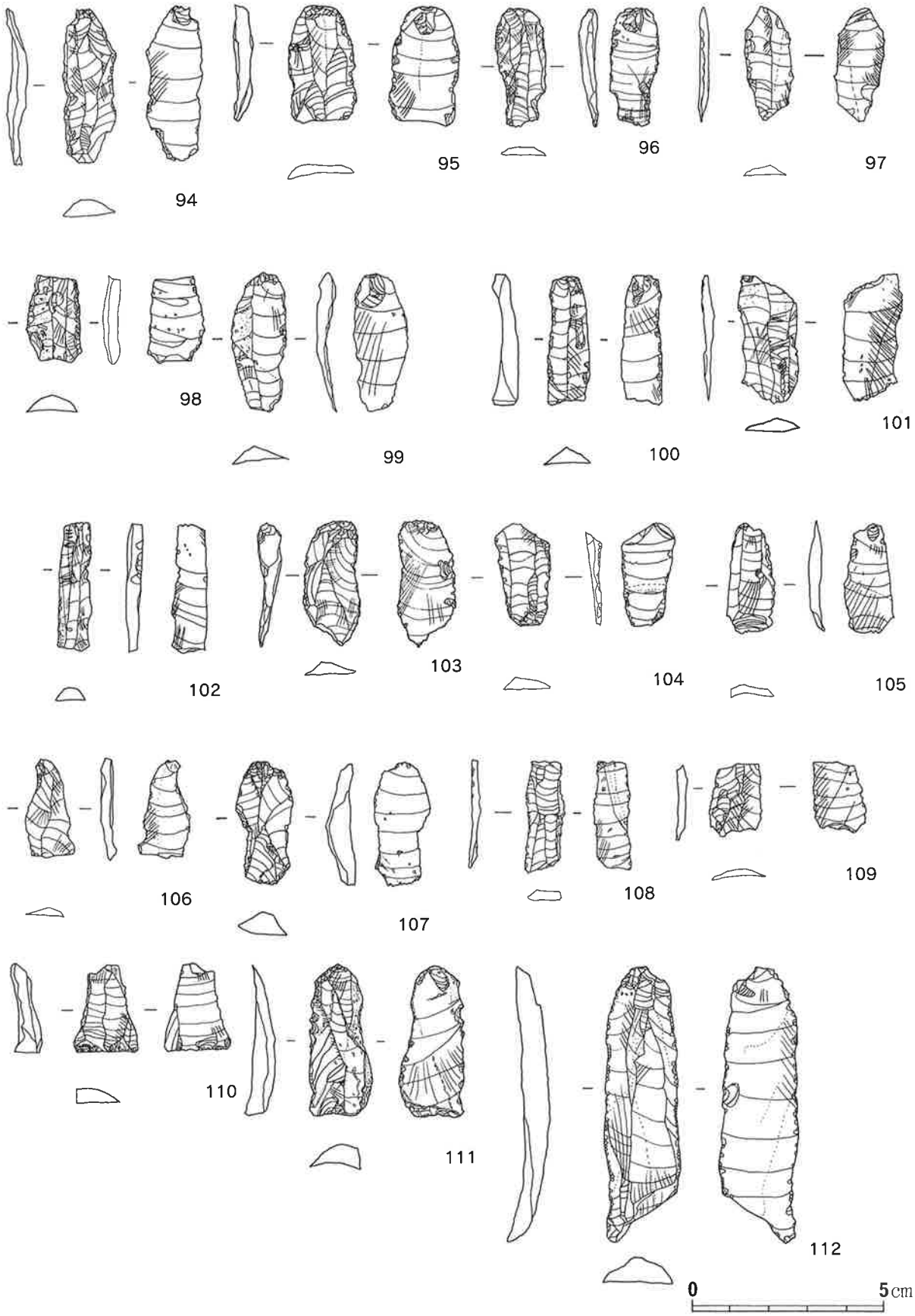
77～80はラウンドスクレイパーである。77・78はＢ13区Ⅲ層、79はＡ３区Ⅴ層、80はＢ９区Ⅵ層出土である。

81はサイドブレイドで、器形は方形である。鋸歯状の刃部を持ち、使用痕がある。平坦剥離調整は粗雑に行われており、一部に自然面が残っている。Ｂ12区Ⅰ層出土である。

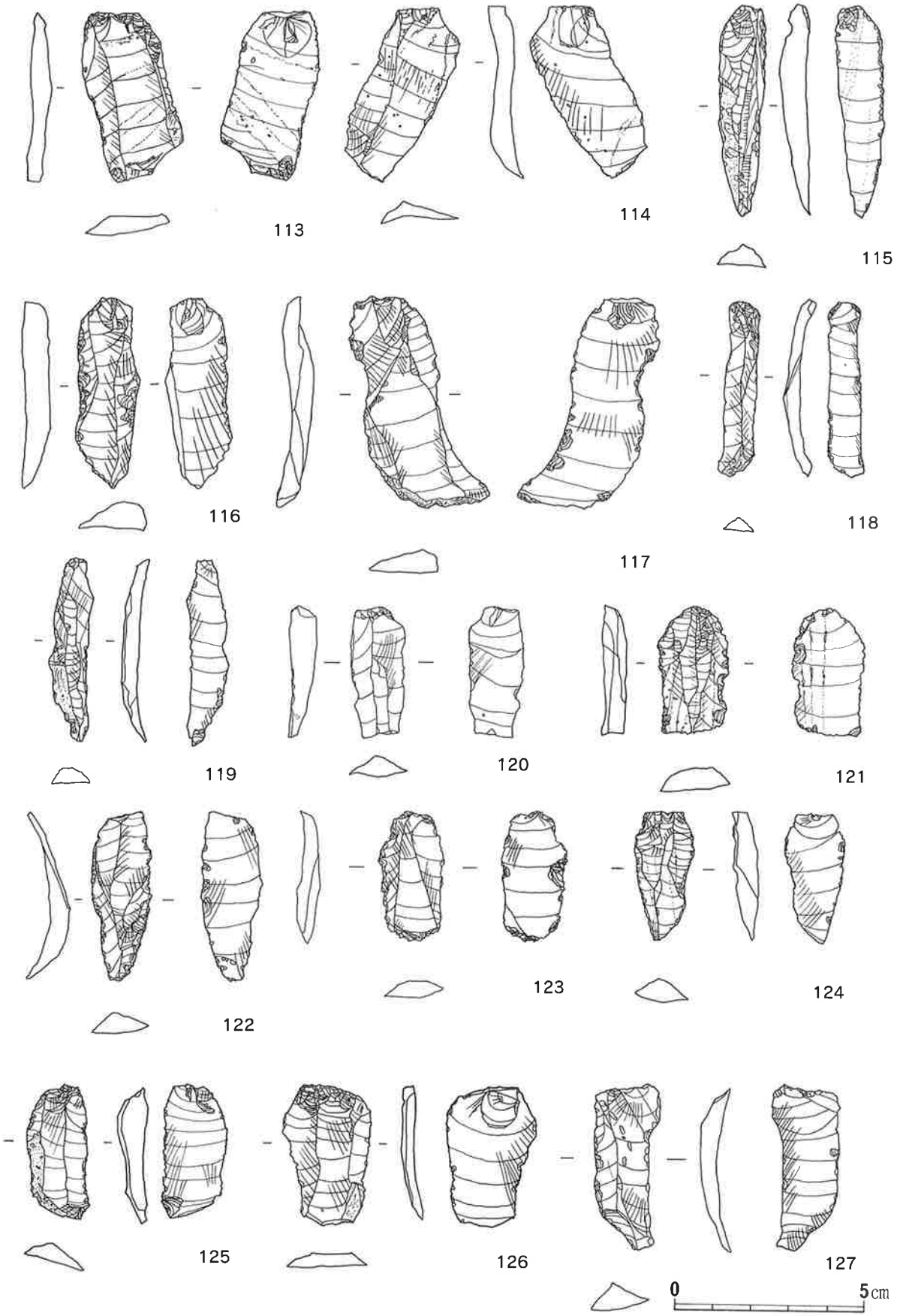
82～157は縦長剥片である。形態については、上下両方向から剥離を行っている鈴桶技法のもの82～111、上から下へと同じ方向から剥離を行っているもの112～157に分類した。すべて良質の黒曜石が素材として用いられている。鈴桶型のものは二つに区分した。82～92は最大長４cm以上のもので、形もよく整っている。側縁部には使用痕あるいは加工痕と見られる剥離面を有する。86・87は先端部が尖るものである。それ以外は直線的である。82・84・86・92は一部に自然面が残っている。93～111は最大長が４ｃｍ未満の小形のものである。側縁部には使用痕あるいは加工痕が見られる。先端部が尖るものは94・96・97・99・101・103である。そのほかは直線的である。98・99・111は一部に自然面が残っている。同じ方向から剥離を行っているもので、先端部が尖るものは112・114・115・116・119・122・124・127・129・131・141・142・144・151・152・154・155である。それ以外は直線的である。一部に自然面が残っているものは115・119・125・132・133・137・143・156である。82はＡ１区Ⅳ層、83はＢ14区Ｓ143、84はＢ11区Ⅲ層、85・89はＡ４区Ⅵ層、86はＡ３区Ⅳ層出土である。87はＢ10区Ⅴ層、88はＢ14区Ｓ149、90はＢ12区Ⅴ層、91はＢ12・13区間のベルトから出土している。92・98はＢ14区Ⅱ層、93はＢ９区Ⅱ層、94はＢ10区Ⅲ層、95はＢ13区Ⅴ層、96はＢ14区Ｓ21、97はＢ12区Ⅲ層、99はＢ11区第３号貯蔵穴出土である。100はＢ14区Ⅰ層、101はＡ１・Ｂ１区間のベルトから出土している。102はＢ13区Ｓ244、103はＢ13区Ｓ110、104はＢ９・Ｂ10区間ベルト、105はＢ14区Ｓ208、106はＢ13区Ｓ329、107はＢ13区Ｓ25、108はＢ13区Ｓ357、109はＢ13区Ｓ236、110はＢ14区Ｓ97の出土である。112はＢ９・Ｂ10区間ベルトのⅢ層から出土している。114はＢ12区Ⅲ層、115はＢ11区第３号貯蔵穴、116はＢ14区Ⅳ層、117・118・151は表採、119はＢ14区第17号貯蔵穴、121はＢ13・14区間ベルトのⅦ層、122・137はＡ１・２区間ベルト出土である。123はＢ10区Ⅴ層、124・144はＡ４区Ⅵ層、125・141はＡ２区Ⅲ層、126はＡ３区Ⅲ層、127・129・142はＡ４区Ⅲ層、128はＡ１区Ⅲ層、130はＢ13区Ｓ197、131はＡ３区Ⅴ層、132・140はＢ10区Ⅱ層、133はＢ13区Ｓ14、134はＢ10区Ⅰ層、135はＢ13区Ｓ238、136はＡ４区Ⅱ層、138はＢ10・11区間ベルトⅤ層、139はＡ４区Ⅴ層、143はＢ13区Ｓ363、145はＢ12・13区間ベルトからの出土である。146・147はＢ13区Ⅲ層、148はＢ９・10区間ベルト、149はＡ２区Ⅳ層、152はＢ11区Ⅲ層、



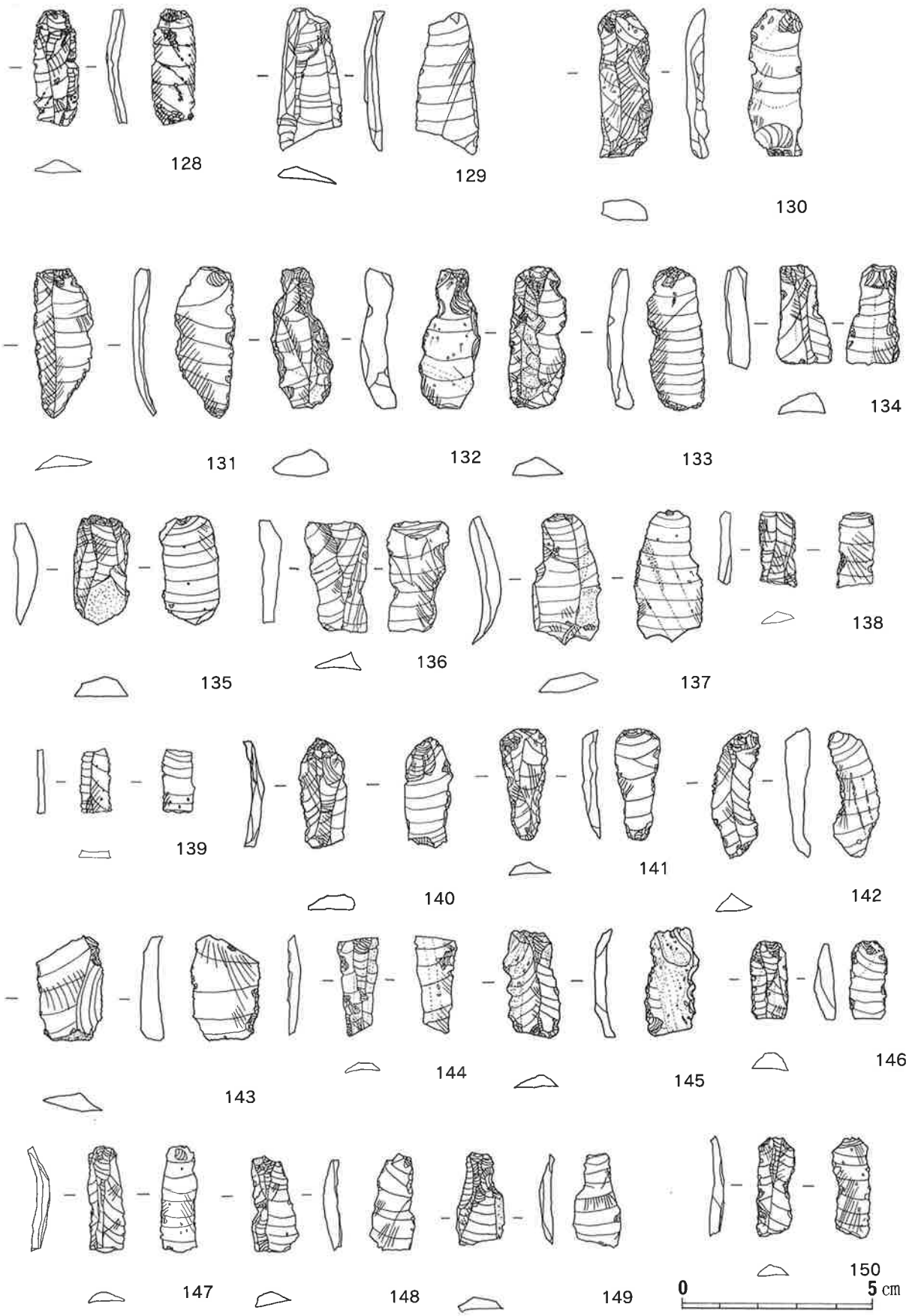
第38図　出土遺物⑧（2/3）



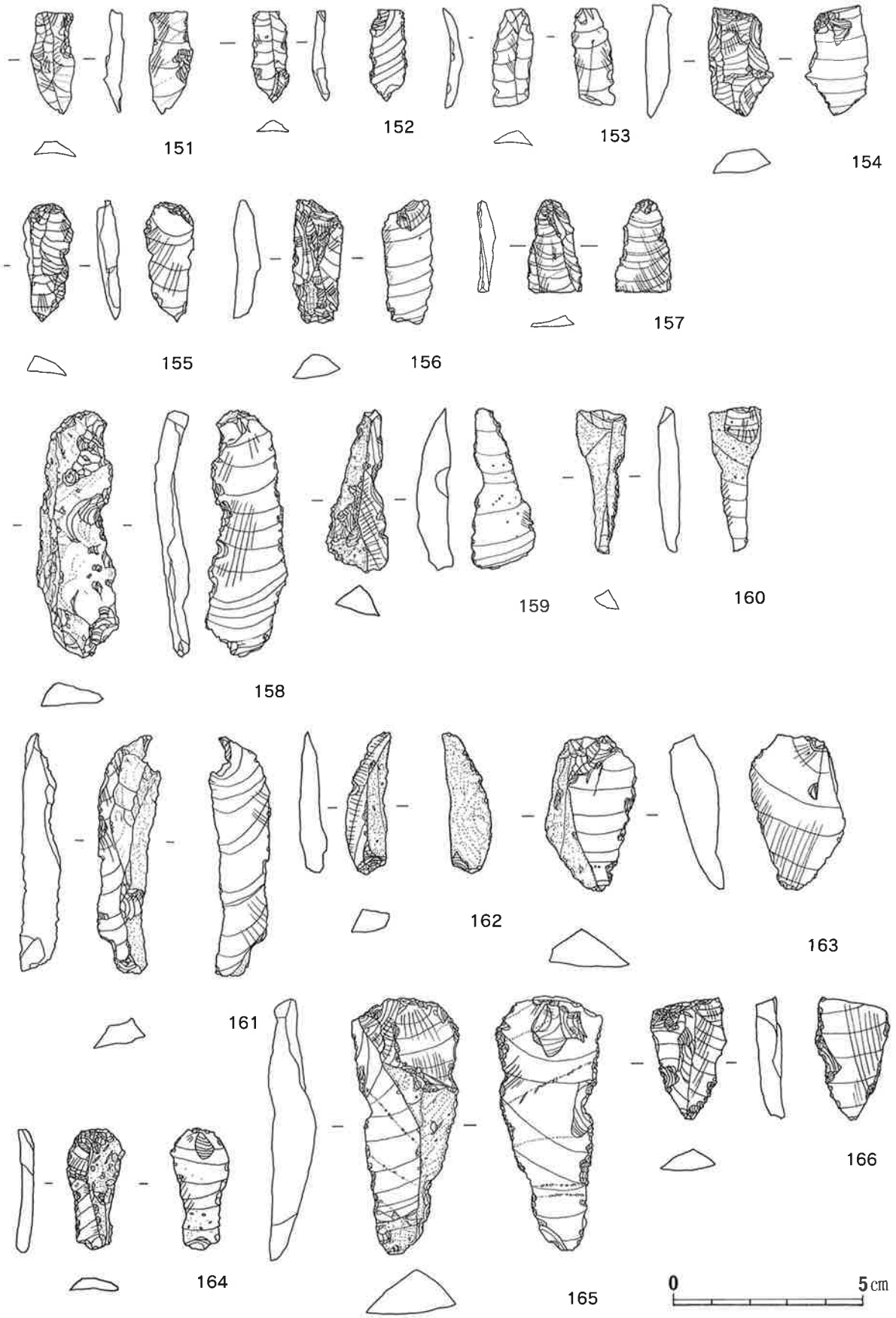
第39図　出土遺物⑨（2/3）



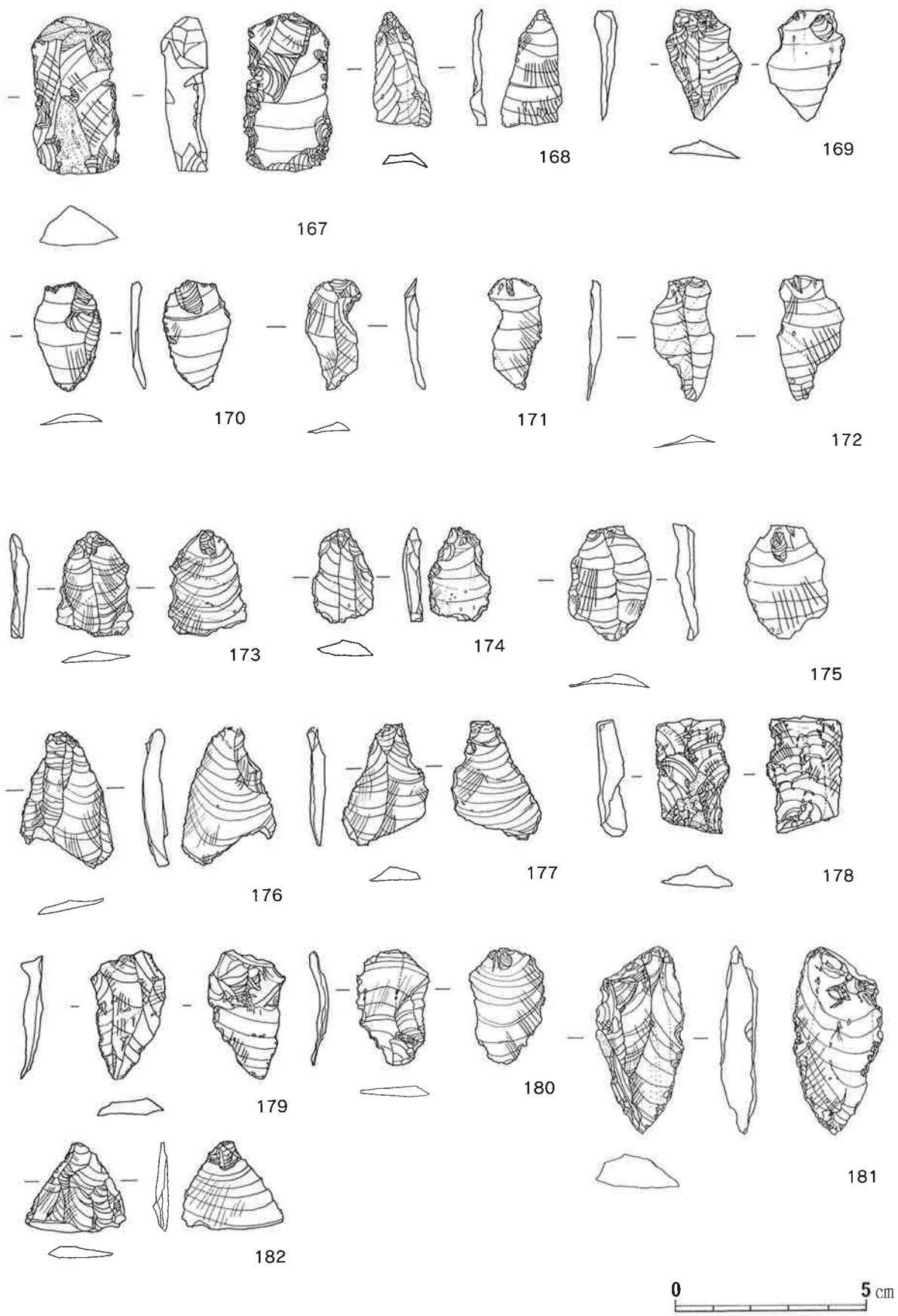
第40図　出土遺物⑩（2/3）



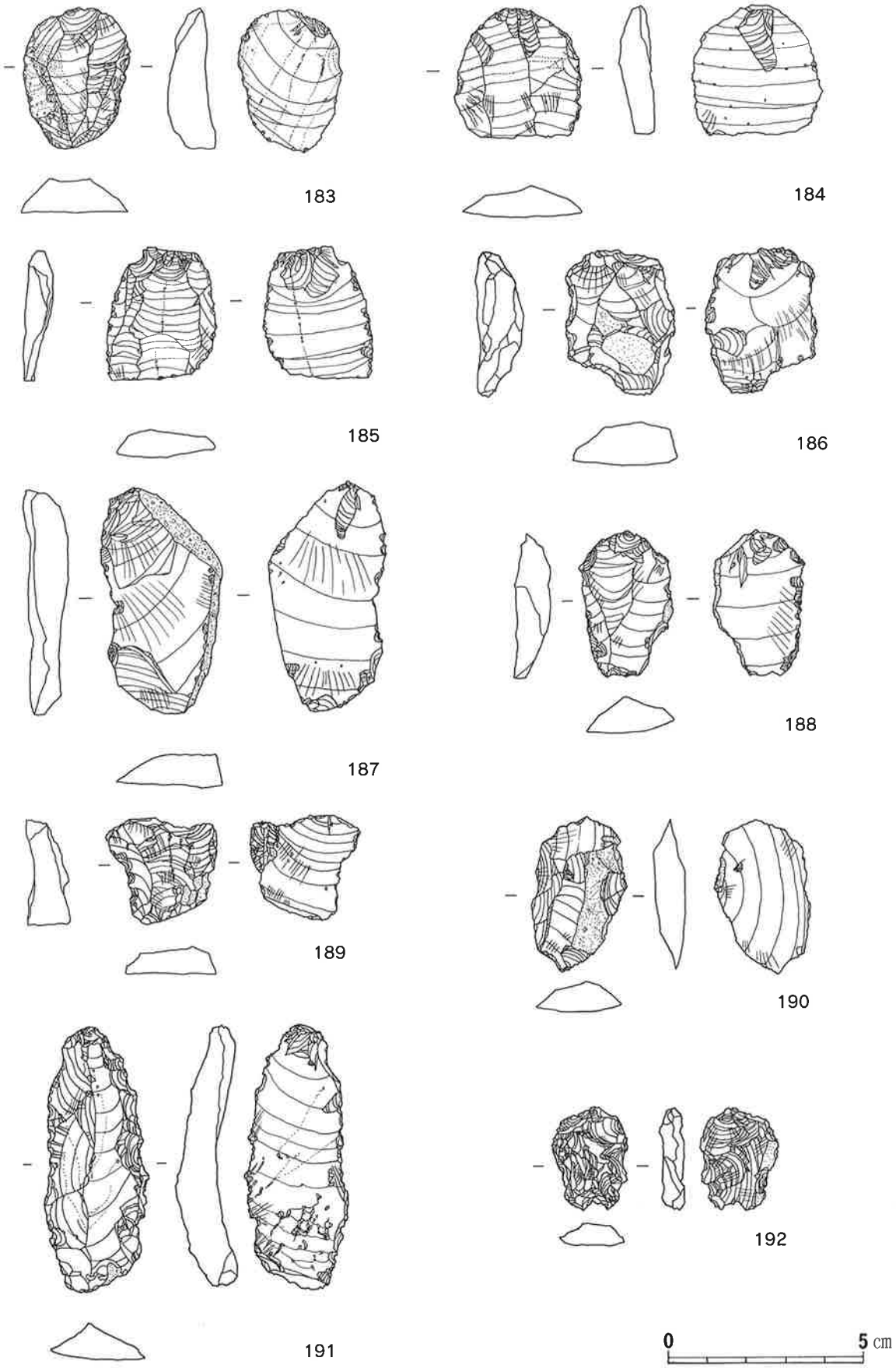
第41図　出土遺物⑪（2/3）



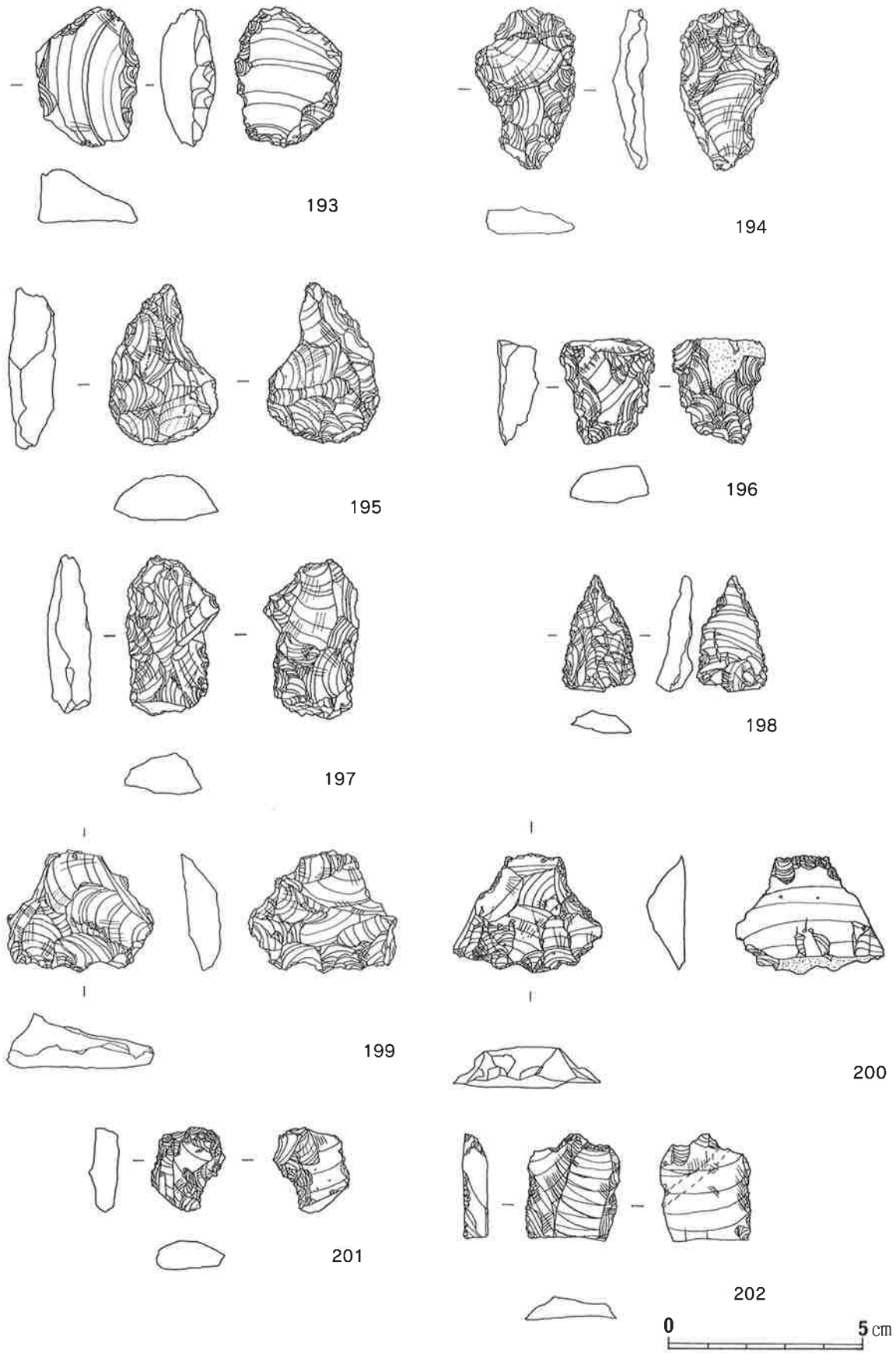
第42図　出土遺物⑫（2/3）



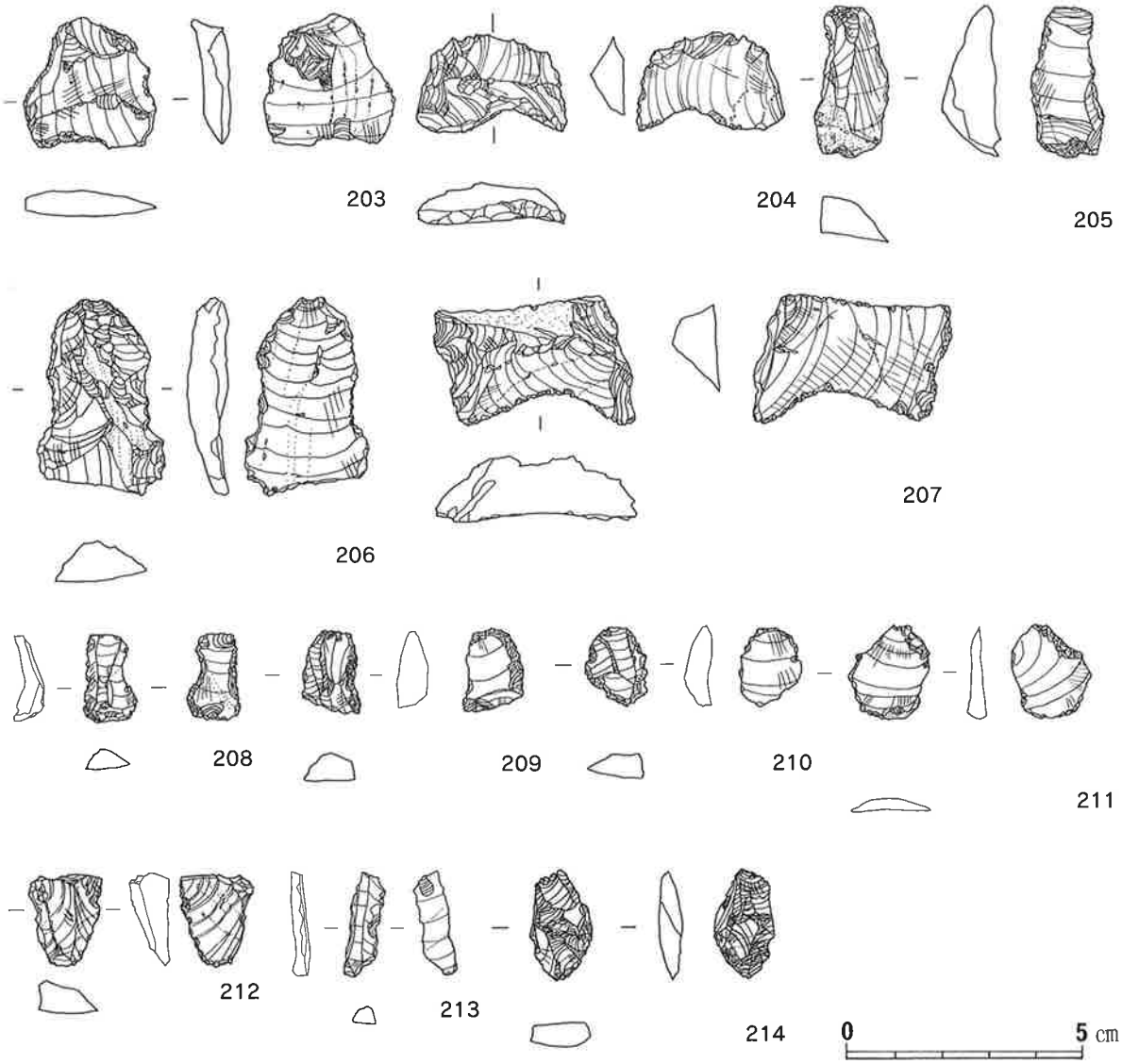
第43図　出土遺物⑬（2/3）



第44図　出土遺物⑭（2/3）



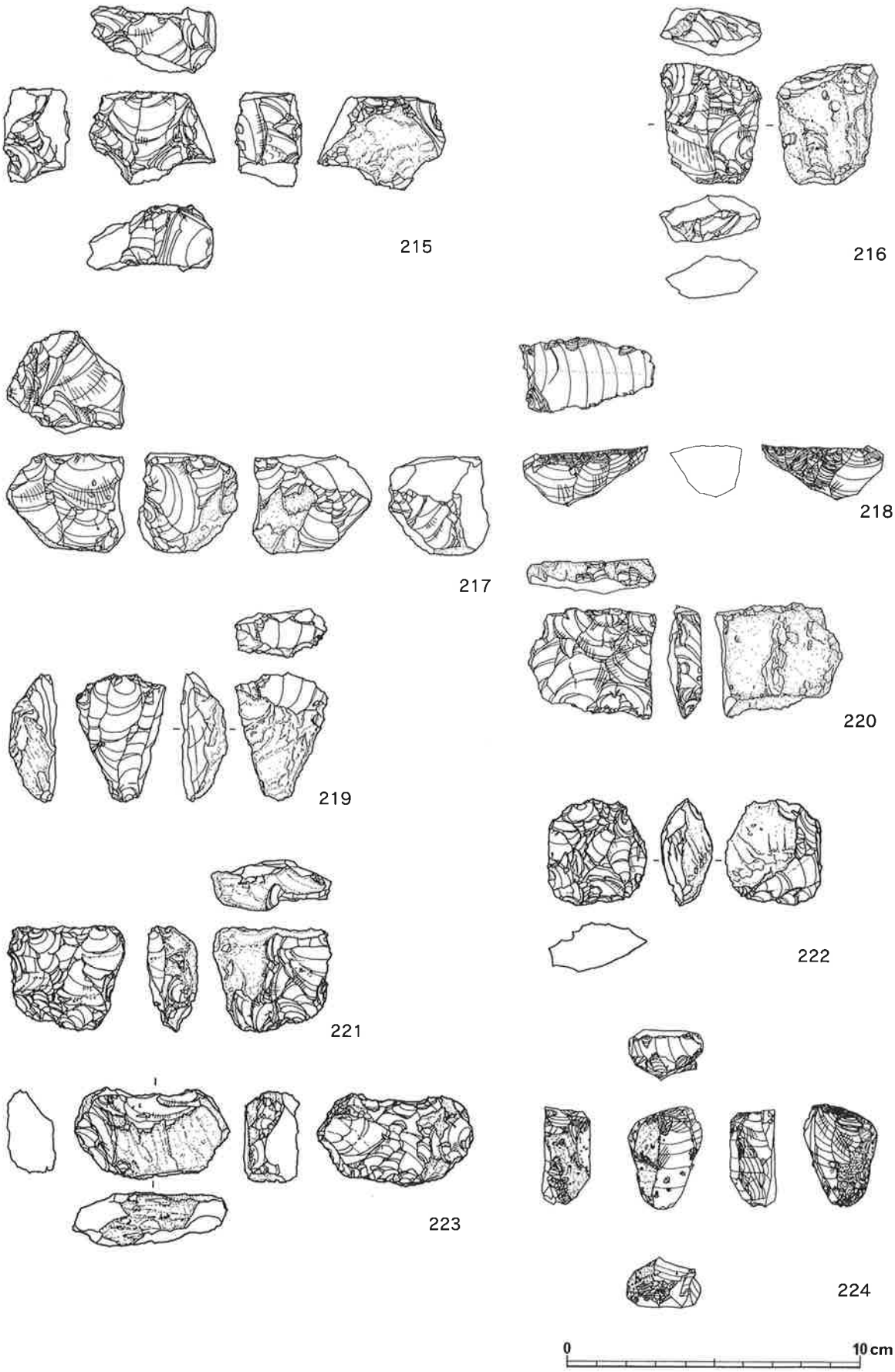
第45図　出土遺物⑮（2/3）



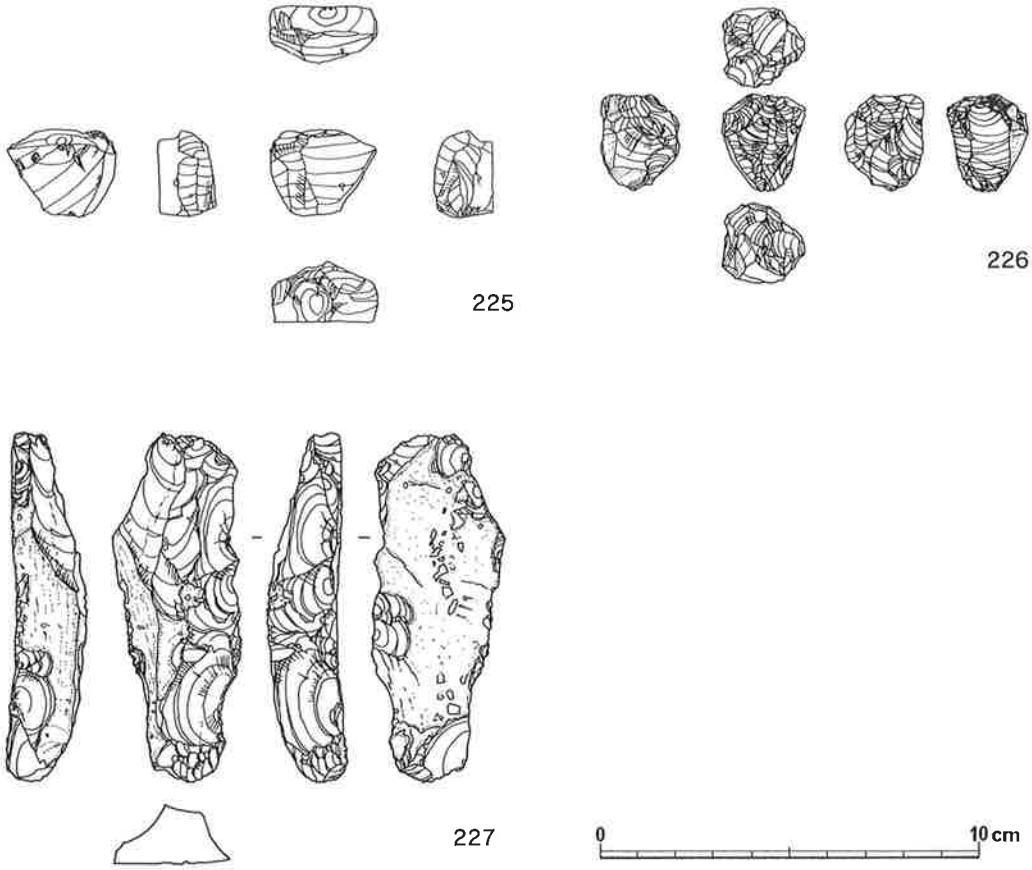
第46図　出土遺物⑯（2/3）

153はＢ13区Ｓ４、154はＢ14区Ｓ17、155はＢ12・13区間ベルト、156はＢ９・10区間ベルト、157はＢ13区Ｓ337の出土である。

158～190は不定形剥片である。縦長剥片に必ずしも該当しない不定形なものをあげている。158・161はＢ11区Ⅲ層、159・160は表採、162はＢ13区Ｓ416、163はＢ13区Ｓ130、164はＢ13区Ｓ112、165はＡ３区Ⅳ層、166はＢ13・14区間ベルトⅦ層、167はＢ14区Ⅳ層、168はＡ４区Ⅵ層、169はＢ13区Ｓ270、170はＡ２区Ⅶ層、171はＢ13区Ｓ377、172はＢ13区Ｓ343、173はＢ14区Ｓ119、174はＢ14区Ｓ10、175はＢ９・10区間ベルト、176はＢ14区Ｓ234、177はＢ13区Ｓ199、178はＡ１区Ⅲ層、179はＢ14区Ｓ203、180はＢ13区Ｓ62出土である。181はＢ14区Ｓ27、182はＢ13区Ｓ150、183はＢ10区Ｖ層、184はＢ14区Ｓ115、185はＡ３区Ⅲ層、186はＢ13区Ｓ233、187はＢ14区Ｓ78、188はＢ12区第５号貯蔵穴、189はＢ13区Ｓ73、190はＢ13区Ｓ334出土である。



第47図　出土遺物⑰（1/2）



第48図　出土遺物⑱（1/2）

191～207は加工痕のある石器である。191は縦長剥片を用いており、使用痕も見られる。199・200は粗雑だが、鋸歯状の刃部加工が施されている。191はＡ１区Ⅱ層、192はＢ１４区Ⅲ層、193・201はＢ１３区Ⅳ層、194はＢ13・14区間ベルトⅡ層、195・199・202はＢ13区Ⅲ層、196・200はＡ３区Ⅲ層、197はＢ14区Ⅶ層、198は表採、203はＡ２区Ⅱ層、204はＢ11区Ⅰ層、205はＢ11区第３号貯蔵穴、206はＢ13区Ｓ247、207はＡ４区Ⅵ層出土である。

208～214は剥片である。いずれにも使用痕のような小さな剥離面が見られる。208・210・213は表採、209はＢ13区Ⅱ層、211はＢ14区Ⅱ層、212はＢ13区Ｓ77、214はＡ３区Ⅰ層出土である。

215～227は石核である。215・216は様々な方向から剥離されている。裏面には自然面が残っている。217は同一方向から剥離されている。裏面には自然面が残っている。218は様々な方向から剥離されており、側縁には使用痕が見られる。剥片摂取後にスクレイパーとして使用されたと思われる。219は上下からの同時剥離が行われ、縦長剥片を生産する鈴桶技法が用いられている。裏面には自然面が残る。220は角礫で、これも縦長剥片を生産する鈴桶技法が用いられている。裏面には自然面が残る。221・222・223は角礫で、様々な方向から剥離されている。いずれも自然面が残っている。224は同一方向から剥離されている。自然面が残っている。225は平坦面と主要剥離面は同一方向から剥離されている。226は上下からの同時剥離が行われ、縦長剥片を生産する鈴桶技法が用いられている。剥離面は小さく、側縁には自然面が残っている。227は様々な方向から剥離されており、左側

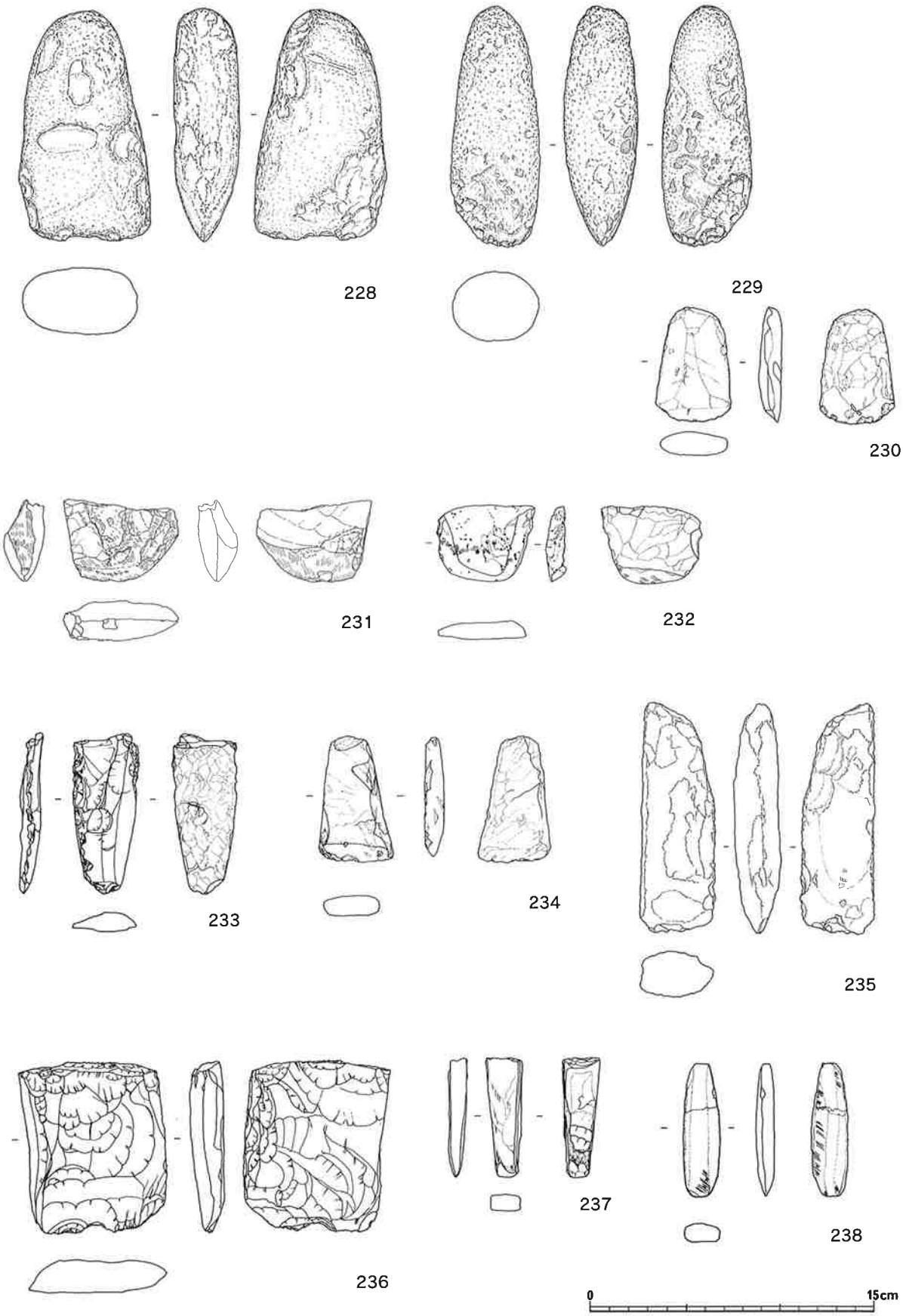
縁と裏面に自然面が残っている。側縁に使用痕がみられ、剥片摂取後にスクレイパーとして使用したと思われる。215はＢ13区Ｓ365、216はＢ14区Ｓ176、217はＢ14区Ｓ277、218はＢ11区Ｖ層、219はＢ14区Ｓ79、220はＢ14区Ｓ268、221はＢ14区Ｓ184、222はＢ13区Ｓ243、223はＢ13区Ｓ381、224はＢ12区Ⅲ層、225はＡ１区Ⅲ層、226はＢ11区Ⅵ層、227はＡ４区Ⅱ層出土である。

228～236は石斧である。228～234は磨製石斧である。228は蛇紋岩製の磨製石斧で、風化・剥落が著しい。灰白色を呈する。229は蛇紋岩製の乳棒状石斧である。乳棒状石斧は棒状で断面が円形に近い形態の石斧である。全体に敲打整形を施しているように見えるが、風化が進んでいるため判然としない。研磨痕は部分的にしか残っていない。230は緑泥片岩製で、小型の磨製石斧である。231は砂岩製の磨製石斧の刃部破片である。左側面はゆるやかな曲線で、擦過痕が見られる。正面左側の剥離はこの面を打面としており、再加工されている可能性がある。232は磨製石斧の刃部破片である。両側面に擦過痕が見られる。233は玄武岩製の磨製石斧である。左側縁に敲打痕が見られる。裏面は大きく欠失している。234は蛇紋岩製で、小型の磨製石斧である。白灰色を呈する。235は磨製石斧の未製品と思われる。玄武岩製で磨耗が著しく、褐鉄鉱のような付着物が見られる。剥離加工はわかりにくいが、裏面の下端部には研磨痕が見られる。236は玄武岩製で、長方形を呈する。228はＡ４区Ⅱ層、229・231はＢ12区Ⅳ層、230はＢ11区Ⅲ層、232はＡ４区Ｖ層、233はＡ４区Ⅵ層、234はＢ13区Ⅲ層、235は表採、236はＢ11区Ⅰ層出土である。

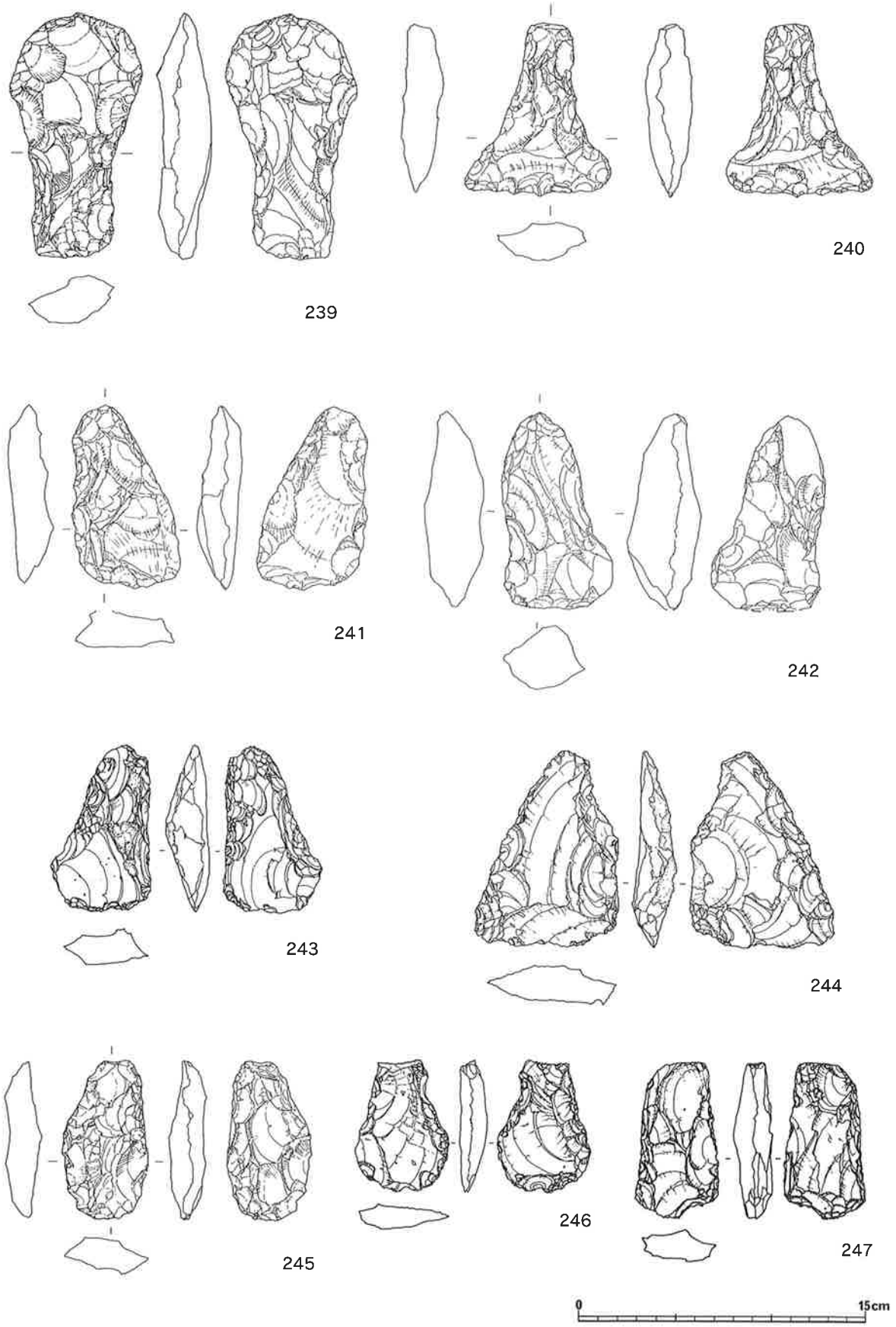
237・238は石ノミで、いずれも小型である。237は砂岩製で、片刃の石ノミである。238は磨製の石ノミで、両刃である。２片に割れていたが接合できた。石質は玄武岩である。237はＡ３区Ⅳ層、238はＢ11区第３号貯蔵穴出土である。

239は石鋸である。玄武岩製の横長剥片を素材としている。俗に「蝮頭状石器」と称されるもので、頭部は丸みを帯びて尖鋭ではない。全体に二次加工を施し、頭部を半円形に整形している。下半部は両側縁が並行するように作り出されている。稜線部に擦痕が残っている。Ａ２区Ⅳ層出土である。

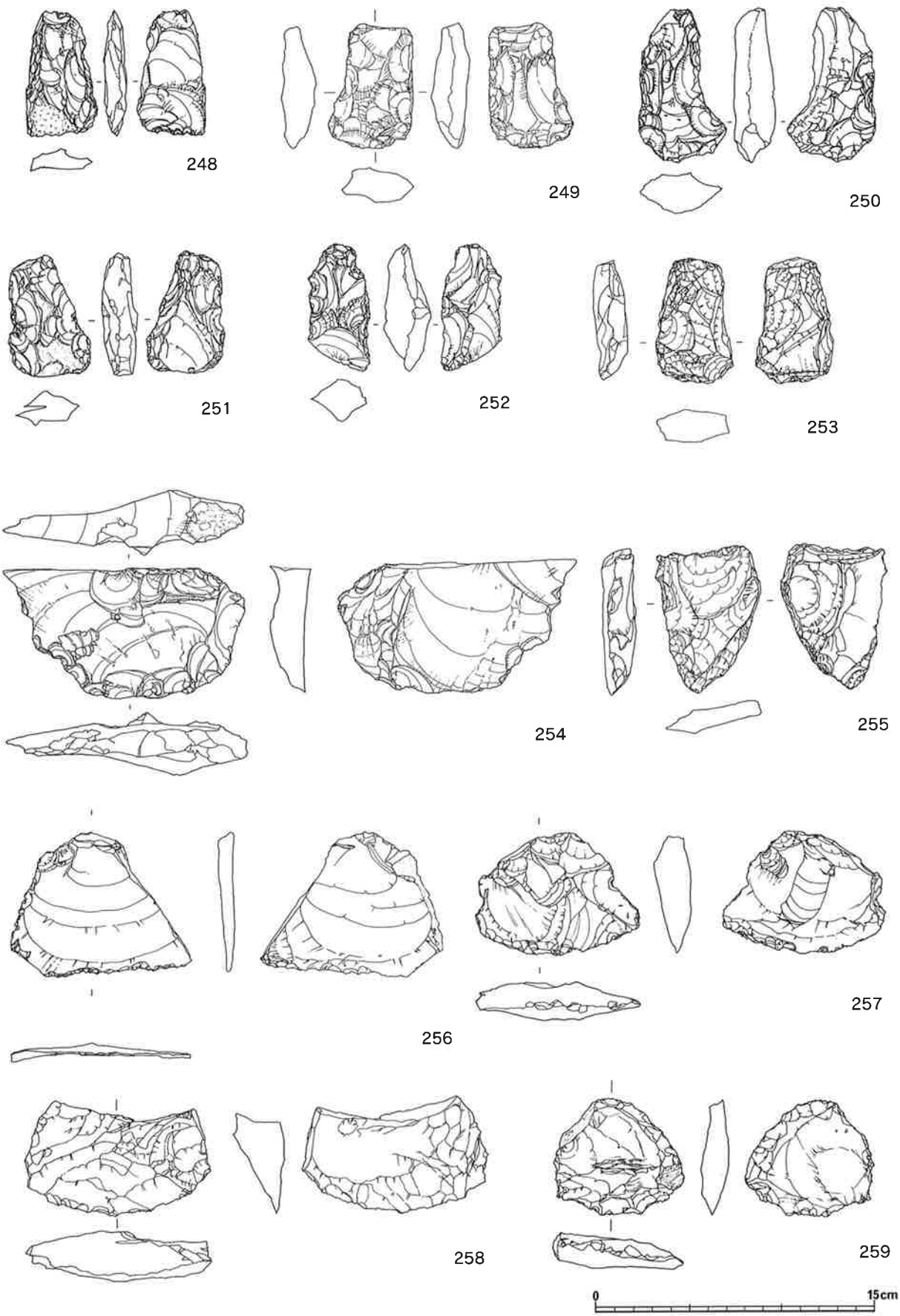
240～291はスクレイパーである。240～253は鎌崎型のスクレイパーである。240は撥形状を呈し、大型厚手の剥片を素材としている。末端に粗雑な鋸歯状の刃部を有する。241・243・244は平面形が二等辺三角形を呈する。242は断面が三角形を呈する。245～253はやや小型の鎌崎型スクレイパーである。254・256～270はエンドスクレイパーである。255・271～291はサイドスクレイパーである。240・266・290はＢ10区Ⅳ層、241・252・254・256・258はＢ９区Ⅱ層、242・250・262はＢ13区Ⅰ層、243はＢ13区Ｓ297、244・263はＡ２区Ⅳ層、245・248・276はＢ12区Ⅲ層、246はＢ13区Ⅲ層、247はＢ11区第３号貯蔵穴、249はＢ13区・Ｂ14区間ベルトⅦ層出土である。251・261・281・282は表採である。253はＢ14区Ｓ94、255はＢ９区・Ｂ10区間ベルトⅢ層、257・272はＡ２区Ⅰ層、259はＡ４区Ⅱ層、260はＡ３区Ⅱ層出土である。264・269はＡⅠ区Ⅲ層、265はＡ４区Ⅵ層、268・275はＡ４区Ⅲ層、270・274はＢ11区Ⅱ層、271はＡ４区Ｖ層、273はＢ14区Ｓ46、277・287はＢ９区Ⅷ層、278はＡ１区Ⅰ層、279はＢ13区Ⅳ層出土である。280はＢ12区第５号貯蔵穴、283はＢ９区Ⅶ層、284・286はＢ14区Ⅲ層、285はＢ12区・



第49図　出土遺物⑲（1/3）



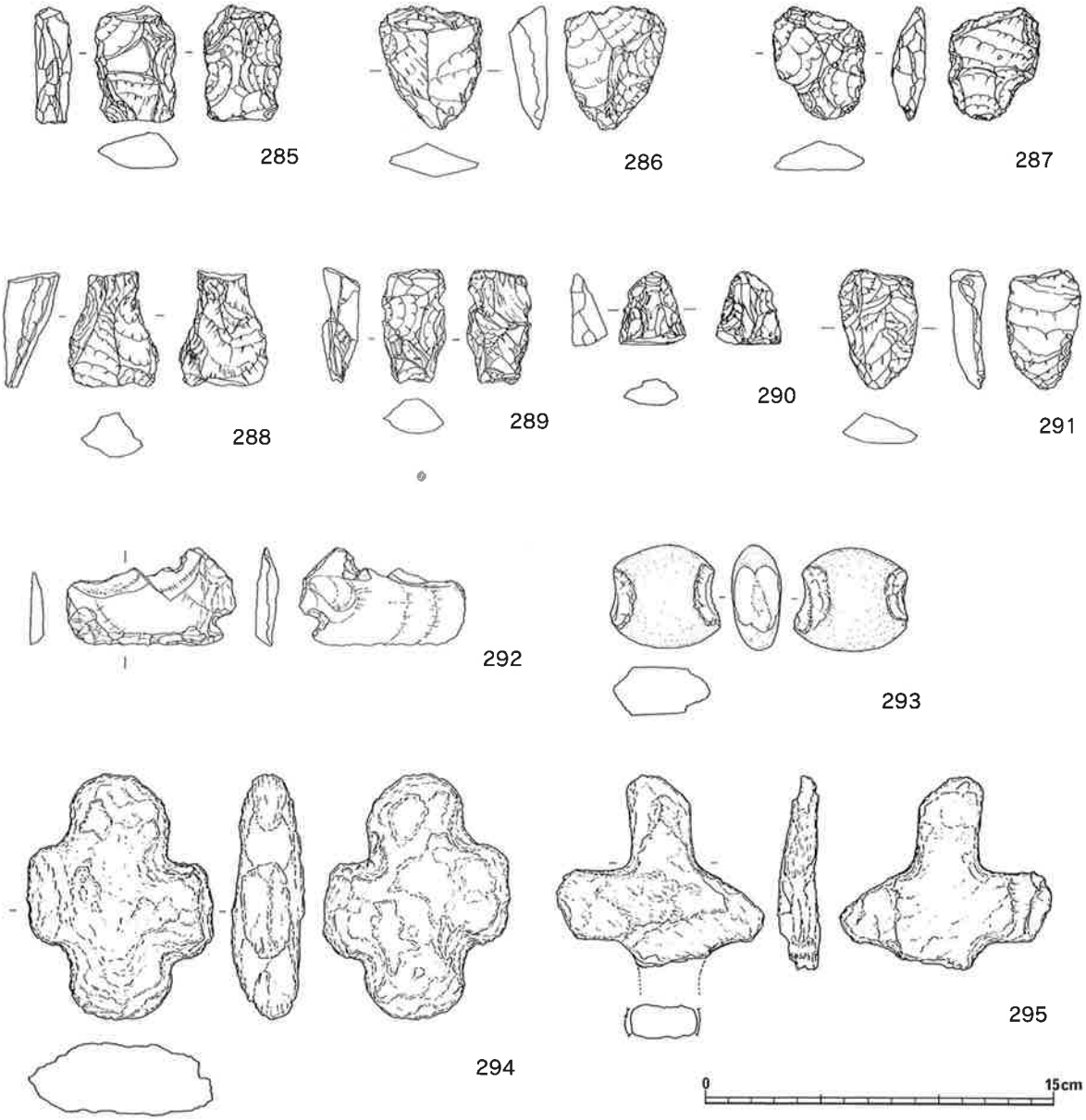
第50図　出土遺物⑳（1/3）



第51図　出土遺物㉑（1/3）

第52図　出土遺物㉒（1/3）

第53図　出土遺物㉓（1/3）



第54図　出土遺物㉔（1/3）

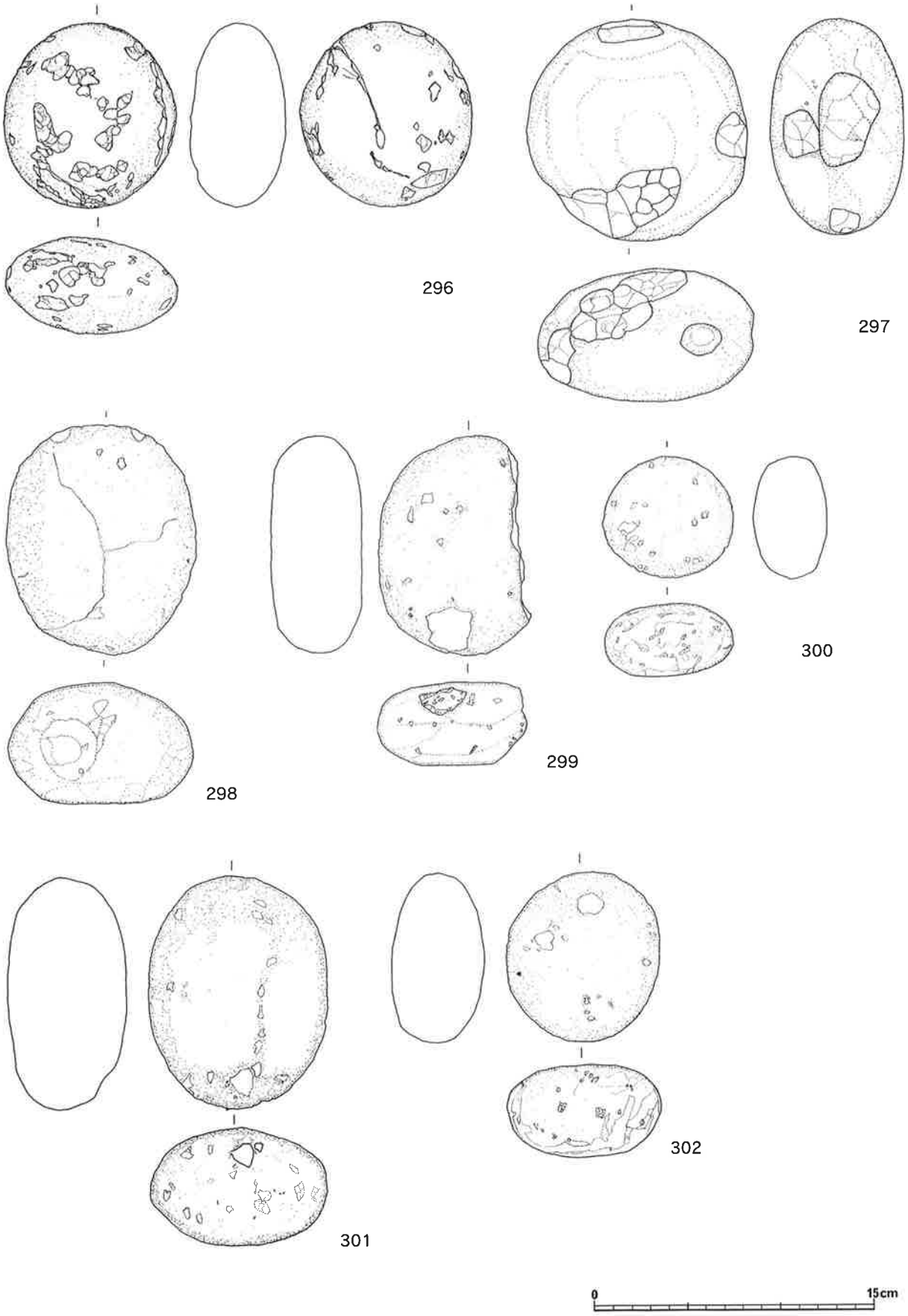
Ｂ13区間ベルトⅢ層、288・289はＢ12区Ⅴ層、291はＡ３区Ⅶ層出土である。

292は石匙である。調整打面から剥出された玄武岩剥片を素材としている。抉入加工を施してつまみ部を作り出している。刃部は主要剥離面側からの丁寧な二次加工で直線的に形成され、刃部角は急斜である。Ｂ14区Ⅰ層出土である。

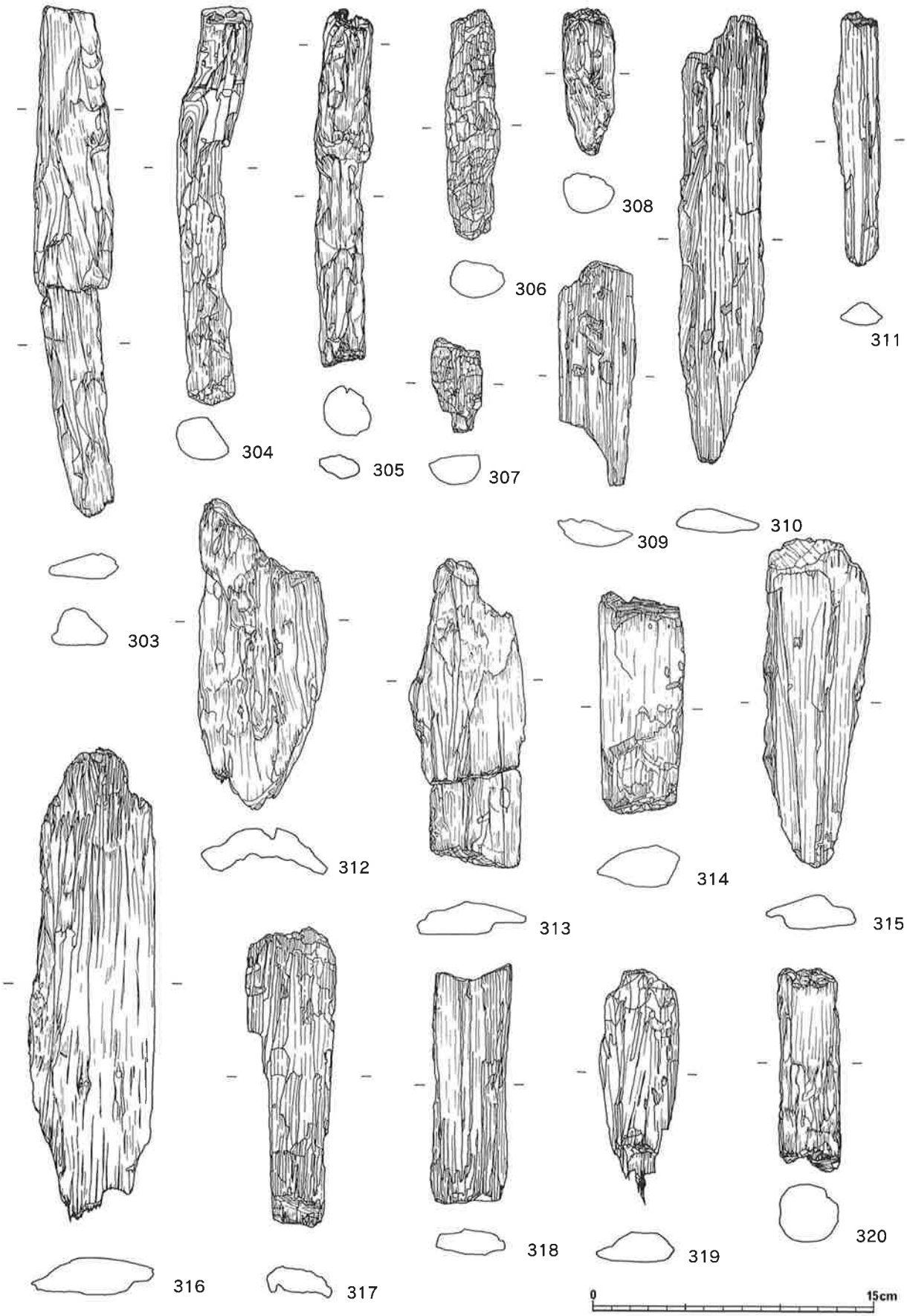
293は石錘である。石質は硬質砂岩で、両縁中央に抉りを入れている。最大長4.4cm、最大幅4.75cm、重量59ｇのヨコ型である。Ｂ14区Ⅳ層出土である。

294・295は十字形石器である。いずれも結晶片岩製である。295は下部が欠損している。294はＡ３区Ⅳ層、295はＡ１区Ⅲ層出土である。

296～302は敲石・磨石である。296は花崗岩製の磨石であるが、敲打面も見られる。297・



第55図　出土遺物㉕（1/3）



第56図　出土遺物㉖（1/3）

298・299は玄武岩製の敲石で、敲打面が確認できる。297はＢ13区第14号貯蔵穴から出土している。敲打面と一部に磨面が残っている。ドングリなどの堅果類と一緒に検出されており、タタキ潰すこととスリ潰すことに使用されたことがわかる。298は一部に灰色の焼けたような痕があり、その部分にひびが見られる。そのことから敲石として使用した後、火で焼かれたためにひびが入った可能性がある。300・301・302は玄武岩製の磨石である。298・299・302には褐色の鉄分（褐鉄鉱）が付着している。296はＡ１区Ⅲ層、298はＢ９区Ⅱ層、299はＢ13区Ｓ28、300はＢ12区Ⅰ層、301はＢ14区Ｓ66、302はＢ14区Ｓ141出土である。

木　器　（第56図）

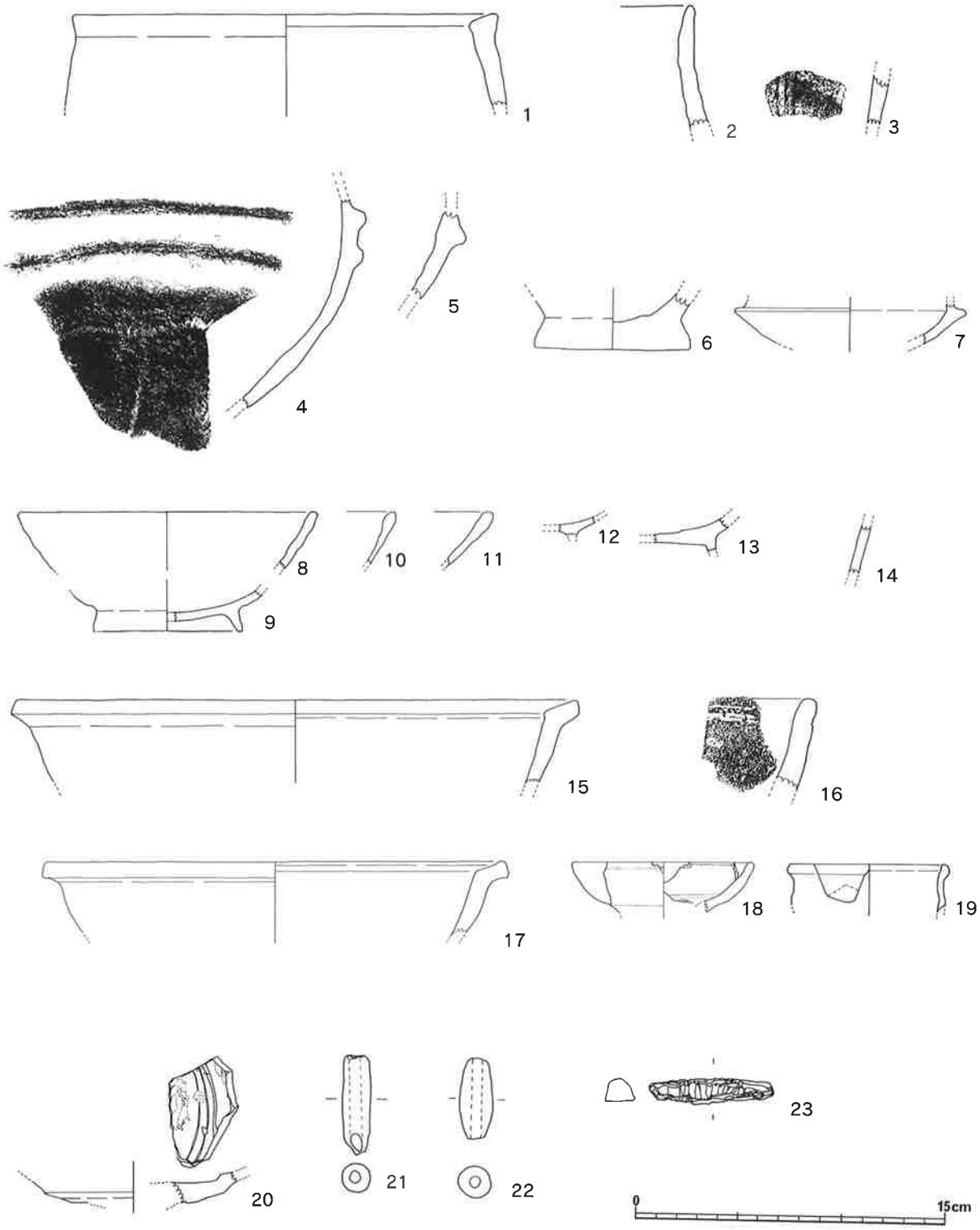
303～320は自然木・木製加工品である。303～308は自然木である。303は上部がやや平坦に加工されており、一部分に削りの方向が確認できる箇所がある。用途は不明である。304は中央部分に斜行した加工痕がみられる。305は中央部分に加工が施されており、削りの方向が確認できる箇所もある。306・307・308はＢ11区からの出土で、いずれも下部を削って鋭利に調整している。309は平坦に加工されており、Ｂ11区第１号貯蔵穴から出土している。310はやや平坦に加工され、下側縁は鋭利に調整されている。312・313は平坦に加工が施され、削りの方向確認できる箇所もある。315・316はやや大きめで、いずれも平坦に加工されている。314・317・318～320はＢ12区第７号貯蔵穴から出土しており、320以外はいずれも平坦に加工が施されており、貯蔵穴の枠として使用されたものである。

弥生時代の土器（第５７図）

弥生土器は６点を図示している。１は甕の口縁部で、内面が淡橙褐色、外面は淡灰褐色を呈する。胎土に石英を多く含む。復元口径は20.8cmである。２は甕の口縁部で、外反している。内面が淡茶褐色、外面は橙褐色を呈する。胎土に石英・雲母を含む。３は内面が淡黄灰色、外面は淡橙白色を呈する。胎土に石英を多く含む。４は甕の胴部で、２条の突帯をもつ。突帯の断面は台形状を呈する。内外面とも淡橙白色を呈し、胎土に石英・長石を多く含む。５は甕の胴部で、突帯をもつ。内外面とも淡橙白色を呈し、胎土に石英・長石を多く含む。４と接合できなかったが、同じ土器の一部と思われる。６は甕の底部で、内面は淡灰褐色、外面は淡赤橙色を呈する。胎土に石英・長石・雲母を多く含む。１はＡ４区Ⅲ層、２はＡ１区Ⅳ・Ⅴ層、３はＢ10区Ⅲ層、４はＡ４区Ⅴ層、５はＡ３区Ⅶ層、６はＢ10区Ⅲ・Ⅳ層出土である。

古墳時代の土器（第57図）

７は須恵器の坏身で、内外面ともに暗灰色を呈する。復元口径は9.6cmである。焼成は良い。



第57図　出土遺物㉗（1/3）

古代・中世の土器・石器（第57図）

８～12・14は黒色土器である。これらの黒色土器は、内面のみ燻したために内面が黒色となったものである。いずれも内面にヘラミガキが施されている。８は復元口径7.2cmである。内面に黒褐色、外面に灰褐色を呈する。14は復元底径7.2cmである。13は瓦器である。15・17は土師質土器である。口縁部が「く」字状に外反しており、端部をつまみあげている鍋である。内面にはハケ目が確認できる。15は復元口径27.6cmで、内面に肌色、外面に淡灰橙色を呈する。胎土に微細な砂粒を含んでいる。17は内面に淡橙色、外面に灰褐色を呈する。復元口径は23.0cmである。18は明染付碗磁器である。胎土は白灰色で、釉は淡灰白色である。復元口径は9.0cmである。19は李朝陶器で、復元口径は7.6cmである。21・22は土錘である。21は細身の紡錘形で、灰黄褐色を呈する。22は中央部がややふくらむ形で、淡橙色を呈する。23は滑石製で、石鍋を再利用したものと思われる。細かい削り痕があり、段を施している。穿孔された痕も残っている。８・９・14はＢ14区Ⅳ層、10はＢ14区Ⅱ層、11は排土、12・17はＢ13区Ⅲ層、13はＢ９区Ⅱ層、15はＢ13区Ⅱ層、16は表採、18はＢ13区Ⅰ層、20はＢ９区Ⅱ層、21はＡ１区Ⅰ層、22は表採、23はＢ13区Ⅰ層出土である。　（明石拡子）

参考・引用文献

中田敦之編　1989　『宮ノ下リ遺跡』　松浦市文化財調査報告書第５集

中田敦之編　1997　『田川遺跡』　松浦市文化財調査報告書第12集

中田敦之編　1998　『松浦・今福遺跡』　松浦市文化財調査報告書第14集

中田敦之編　2000　『小船遺跡』　松浦市文化財調査報告書第15集

川道　寛編　1998　『宮下貝塚』　富江町文化財調査報告書第１集

安楽　勉編　1985　『名切遺跡』　長崎県文化財調査報告書第71集

安楽　勉編　1980　『白浜貝塚』　福江市文化財調査報告書第２集

田島龍太編　1994　『徳蔵谷遺跡（1）』　唐津市文化財調査報告書第57集

田島龍太編　1995　『徳蔵谷遺跡（2）』　唐津市文化財調査報告書第63集

田島龍太編　1996　『徳蔵谷遺跡（3）』　唐津市文化財調査報告書第68集

荒谷義樹編　2000　『午戌遺跡』　伊万里市文化財調査報告書第47集

鈴木道之助　1991　『図録・石器入門事典〈縄文〉』　柏書房

前川威洋　1979　『九州縄文文化の研究』　前川威洋遺稿集刊行会

甲元眞之　2001　「日韓交流関連遺物出土遺跡地名表」　『シンポジウム海峡を越えて』　原の辻以前の先史時代の人と交流　龍田考古会

第Ⅳ章　自然科学分析

株式会社　古環境研究所

1．下谷遺跡の種実同定

１．はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

２．試料

下谷遺跡Ｂ11区１号貯蔵穴、Ｂ12区７号貯蔵穴、Ｂ13区13号貯蔵穴、Ｂ13区14号貯蔵穴、Ｂ14区17号貯蔵穴より採取された選別済みの植物遺体６点である。

３．方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

４．結果

（1）分類群

樹木８が同定された。学名、和名および粒数を表１に示し、主要な分類群を写真に示す。

〔樹木〕

マツ属複維管束亜属　*Pinus subgen. Diploxylon*　毬果　マツ科

黒褐色で卵形を呈する。種鱗先端の外部に露出する部分は扁平５角形であり、その中央にはへそがある。

ツブラジイ　*Castanopsis cuspidata Schotty.*　堅果　ブナ科

堅果は広卵形を呈し、先端に花柱が見られる。

イチイガシ　*Quercus gilva blume*　堅果・殻斗　ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、先端に明瞭な花柱を持つ。花柱の先端は直上かやや内側に向き、殻斗壁が厚い。

殻斗は輪状紋をもち基部から先端に向かって直線的な椀状を呈する。

コナラ属アカガシ亜属　*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*　堅果・殻斗・ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、表面は平滑である。先端に花柱を持つ。

殻斗は黒褐色でゆるやかな椀状を呈し、輪状紋がある。

コナラ属　*Quercus*　堅果　ブナ科

破片であるため属レベルの同定にとどまる。

クスノキ　*Cinnamomum camphora Sieb.*　種子　クスノキ科

黒褐色で球形を呈する。一条の稜線が走りその中央が突起こす。

ヤブツバキ　*Camellia japonica L.*　種子　ツバキ科

種子は黒色で三角状楕円形を呈し、一端に点状のへそがある。

エゴノキ　*Styrax japonica Sieb. et Zucc.*　核　エゴノキ科

黒褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面に３本の溝が走る。

クロキ　*Symplocos lucida Sieb. et Zucc*　核　ハイノキ科

長楕円体を呈し、粗面である。

（2）種実群集の特徴

全て樹木種実で、特にイチイガシ堅果、コナラ属アカガシ亜属の堅果が数多く同定された。少数ではあるがマツ属複維管束亜属毬科、ツブラジイ堅果、クスノキ種子、ヤブツバキ種子、エゴノキ核、クロキ核がみられた。

1）Ｂ11区

・１号貯蔵穴

イチイガシ堅果が非常に多く、ツブラジイ堅果を含む。

2）Ｂ12区

・７号貯蔵穴

コナラ属アカガシ亜属堅果が多い。ツブラジイ堅果をわずかに含む。

3）Ｂ13区

・13号貯蔵穴

コナラ属アカガシ亜属堅果が非常に多い。

・14号貯蔵穴

イチイガシ堅果が非常に多い。

4）Ｂ14区

・17号貯蔵穴

コナラ属堅果、イチイガシ堅果が多い。

表1 下谷遺跡における種実同定結果

分類群			B11区	B12区	B13区		B14区
学名	和名	部位	1号貯蔵穴	7号貯蔵穴	13号貯蔵穴	14号貯蔵穴	17号貯蔵穴
Arbor	樹木						
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	毬果		3		1	1
Castanopsis cuspidata Schotty	ツブラジイ	堅果	17	4			
Quercus gilva Blume	イチイガシ	堅果	113		2	180	27
		堅果・殻斗	5				
		殻斗	1				
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	堅果	9	20	90		
		殻斗			1		4
Quercus	コナラ属	堅果	4	2	1	6	52
Cinnamomum camphora Sieb.	クスノキ	種子		2			
Camellia japonica L.	ヤブツバキ	種子			1		
Styrax japonica Sieb. et Zucc.	エゴノキ	核					
Symplocos lucida Sieb. et Zucc	クロキ	核		4			
Total	合計		149	35	95	187	84
Unknown	不明植物遺体		0	4	9	0	4

5．種実同定から推定される植生と農耕

同定された種実はいずれも大型種実であった。大型種実は移動性が低いとされ、ブナ科のイチイガシ、コナラ属アカガシ亜属が多量にみられることから遺構周辺にイチイガシ林を主とするカシ林が分布していると考えられる。イチイガシ、コナラ属アカガシ亜属、ツブラジイは食用にもなり、イチイガシ、ツブラジイは渋抜きをせずに食べることが出来る。

参考文献

渡辺誠（1975）縄文時代の植物食．雄山閣，187p.

佐竹義輔ほか編（1989）日本の野生植物．平凡社

南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会,p.276-283.

下谷遺跡の種実

1　マツ属複維管束亜属毬果　1.0mm

2　ツブラジイ堅果　1.0mm

6　イチイガシ堅果　1.0mm

7　イチイガシ堅果・殻斗　1.0mm

8　コナラ属アカガシ亜属堅果　1.0mm

9　コナラ属アカガシ亜属堅果　1.0mm

10　クスノキ種子　1.0mm

11　ヤブツバキ種子　1.0mm

12　エゴノキ核　1.0mm

下谷遺跡の種実

2. 下谷遺跡の樹種同定

1．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2．試料

試料は、下谷遺跡のＢ11区１号貯蔵穴、Ｂ12区７号貯蔵穴、Ｂ12区８号貯蔵穴より出土した木材４点である。

3．方法

カミソリを用いて、試料の新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、折線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。道程は解剖学的形質及び厳正標本との対比によって行った。

4．結果

結果は表１に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

シロダモ　Neolitsea sericea Koids.　クスノキ科　　図版１

横断面：小型でやや薄壁のいくぶん角張った道管が、単独あるいは２個放射方向に複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔、及び階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は少なく10本以内である。放射組織はほとんどが平伏細胞で、上下の縁辺部の１～２細胞が直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は上下の縁辺部の１～２細胞が直立細胞からなる異性放射組織方で、１～２細胞幅である。

以上の形質よりシロダモに同定される。シロダモは本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ15cm、径50cmに達する。材はやや軟らかく、建築、器具、薪炭などに用いられる。

センダン　Melia azedarach L. var. subtripinnata Miq.　センダン科　　図版２

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、やや疎に配列する環孔材である。孔圏部外の道管は単独または２～３個複合して散在し、年輪界付近の小道管は群状に複合する。道管の径は徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管および中型の道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんど平伏細胞であるが、上下の縁辺に方形細胞が現れるものもある。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、１～４細胞幅である。まれに上下の縁辺に方形細胞がみられる。小道管および中型の道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりセンダンに同定される。センダンは、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ30cm、径１mに達する。材は強さ中庸で、建築、家具、器具などに用いられる。

ガマズミ属　*Viburnum*　スイカズラ科　　図版３

横断面：小型でやや角張った道管が、ほぼ単独で均一に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は数十本である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、１～10個の直立細胞からなる単例のものと、１～４細胞幅で、細長い紡錘形の多例のものとからなる。

以上の形質よりガマズミ属に同定される。ガマズミ属には、ガマズミ、ゴマキ、サンゴジュなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑の小高木で通常高さ10m、径30cmぐらいである。樹木は庭園、生垣、防火樹などに、材は旋作、小細工物などに用いられる。

５．所見

同定の結果、下谷遺跡のＢ11区１号貯蔵穴の木材はシロダモ、Ｂ12区７号貯蔵穴はセンダン、Ｂ12区８号貯蔵穴はガマズミ属であった。シロダモ、ガマズミ属は、暖地に生息する常緑樹で、センダンは暖地の海岸沿いに分布する落葉高木である。いずれの樹種も本遺跡の周辺地域に分布し、生育していたと考えられる。

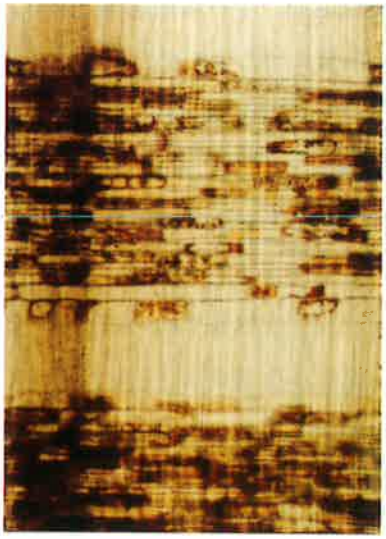
参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

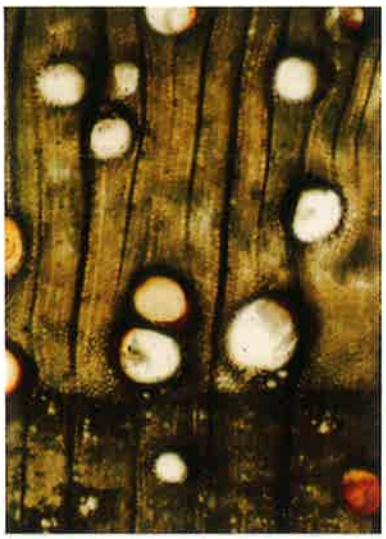
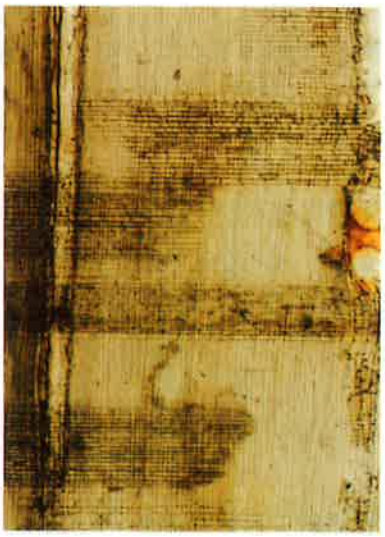
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296p.

下谷遺跡の木材



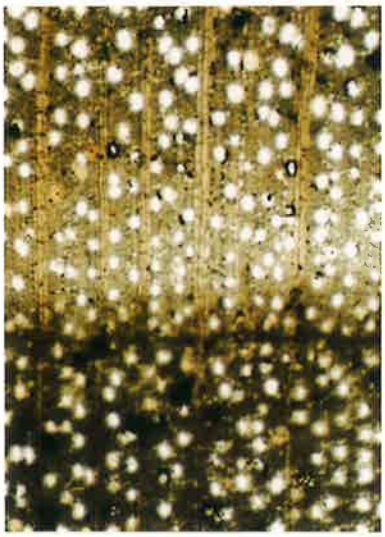
横断面 ―――― ：0.5mm　放射断面 ―――― ：0.2mm　接線断面 ―――― ：0.5mm

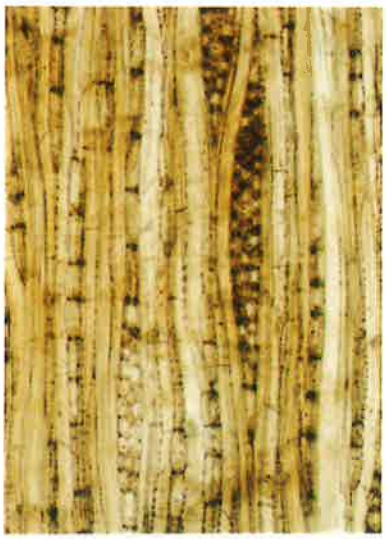
1．　B11区 1号貯蔵穴 シロダモ

横断面 ―――― ：0.5mm　放射断面 ―――― ：0.5mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

2．　B12区 7号貯蔵穴 センダン





横断面 ―――― ：0.5mm　放射断面 ―――― ：0.5mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

3．　B12区 8号貯蔵穴 ガマズミ属

下谷遺跡の木材

第Ⅴ章　まとめ

1．ドングリ貯蔵穴について

今回の下谷遺跡の発掘調査においてドングリ貯蔵穴19基を検出した。その貯蔵穴の形態は、そのほととんどが円形あるいは楕円形状を呈しており、長径100cm以上の貯蔵穴と80cm前後の貯蔵穴に区別できる。貯蔵穴の掘り込みもほぼ垂直なものが多く、袋状を呈する貯蔵穴は検出できなかった。Ｂ13区の貯蔵穴は利用を考えてある程度の間隔をおいて構築されており、使用上の不便さはないのに対して、Ｂ11区・Ｂ12区に位置する貯蔵穴は近接して構築されており、また、その貯蔵穴にも切り合い関係があるため貯蔵穴の新旧関係が明確にできた所は大きな成果であった。貯蔵穴の内部にはイチイガシなどの堅果類の多くが外皮完存のままで出土しており、他に松の実・木片・人頭大の礫などが入っている貯蔵穴もあった。地形的にはＢ12・13区に営まれた地点は、地山全体そのものが西から東側の海岸部に沿って傾斜しており、地山が堆積層である黄褐色粘質土で、湧水を利用して貯蔵穴を構築したことが考えられる。貯蔵穴底面での標高は９号の1.02ｍが最も低く、12号の1.75ｍが最も高くなっており、いずれも現汀線より高い位置に営まれているようである。

下谷遺跡をはじめ近年ドングリ貯蔵穴の発見は九州近辺でもかなりの数にのぼっており、鹿児島県では東黒土田遺跡から縄文草創期の隆帯文土器を伴って貯蔵穴が検出されたのをはじめ、同花ノ木遺跡からは塞ノ神式土器に伴って、また、熊本県轟貝塚からは前期の貯蔵穴が検出され、佐賀県坂の下遺跡からは中期後半から後期前半にかけての貯蔵穴が検出されている。山口県岩田遺跡においても晩期の岩田Ⅳ式に伴ってかなりの貯蔵穴群が検出されている。これらの貯蔵穴は、そのほとんどが単一の検出ではなく群集化しているのが特徴である。長崎県下で見てみるとこれまでに縄文時代から弥生時代にかけて６遺跡で発見されている。福江市の中島遺跡では縄文後期の貯蔵穴12基、多良見町伊木力遺跡では縄文前期22基と後期の３基があり、大村市黒丸遺跡では縄文晩期の貯蔵穴62基、郷浦町名切遺跡では縄文中期と晩期の貯蔵穴が30基と群集している。この傾向は弥生時代にも引き継がれ、平戸市津吉遺跡では弥生前期の貯蔵穴３基、田平町里田原遺跡では弥生中期初頭の貯蔵穴30基、北有馬町今福遺跡では弥生中期から後期初頭の貯蔵穴１基と顕著に見られる。このような各地の出土例を見てみると、貯蔵穴に覆い屋根をしたものやフタを用いたものも見られる。本遺跡の場合は、礫が貯蔵穴内に見られたことからフタの存在も考えられる。また、アク抜きか貯蔵かの問題も含まれるが、ツブラジイは渋ぬきをせずに食することができるとのことであり、遺構の数の多さや湧水が見られることから、両者を兼ね備えていたものと思われる。さらに14号貯蔵穴内には磨石も供伴したことで、ドングリなどの堅果類の調理方法を、改めて裏付ける結果となった。今後の調査いかんでは、今回の調査区の東側には未調査の貯蔵穴もありさらに多くの貯蔵穴が確認されるものと思われる。

縄文時代全般にわたった植物採集活動は、当時において重要な食料獲得の手段であったと思われる。この点、西北九州で縄文後期に漁撈文化が発達する時期においてもドングリ貯蔵穴が検出されることからもうなずけよう。

下谷遺跡のドングリ貯蔵穴は貯蔵穴内の状況にも若干の違いを見せている。内部に礫が落ちこんだものAタイプ（1・3・4・5・7・10・12・13・14・17・19号）、礫を有しないものBタイプ（9・15・16・18・21号）、貯蔵穴の底部にあるものCタイプ（11号）、AとCタイプをかねているものDタイプ（13号）、貯蔵穴上面に礫があるものEタイプ（6号）の五つに分類することができる。特に13号と14号貯蔵穴は堅果類が2層に分かれて保存されていたと思われる。貯蔵穴の蓋は、大小の木材や枝材で覆うものが認められた。また、これらの蓋材が水によって流失しないよう重石として乗せられていた礫が内部に落ちこんだ状況で確認されたものも認められた。このことは、礫全体は貯蔵穴構築時点では遺構内になく、貯蔵穴上面にあったことを意味している。また、礫は包含層においてひろく認められる礫とは異り、大形のものが用いられ、形状が平らなものが多く、重さを必要とする機能を有していたと考えられる。7号貯蔵穴は貯蔵穴の外部を覆う木組が貯蔵穴内部より多量に検出し、木材を利用して円形に太い丸材で囲み、底部に丸材の樹皮を敷き並べてあった。他の貯蔵穴よりは丁寧な造りであった。しかし、検出した堅果類には相違はなかった。いずれの貯蔵穴も縄文後期層から切りこまれた堆積層の地山を底部としている点で共通している。また、構築された地形状の部位は、より低い位置にあって、湧水の豊富な位置が選ばれている点でも共通している。以上の点より、貯蔵穴内部に認められた礫は、本来貯蔵穴の上面を被覆した板蓋をもち、その浮遊防止を目的として板蓋の上に置かれた可能性が強い。

本来ドングリ貯蔵穴は湧水などのある水際に設置しており、ドングリ貯蔵穴を検出していない部分についてはあまり水に浸からない場所にあたりドングリ貯蔵穴部分は常に水に浸っていた部分であったと思われる。

2．出土遺物について

縄文後期の土器区分については、胎土に滑石の粉末を混入している後期阿高式系土器である坂の下式土器などを主体とする一群、北久根山式土器を主体とする一群、三万田式土器を主体とする一群に分けられる。

ここでは土器論にまで展開するまでには出土資料が乏しいためまた、筆者の力量もないため、それぞれの土器型式とセット関係の石器を中心にして、近隣で比較的まとまって検出された遺跡について、その特徴を捉えていくこととする。

坂の下土器（南福寺式土器を含む）を主体とする段階では、狩猟・漁撈具として、黒曜石製の鋸歯をもつ石鏃・石鋸・石銛をセットとして持つのがこの時期の特徴である。このようなセット関係は唐津市徳蔵谷遺跡で発見されているため、この時期の特に海岸部の遺跡の特徴として捉えることは可能であろう。伐採具としては、小形のノミ状石斧と大形石斧がセット関係になるようである。石器製作の剥片剥離技術については、剥片を見る限りにおいては、縦長剥片の数も多く、剥片の剥離面が交互に剥離した痕跡を持つ剥片があり、鈴桶型刃器技術法（以下鈴桶技法）との関連が考えられる。鈴桶技法そのものについては剥片鏃との関連から次の段階の北久根山式土器（鐘崎式土器を含む）の時期

に発達するものと考えられるが、このために鈴桶技法がこの時期に看取されるのであろう。

次の北久根山式土器（鐘崎式土器を含む）を主体とする段階では、狩猟・漁撈具については剥片鏃でほぼ占められ、剥片鏃に依存する率が高くなっている。石銛については、大形の定形的な安山岩製の出土が減少あるいは大形剥片鏃に取って変わるものと考えられる。剥片鏃の製作に深く関連するつまみ形石器も多量に出土する。

三万田式土器は、熊本県などの内陸部の遺跡に見られ、土偶・十字形石器・扁平打製石斧の出土などそれまでにはなかった遺物が検出されることから、新たな生業形態の出現との関連の中で発生したものと考えられる。長崎市深堀遺跡の報告の中では、すでに十字形石器がみられ、剥片においては縦長剥片が看取されるなど、先に挙げた北久根山式土器（鐘崎式土器を含む）の石器群の様相と、次の三万田式土器の石器群の様相を併せ持った文化がそこに介在するようである。いずれにせよ剥片剥離技術については鈴桶技法によるものか否かの検討は今後必要となろうが、縦長剥片を主体とする技術は三万田式土器までは引き継がれていくものと思われる。

県内の坂の下式土器から北久根山式土器を主体とする遺跡は、外海に面した漁撈を中心とする文化圏で、今後坂の下式土器以降の時期の石器文化をさらに詳細に検討することが縄文後期における漁撈文化の盛衰を考えるうえで重要である。九州の中期から後期、ひいては晩期に関する時期区分については、現在混沌とした状況にあり、いままでの編年観そのものについても見直しの段階にきているようである。坂の下式土器（南福寺式土器を含む）から北久根山式土器（鐘崎式土器を含む）の時期は石銛の機能については田島龍太氏により石鋸＋鋸歯状尖頭器（鋸歯尖頭器）と安山岩製大型石銛による刺突漁を峻別して考えるべきであるとの指摘のようにそこには時間の経過に伴う変容があると指摘されるようになった。田島が指摘するように、鋸歯尖頭器と石銛が機能的に相違することは、鋸歯尖頭器が形態や技術的に完成されたものであることや、その大きさが極端に相違することからも判断できる。しかも鋸歯尖頭器出土の遺跡が後期に集中することから、前期漁撈文化で栄えた石銛が後期において鋸歯尖頭器に変容したことが考えられ、そこに一つの画期がみられるものと判断されている。また、黒曜石製剥片鏃そのものは漁撈よりも狩猟との関係のほうに比重があると思われ、次の時期に至ってもなお剥片鏃の生産が多いことや、松浦市田川遺跡でも見られるように内陸部でも盛んに製作されていることからも理解できる。島嶼部を中心とした地域では、依然扁平打製石斧の出土はなく、現在でもその確実な例は福江市水の窪遺跡、松浦市宮ノ下リ遺跡で確認される晩期黒川式期まで待たねばならないようである。

この地域の後期の土器は、後期初頭に編年される坂の下式土器から始まり、この時期に瀬戸内地方の中津式土器や、福田ＫⅡ式が出土することが知られている。また、南九州系の土器として出水式土器・御手洗式土器がやはり出土し、中葉には鐘崎式・北久根山式土器が席巻し、南九州系として市来式が搬入され、西平式・三万田式・御領式土器で終息することを基本としている。このことからも、後期における西九州の土器群は、北部九州や中九州の土器の動きとほぼ連動し、在地の土器を主体としながらも、瀬戸内地方からの影響や、南九州からの土器の伝播があることから、この時期がいかに

複雑な文化の影響を受けていたかを知ることができる。西九州地域では福田ＫⅡ式については伊木力遺跡等でも出土しており、数遺跡ではあるが、確実に出土している。中津式土器については、北部九州や、西有田町坂の下遺跡、唐津市徳蔵谷遺跡で確認されてはいるものの、それ以西では現在のところ検出されていない。このことは、瀬戸内地方からの伝播の波及の在り方を暗示させるものと考える。したがって、本遺跡の場合は、縄文時代後期前葉から後葉とすることができよう。

縄文後期においては、海に生活を求めた対馬暖流型漁撈文化が成立していたことは当然としても、貯蔵穴の検出は、明らかに照葉樹林文化を代表するものであり、決して漁業活動だけに依存した体質ではなく、貯蔵穴の存在や石器の種類から考えれば、植物性資源を利用する一方で漁撈活動も盛んに行われていたことが考えられ、豊かな自然環境の中で照葉樹林文化が栄えていたことが推測されるのではなかろうか。松浦市ではこれまでに見られなかった遺跡の特徴として位置づけをしていきたい。

（中田敦之）

参考・引用文献

杉原壮介・戸沢充則・横田義章　1966　「九州における特殊な刃器技法」　『考古学雑誌』第51巻第３号

森酵一朗編　1975　『坂の下遺跡の研究』　佐賀県立博物館調査研究書第２集

橘　昌信　1978　「縦長剥片」『史学論叢』第９号　別府大学史学研究会

横山順・田中良之　1979　「壱岐・鎌崎海岸遺跡について」『九州考古学』No.54　九州考古学会

安楽　勉編　1985　『名切遺跡』　長崎県教文化財調査報告書第71集

山崎純男　1988　「西北九州漁撈文化の特性」　『季刊考古学』第25号　雄山閣

正林　護編　1987　『中島遺跡』　福江市文化財調査報告書第３集

正林　護編　1989　『佐賀貝塚』　峰町文化財調査報告書第９集

松藤和人編　1990　『伊木力遺跡』　多良見町教育委員会

水ノ江和同　1993　「九州の縁帯文土器」　『古文化談叢』第30集（上）　古文化談叢発刊20周年小田富士雄代表還暦記念論集（Ⅰ）　九州古文化研究会

田島龍太編　1995　『徳蔵谷遺跡（２）』　唐津市文化財調査報告書第63集

古門雅高編　1996　『頭ヶ島白浜遺跡』　有川町文化財調査報告書第１集

町田利幸編　1997　『黒丸遺跡Ⅱ』　長崎県文化財調査報告書第132集

福田一志編　1997　『伊木力遺跡Ⅱ』　長崎県文化財調査報告書第134集

川道　寛編　1998　『宮下貝塚』　富江町文化財調査報告書第１集

福田一志　1999　「西北九州における縄文後期遺跡の特性」　『西海考古』創刊号　西海考古同人会

図　　版

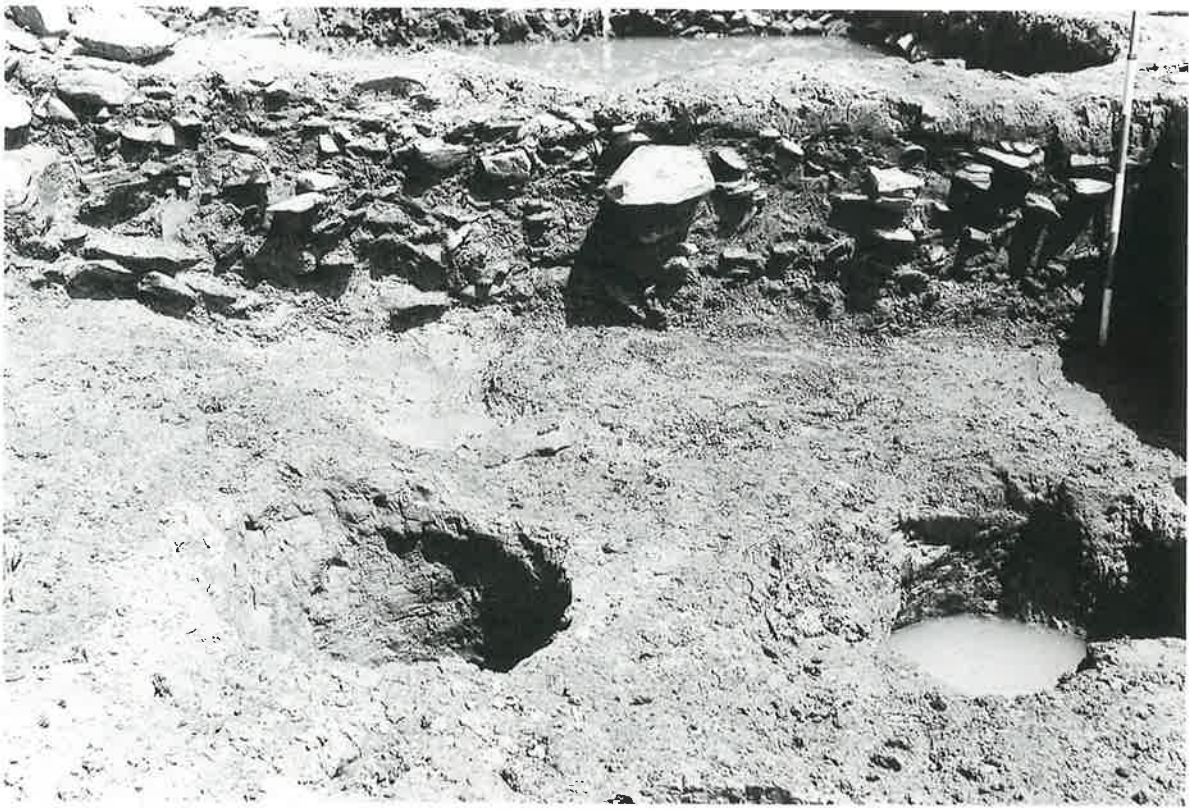
図版 1

A４区北壁土層

B12区北壁土層

図版２

Ｂ13区東壁土層



Ｂ13区北壁土層

図版３

遺物出土状況

遺物出土状況

図版４

１号貯蔵穴

７号貯蔵穴

図版５

７号貯蔵穴

７号貯蔵穴

図版６

７号貯蔵穴

７号貯蔵穴

図版７

８号遺構

10号貯蔵穴

図版８

11号貯蔵穴

12号貯蔵穴

図版９

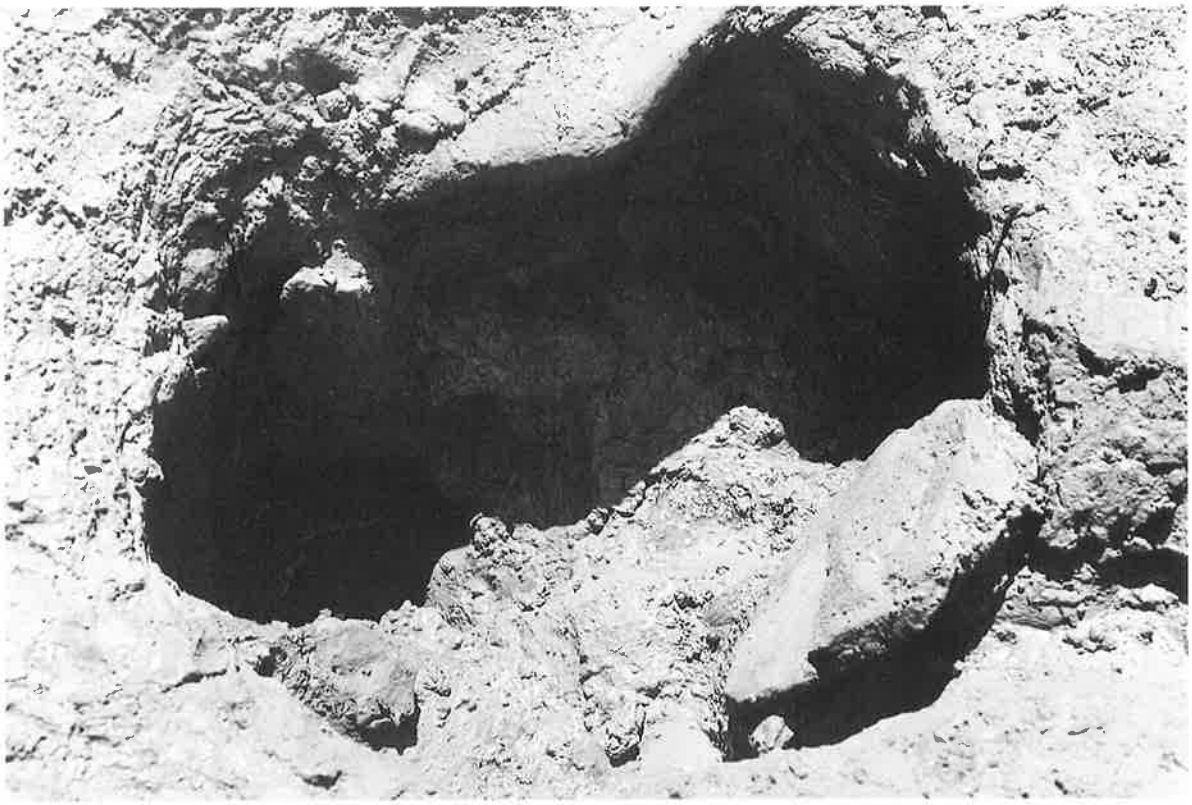
13号貯蔵穴

13号貯蔵穴

14号貯蔵穴

14号貯蔵穴

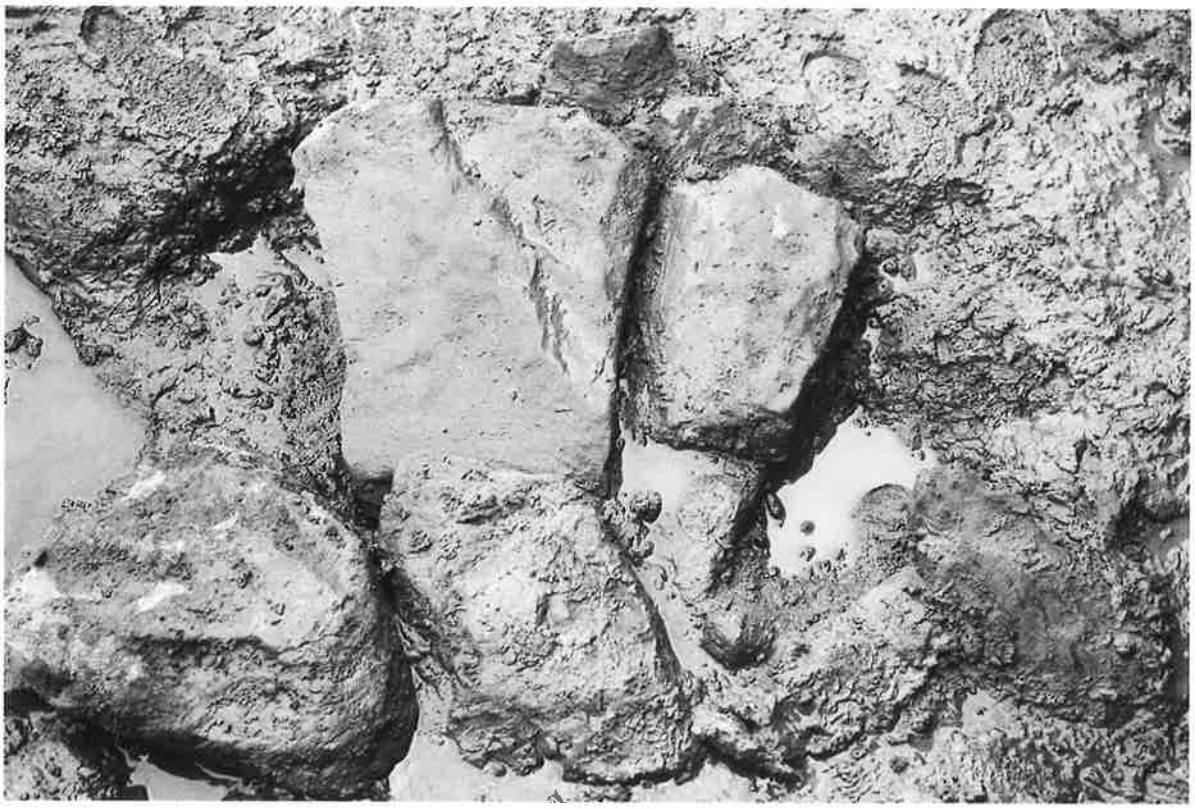
図版11



17号貯蔵穴

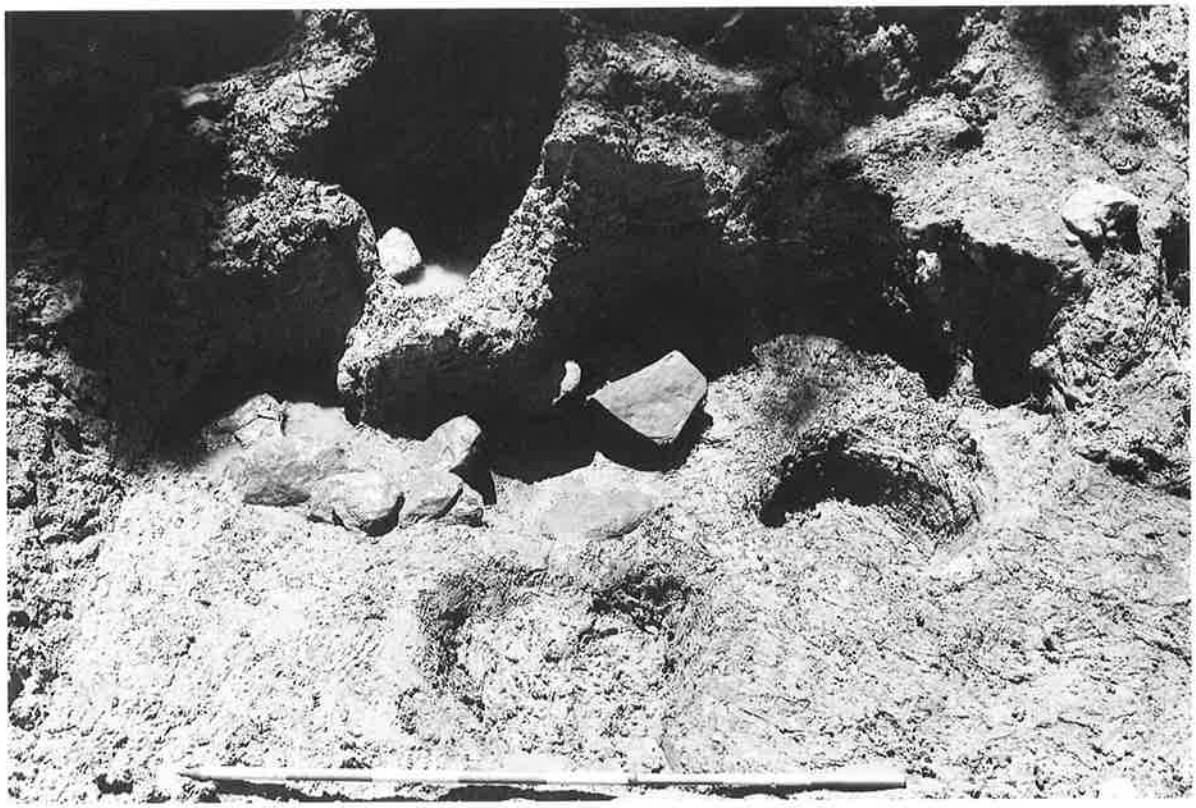
17号貯蔵穴

18号貯蔵穴



19号貯蔵穴

図版13



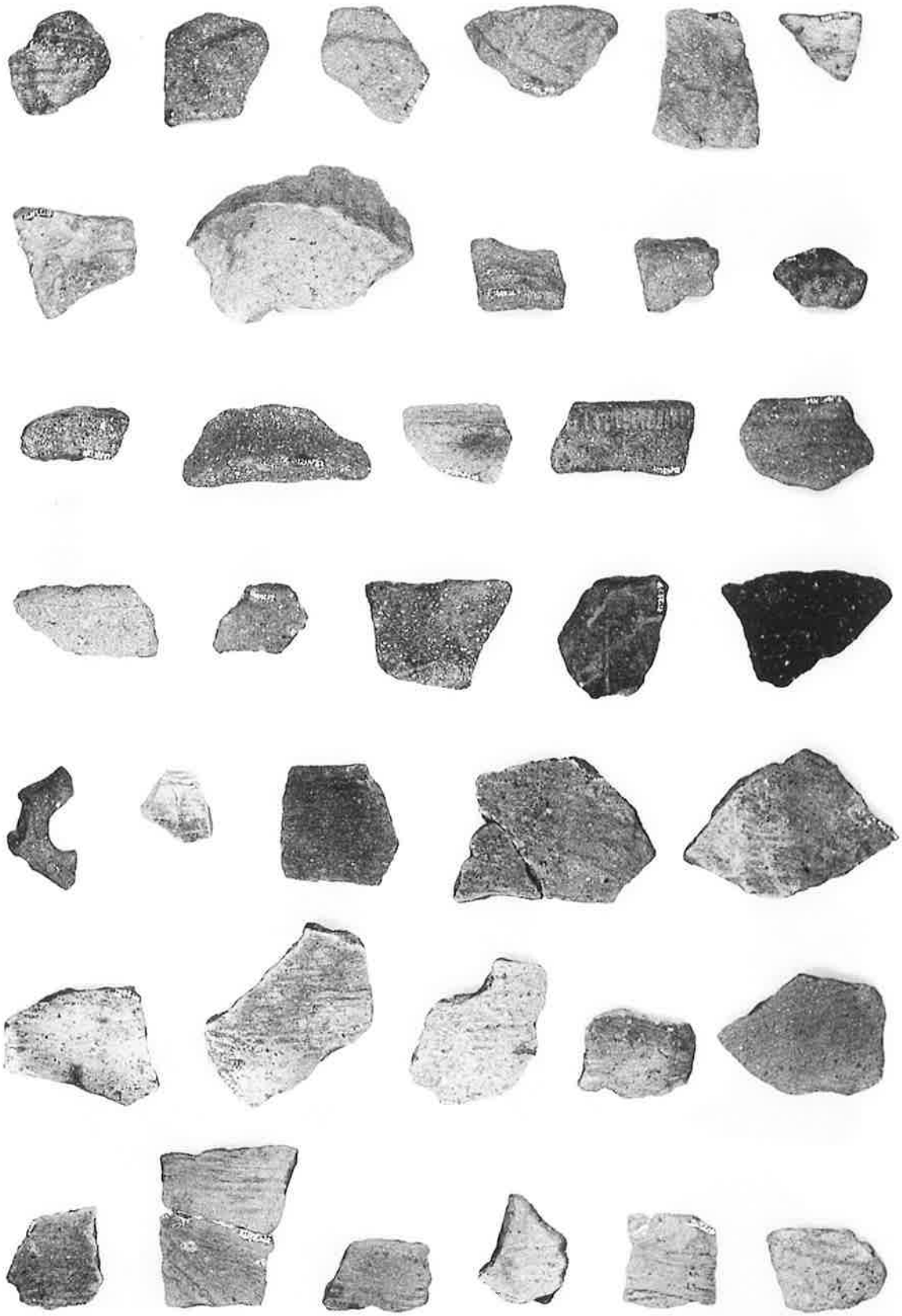
3号～6号・15号・16号貯蔵穴

3号～6号・15号・16号貯蔵穴

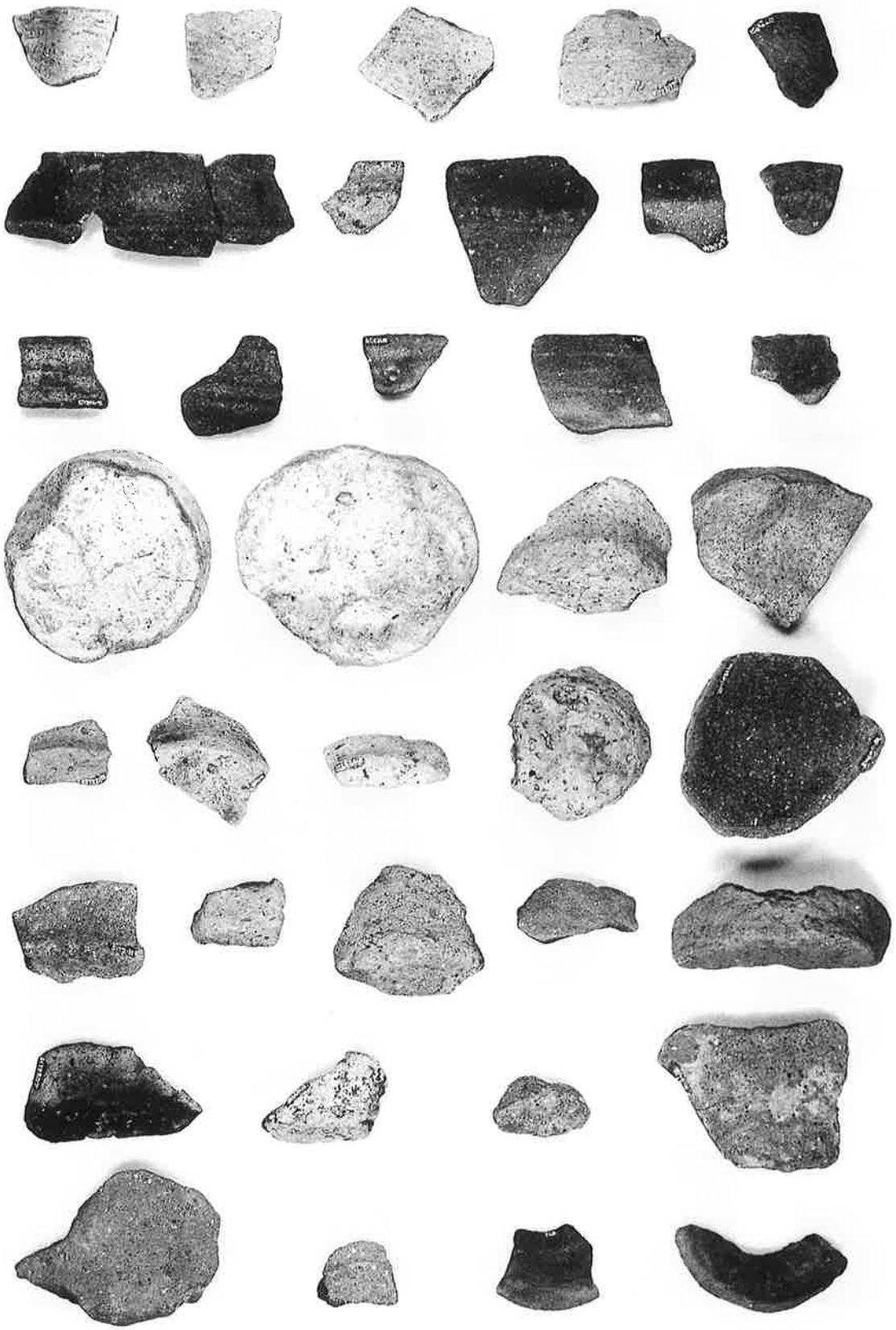
9号～14号貯蔵穴

調査風景

図版15

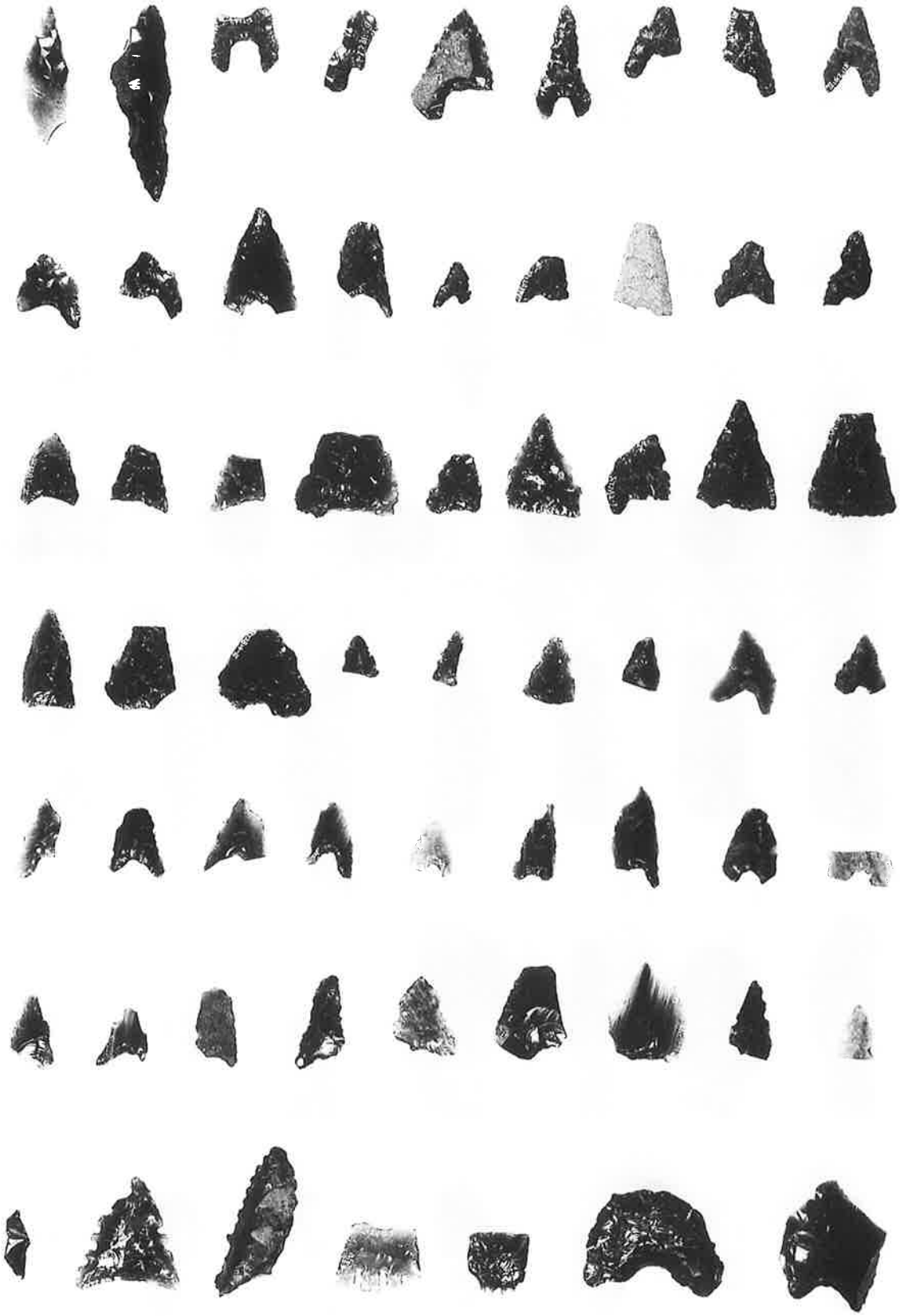


出土遺物①



出土遺物②

図版17



出土遺物③

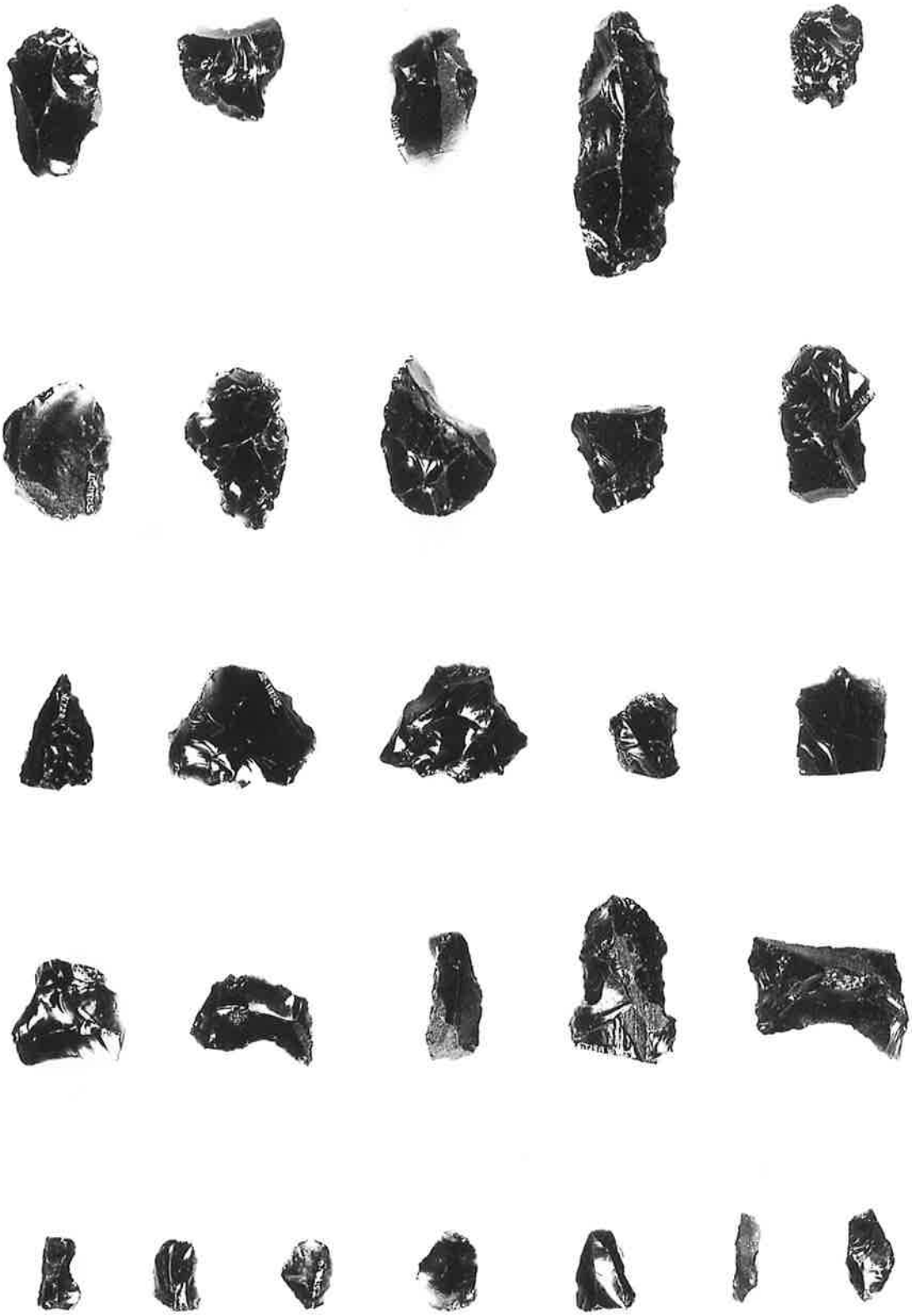
出土遺物④

図版19

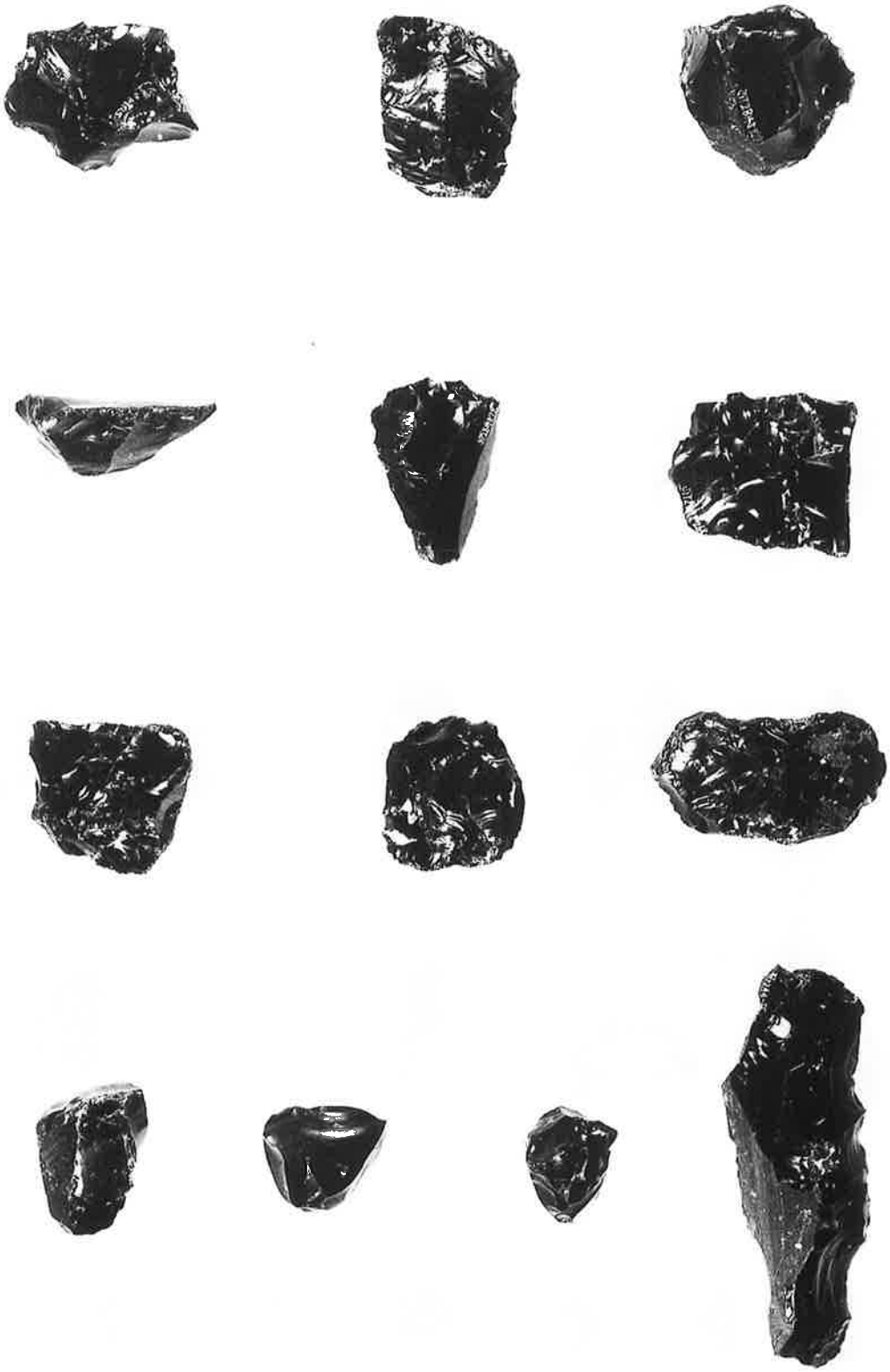
出土遺物⑤

出土遺物⑥

図版21



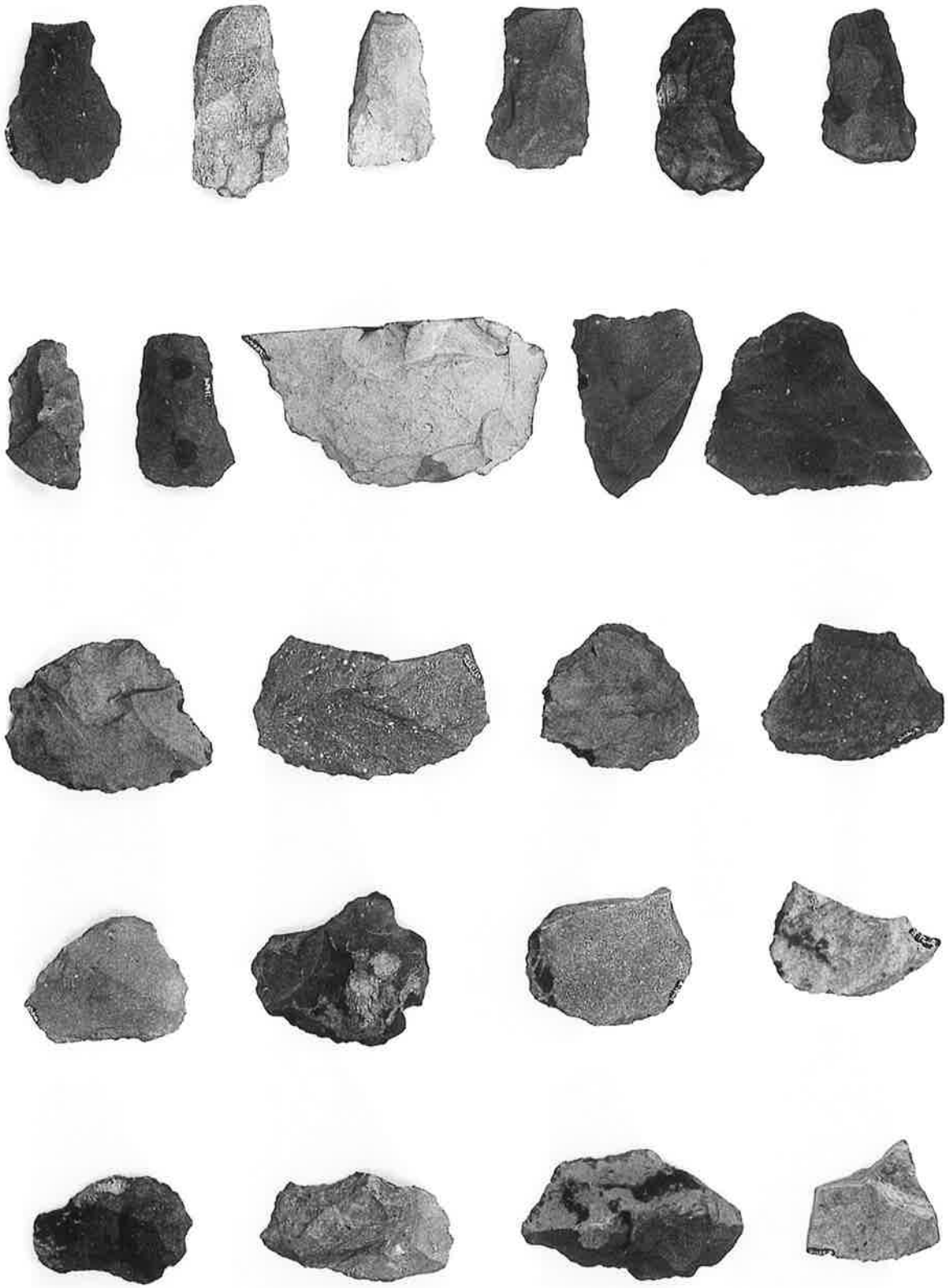
出土遺物⑦



出土遺物⑧

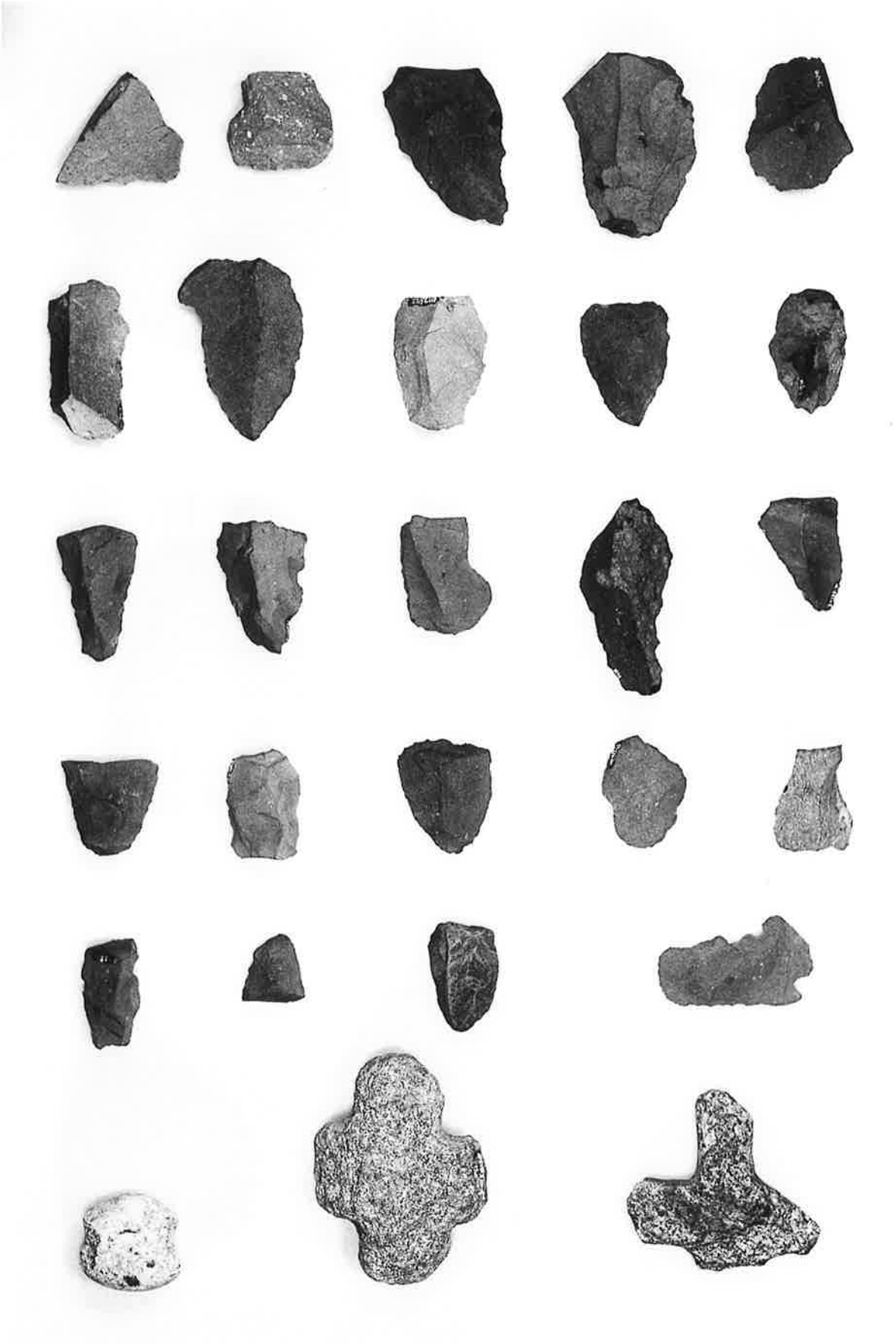
図版23

出土遺物⑨



出土遺物⑩

図版25



出土遺物⑪

出土遺物⑫

図版27

出土遺物⑬

出土遺物⑭

報告書抄録

ふりがな	しただにいせき
書名	下谷遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	松浦市文化財調査報告書
シリーズ番号	第１８集
編著者名	中田敦之・明石拡子
編集機関	松浦市教育委員会
所在地	〒859－4598　長崎県松浦市志佐町里免365番地　ＴＥＬ　0956－72－1111
発行年月日	西暦　2002年３月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
しただにいせき 下谷遺跡	ながさきけん 長崎県 まつうらし 松浦市 みくりやちょう 御厨町 にしこばめん 西木場免	42208	55	33°21′40″	129°38′50″	20000519 ～ 20000722	245㎡	国営農地 再編整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下谷遺跡	遺物包含層	縄文 中世	ドングリ貯蔵穴	石鏃、石銛、石鋸、削器、石核、十字形石器、剥片、後期～晩期の土器、弥生土器、土師器、瓦質土器、染付	

松浦市文化財調査報告書 第18集

下 谷 遺 跡

平成14年３月29日印刷
平成14年３月29日発行

発行　松浦市教育委員会
長崎県松浦市志佐町里免365番地

印刷　株式会社　三　光
佐賀県伊万里市大坪町乙4161-1